

の胸忠口誼、誠心氣色に見れしを、親兵衛馬上に听果て、感ずること大方ならず、原來是和殿門は、孰も義侠の人也
 けり。既に我君の盛徳を慕ひまつりて、俱に歸服の情願あるを、我豈汲引せざらんや。夫賢を薦め士を擧るは、
 人の臣たる職分也。事由を聞え上なば、必や用ひられん。我初は和殿等を知ず、一霎時相戦ふ程に、隨仆しける傷
 瘡兒幾名歟、こゝに在り、遮莫我に神授の仙丹あり、是を用ひば時を移さず、皆立地に愈つべし。先其手下の衆人
 を、召集へずや。といそがせば、寄舎五郎と壇五郎は、怡悦に堪はず言承しつゝ、俱に後方を見かへりて、招けば出来
 る手下の衆人、樹間藥塚の蔭よりして、陸續として近づき來つ、皆親兵衛にうち向ひて、跪居て額を衝ぬはなし。當下
 親兵衛は、代四郎を喚ていふやう、叟よ、和老の腰なる、藥籠に、残れる仙丹猶有ん。开を些ばかりづつ傷瘡兒們
 に、施して起せずや。といふに、代四郎こゝろ得て、腰を撈りて藥籠より、那神藥を拿出せば、紀二六喜勘太手傳ふ
 て、傷瘡兒們に營さするに、喜勘太は又目奴九郎にも、施さんとしてけるを、親兵衛急に喚禁めて、やをれ喜勘太其
 奴は聞きね。我今其奴一人を、憎みて情なきにあらねども、其奴撲傷亟に愈て、身の擗き自由にならば、必又竊盜を
 せん。嚮に我に誤ふに、人の戎衣を剝奪て、那身再生の恩に報ふべし、といひしは盜兒根性ならずや。有恧れば上に
 は我教諭に、従ふに似たれども、歹き癖の改めがたき、底意は今の一言にて知られたり。こゝをもて、他今より、庇
 弱不具て在るならば、一生涯無異にして、其天年を終るべし。この故に我は他にのみ、敢神藥を與へざるは、是情
 なきにあらず、反て慈悲也。仁の術也。惑ひを取て、怨なせそ。と理り切て解諭せば、目奴九郎は敬頷して、悲し
 やしからば、我のみ歟、坐脚車に法衣、世に墨染の住不樂て、鉦を敲きて終りやせん。哀しきかな。と伏沈む、程
 しもあらず、傷瘡兒們は、神藥こゝに即効あり、傷愈痛消散して、氣力日來に十倍の、歡びに堪ざれば、皆聳然と身を
 起して、跪きつゝ親兵衛を、伏拜こと數回、奇也々々。と稱贊の、聲を合せて感ずれば、影計の衆兵、いへばさら
 也、寄舎五郎壇五郎は、俱に奇に驚き敬服して、親兵衛に向ひていふやう、寔に大人の妙用巧致、華陀蒼公もしかざ
 るべき、活人の手段、不可思議なる哉、敬て慕し、試んと思ふ一議あり。憊いへばとて目奴九郎が、談言に做ふに
 あらず、小可們は這人數の外に、猶甲冑十四五領、弓矢鳥箭銃あり。いかで今日御加兵の贅代に、伴當達にまゐら
 せまく欲す。この義を饒し給はんや。と請ふを親兵衛うち聞て、現和殿門は、我君の、盛徳を仰ぎまつりて、新參の
 義あれば、今よりして後、我も伴當們も、則是祿を與にすべき、朋輩なれば、介意すべくもあらず。況や今日の戰
 場に、我隊の士卒に素肌の者あらば、人必怪むべく、且外聞も宜しからず。然るを今幸ひに、和殿門兵具に餘りあ
 るをもて、开を贈んといはるゝは、折から便宜といひつべし。譬近にあるならば、拿出しね。といそがせば、寄舎五
 郎等歡び承て、隨即手下の兵毎に、恁々と吩咐れば、其兵每身を起して、遠からぬ茂林の内より、最大なる箒箒を、
 十箇あまり背駝來つ、蓋を開きて拿出す、甲冑十二三領、銃砲七八挺ありけり。則之を呈すれば、親兵衛聽て代
 四郎等に、分ち與へて撰甲しむ。當下代四郎紀二六、喜勘太夥兵伴當們は、寄舎五郎壇五郎と、其毎に名對面して、
 歡びを述て身を固る時、親兵衛がいふやう、我隊の兵は、皆連枷あれば、器械に事を欠ねども、然しも侍品たる者
 の、農具をもて敵に向んは、面正しくもなき所行なるべし。見るに銃砲も、七八挺あるならずや。开を叟と直塚と、
 喜勘太と夥兵五名は、携てゆくこそよかめれ。伴當六名は故のごとく、連枷を放つべからず。とくくせよ。とい
 そがせば、大家唯々と諾なひて、準備はやく成りしかば、親兵衛樹抄を仰瞻て、憶す時を移し、かば、朝日は既に高く
 昇りぬ。辰牌にやなりぬべからん、いでく。といひつゝも、騎馬の泥障を蹴鳴らして、青海波々々々、我今御方の
 陣所にゆかまく欲す。然ども、いまだ其捷徑を知らねば、去向を備に任せてん、やよ疾我を導きね、大家續け。と喚
 かけて、馬に拍れ走らすれば、皆後れじと相従ふ、親兵衛が隊の兵は、姥雪代四郎を首にて、伴の奴隷に至るまで、僅
 には十四名、今是に加るに、二四的寄舎五郎、須々利壇五郎、其每六十五名、合せて七十九名たり、一百名に足ら
 ねども、勇將の下に弱卒なければ、皆大敵を怖るゝ者なく、深山を出る若鷹の、振鷺を驅る威勢奮然、其儔にはあ

るべき、活人の手段、不可思議なる哉、敬て慕し、試んと思ふ一議あり。憊いへばとて目奴九郎が、談言に做ふに
 あらず、小可們は這人數の外に、猶甲冑十四五領、弓矢鳥箭銃あり。いかで今日御加兵の贅代に、伴當達にまゐら
 せまく欲す。この義を饒し給はんや。と請ふを親兵衛うち聞て、現和殿門は、我君の、盛徳を仰ぎまつりて、新參の
 義あれば、今よりして後、我も伴當們も、則是祿を與にすべき、朋輩なれば、介意すべくもあらず。況や今日の戰
 場に、我隊の士卒に素肌の者あらば、人必怪むべく、且外聞も宜しからず。然るを今幸ひに、和殿門兵具に餘りあ
 るをもて、开を贈んといはるゝは、折から便宜といひつべし。譬近にあるならば、拿出しね。といそがせば、寄舎五
 郎等歡び承て、隨即手下の兵毎に、恁々と吩咐れば、其兵每身を起して、遠からぬ茂林の内より、最大なる箒箒を、
 十箇あまり背駝來つ、蓋を開きて拿出す、甲冑十二三領、銃砲七八挺ありけり。則之を呈すれば、親兵衛聽て代
 四郎等に、分ち與へて撰甲しむ。當下代四郎紀二六、喜勘太夥兵伴當們は、寄舎五郎壇五郎と、其毎に名對面して、
 歡びを述て身を固る時、親兵衛がいふやう、我隊の兵は、皆連枷あれば、器械に事を欠ねども、然しも侍品たる者
 の、農具をもて敵に向んは、面正しくもなき所行なるべし。見るに銃砲も、七八挺あるならずや。开を叟と直塚と、
 喜勘太と夥兵五名は、携てゆくこそよかめれ。伴當六名は故のごとく、連枷を放つべからず。とくくせよ。とい
 そがせば、大家唯々と諾なひて、準備はやく成りしかば、親兵衛樹抄を仰瞻て、憶す時を移し、かば、朝日は既に高く
 昇りぬ。辰牌にやなりぬべからん、いでく。といひつゝも、騎馬の泥障を蹴鳴らして、青海波々々々、我今御方の
 陣所にゆかまく欲す。然ども、いまだ其捷徑を知らねば、去向を備に任せてん、やよ疾我を導きね、大家續け。と喚
 かけて、馬に拍れ走らすれば、皆後れじと相従ふ、親兵衛が隊の兵は、姥雪代四郎を首にて、伴の奴隷に至るまで、僅
 には十四名、今是に加るに、二四的寄舎五郎、須々利壇五郎、其每六十五名、合せて七十九名たり、一百名に足ら
 ねども、勇將の下に弱卒なければ、皆大敵を怖るゝ者なく、深山を出る若鷹の、振鷺を驅る威勢奮然、其儔にはあ

らかねの、土に腎冷されて、立まくすれど、跛兒の、命活野目奴九郎は、身さへ人をも怨たる、面を皺めて目送りけり。目奴九郎の事、この下に話なし。爾程に、この朝里見太郎丸義通君は、信乃現八等が、二たび寄隊と闘戦の、危きを援んとて、みづから岡山の陣營より推出て、其方を投て士卒を找る、其路いまだ遠からぬ、相川の松原にて、長尾判官景春が、岡山へと推寄來ぬる、數千の獵兵に相逢て、前後中央三隊に蓋れし、闘戦違あることなれば、里見の隊長東六郎、潤鶴手古内、振照俱教二、白濱七浦朝夷門はさら也、突然に來て里見を援る、政木大全、石龜次團太、越鯉三、向水五十三太、枝獨鉆素手吉、其手に從ふ篙師舵工、俱に長械をうち振て、苦戦に時を移したる、就中、政木大全孝嗣は、文武兼學べる壯士にて、弓箭執ては、爲朝の、猿臂を旋らす手段あり。器械に縁る剽賊は、牛孺丸にも劣らざるべき、一人當千なるものから、景春も亦東國にて、一二を争ふ勁將なるに、且軍學に疎からず、孫子の兵法、諸葛の八陣、鞍馬八流、楠氏の七策、習ひ得ずといふことなければ、士卒を使ふに手脚の如く、みづから屢敵に中りて、力戦いまだ雌雄を決せず。有愆りし程に、長尾景春の最愛の子に、長尾太郎爲景と、喚做たる少年あり、今茲十五歳の初陣にて、其鏡雄親に劣らず、父に俱してこの地に來つ。この日は爲景遊軍にて、隊兵僅に三百餘名、弱からん方を援んとて、敵の隙を覘ふ程に、里見の先鋒の頭人なる、潤鶴手古内振照俱教二は、この時既に戦ひ疲勞れて、隊竟に亂れしかば、爲景得たり、と士卒を找めて、自家の隊長梶原 景澄樋口維龍を相援けて、透もあらせず殺積す、勢ひ宛 虎彪の像く、爲景みづから鎗を舞して、只一刺に手古内を、馬上より突落して、又俱教二に傷を負すれば、一陣竟に亂れ馳きて、總敗軍にならんとす。浩處に、葛西のかたより、撰甲たる武者一騎、驀直に走せ來ぬる勢ひ、宛飛鳥の像く、從ふ兵五六十名、皆神行の術をや得けん、疾走ること駿馬に後れず、衆に先だつ騎馬武者は、近づく隨に聲震立て、其里なる敵は旗の花號にて、しるき白井の 景春ならん。愆いふ我を知るや知らずや。里見殿の御内にて、八犬士の隨一人、犬江親兵衛尉金碗仁、こゝに在り。同藩の老兵姥雪代四郎與保、

登崎の若黨直塚紀二六、新參の野武士の隊長、二四的寄舎五郎、須々利壇五郎門こゝに在り、こゝにあり。と名告被け、相叫りて、手々に引提し鎧砲を、拿直し敵に向ひて、連發てる銃响と、俱に揚たる喊聲に、驚き見かへる衆敵の、眞中へ親兵衛馬乗入れて、鎗もて四方八面を、中るに盡せて難仆し、毆き伏せ、刈拂ふ、奮勇獨歩の擗きに、代四郎紀二六喜勘太門、夥兵伴當二四的、找む須々利と隊の兵等さへ、奮撃突戦せざるもなければ、里見の先陣後陣の隊長東六郎、振照俱教二、及義通の隊下なる、鳥山眞人、朝夷三彌、白濱七浦是に氣を得て、奮勇始に十倍したる、士卒一致の大刀風に、然しも長尾の勅敵なるも、三陣一度に殺積されて、或は瘡を負ひ或は撃る、鮮血に泣り盾に跌き、皆蟻子離を散せる像く、滾と取れて逃走れば、景春爲景怒りに堪はず、罵禁れども甲斐なかりける、梶原樋口、宇佐美直江も、逃る士卒に誘引れて、將帥歩兵の差別なく、葛西のかたへ亂走しぬるを、犬江親兵衛政木大全、其隊兵姥雪直塚、須々利壇五に二四的、當る時運に向水、水に由縁の石龜も、藻東鯉三、枝獨鉆も、自家の衆に先だちて、刈拂ふ敵に息をも養れず、漏さじとぞ逐たりける。畢竟犬江親兵衛が、歸東の忠戦、時を得て、石陣鐵馬も湯と做すまでに、鋒先殊に剛かりし、長尾判官景春の、勝誇りたる數千の勅兵を、一擧に取り走らせて、義通君の初陣に、武門の花を開せぬる、後の話説甚麼ぞや、分教あり。

奔馬追北大江籠暴禽舊恩報得 成孝完三前言

こは後回の題目のみ。猶詳に知まく欲せば、又下回に、解分るを聴ねかし。

作者云、この編は必六卷にして、續出すべきものなり。何とならば、本回に犬塚信乃、犬飼現八、杉倉武者助等が、寄隊の敵將、顯定成氏憲房と、三面二度の闘戦ありて、いまだ勝負を決するに速ばず。又里見義通の、野戦難義の時、政木孝嗣、石龜次團太、越鯉三、向水五十三太、枝獨鉆素手吉と、其徒數十名を以て出て來て、義通の苦戦を援る話説ありて、いまだ孝嗣次團太鯉三等の來歴を、こゝに具に寫すに遑あらず。この故に、第百六

十七回までを、今番續出して、是等の事を詳にして、看官に蚤く示さまく欲しけれども、刊行の書肆は、一板毎に、五卷を可として、六卷を欲せず、一卷多くて價を増せば、賣買の爲に妙ならずといへり。こも亦故ある事なれば、愚意を枉て、其好に従ざることを得ず。敢請、江湖上億兆の君子達、那闘戰の勝敗と、孝嗣門の來歴を、知まく欲さば、又復後板五卷を續出す日を俟ねかし。

作者又云、本傳は始より、九輯百七十回にして、必局を結んとおもへり。こもをもて、九輯は四十五卷也。是を先例の如く、一輯五冊に做すときは、則十三輯也、又第七輯八輯の七冊八冊なると、又分卷を加え數まへて平均せば、十六七輯に至るべし。そを九輯に約めしは、初念の已ことを得ざる故なれば、回の數も只管に、百七十回にして、筆を絶まく欲せし故に、本編は一卷に一回なるもあり。或は一回を盡て二卷に做たるもこれあり。しかれども、今よく思へば、本傳百七十回にては局を結ぶに尙足らず。然しも夙案の腹稿は、譬ば統ねたる緒の如し。是を文に做すときは、其緒を解延すに似て、思ひしより、長くならざることを得ず。こもをもて、今より初念を改めて、一百八十許回にして、大團圓に做まくす。然れば言又この義に及べり。

南總里見八犬傳 第九輯 卷之四十 終

八犬傳第九輯下帙下套之中後序

智は知也、人生れて耳目の及ぶ所、物として知ざるはなし。知るといへども其理を極めて、是を辨ずるにあらざれば、智の要を爲さず。格物致知は、則學者の先務也。雖然是を知る而已にして、慧なき者は悟るに由なく、才なき者は智を致すこと得ならず。この故に智慧と云、才智と云、佛説に所云般若は智慧也。智と慧と具足して、悟るべく致すべきを才と云。智慧も亦大なる哉。蓋智と慧と、相佐けて用を做すや、譬ば人の身に魂と魄と有るが如し。魂は則心神也、魄は則神系也。人の心の欲する所、魄の資助にあらざれば、手を動し足を運し、動靜云爲、座臥行止、一も其如意ならず。智慧と才幹と相佐けて、謹致すことあるも、是理をもて知るべき而已。然るに智に上智あり、邪智あり。上智は良善の事に用ひて、毫も奸惡の事に移らず、進退必度に稱ふて、動くといへども跌かず、是を賢才睿智といふ。才は智の乖なる者也、是を以難しとす。才なく智なきは、則下愚なり。又邪智は奸惡の事に用ひて、仁義の心なく、進むを知りて退くことを思はず、動くときは人に害あり。奸民盜兒の才あるは、多く是なり。或は又良知にして心正しく、博く學び得て奇才あれども、命凶にして用ひられず、且勢利に附かず、富貴を羨まず、同好同志の友稀なれば、但いにしへの聖賢を師とし友として、隱居放言、春日秋夜を長しとせず、常に書を著して、もてみづから其智を籠にしぬる者あり。元の羅貫中、清の李笠翁是に庶とせん歟。是よりの下、唐山にて云稗官者流、國俗の云戲作者是なり。そが中に、彼大筆と陋筆あるは、猶白狐と野狐あるがごとし。桂も柴も一藤に、人見て並て狐と呼べども、白狐は野狐の野に遊ばず、功德無功德殊なればなり。然るを、柱に膠せる村學究は、玉と石とを擇も得せず、或は彼才を忌み、或は彼名を嫌む者、其書の出ると聞く毎に、遮りに眉をうち蹙めて、是等の漢、かくの如き學問あ

りながら、何とて儒になりて章句を誦し、子弟に教て、眞の道を傳へざるや。只是意匠を費し紙筆を費し、多く梓叢に災して、世を誣ひ俗を惑せる、是憎むべし、厭ふべし、と眩くも間これあり。是等は腐亂の偏見而已、蓋博く學得て、退きて戯墨に遊ぶ、彼大筆なる作者は然らず。大凡經籍詞章の學びは、和漢の先哲、叮嚀に注疏して、學者を教導くものから、世俗は皆教を厭ふて、無用の空言を歡び、或は又奇を好みて、人の好夕を聽まく欲す。こゝをもて、達者の戯墨に遊べるや、事を凡近に取て、誼を勸懲に發し、空言以塵俗の惑ひを覺す者、水滸西遊、三國演義、平山冷燕、兩婚交傳の五奇書あり。文章巧致至奇至妙、其深意を推考れば、則齊諧を鼻祖として、反て三教の旨に違はず、釋氏の所謂善巧方便、五百の阿羅漢、二十五の菩薩の功德に伯仲す、といふとも過たりとすべからず。しかれども水滸の如きは、彼土なる具眼の者も、よく其深意を悟れるなし。況や此土の俗客婦幼は、漢文俗語を一行も、讀得べきにあらざれば、通俗解語の一書なきは、其書舶來して、久しくなりぬるも、其趣を覘ふに由なし。只俗客婦幼のみならず、をさく、戯墨を事としぬる名達人も、よく唐山の俗語を讀得て、師としぬるや、否を知らず。吾其冊子を一卷だも、取て閱せざれば也。但作者の用心は、寧勸懲の二字にあり。然るを淫娃を旨とせる者、時好に媚、時好に稱ふて、書肆の鄙を賑せるは、吾羨ざる所也。因て昨の非を知るよしあり。寛政文化の間に、吾戯墨なる臭冊子てふ、合巻物の畫本には、いと恥かしきまでに、いかにぞや、と思ふもなきにあらす。然れども近會は、年々に吾編次ぬる合巻物の本は、新編金瓶梅を除くの外、一書も新作あることなければ、小利を欲する似而非書肆等が、吾舊作なる物の本を、恣に再板して、畫を新しく、書名を更めたるもあり、更めざるも、皆新板と偽り記して、看官を欺き作者を蔑如にしぬるあり。是等はいかなる心ぞや。既に去歲の冬も、文化中吾舊作なる、養八丈てふ、繪冊子の繪を改めて、恣に翻刻して、新板と偽り記し、もの、出たりと聞えしかば、吾是を詰りて新板の二字を削らせにき。然るを其書肆、今茲も亦懲りずまに、文化三年丙寅の春出たる吾舊作、大師河原撫子誦てふ

畫冊子を、又恣に再板して、本文の畫を減し、端像二頁を附増て、像贊をさへ書加え、詞書をも増減して、畫は覆刻に由らず、事皆恣にして、是を新板と偽り記し、を、告る者あるにより、速に其偽を咎めて、云云といはせしかども、素より利の爲に理義を辨知らぬ、烏滸の癡漢なれば、只強情を事として、亟に承服せずと聞えたり。畢竟兒戲の冊子なれば、恠る僻事をせらるゝとも、久しく世に貽るべくもあらす。三十五年前の舊作なれば、今の婦幼は欺れて、新板也と思ふもあらむ。又吾舊作なる物の本を、多く藏めたる壯俊達は、ふるしといふとも、必知るべし。然るを一時の瞋怒に乗して、彼烏滸人の己が自恣、傍若無人にて、理義も廉恥も辨知らぬに、しうねく懲さんは大人氣なし、と思ひ棄てものせざれども、實に是憎べし。彼も此も吾虚名を愈り知らるゝ、戯墨久くなりぬれば、名號をしも誣て賣らるゝ、烏滸の僻事を、見も聞もしぬるうるさよ。本傳既に末三卷六回になりたり。速に局を結びて、四方の看官に、彼杣木樵る斧の柄の、朽しを知らせまく欲りす。然らても老眼衰耗して、編述不如意になりたれば、爰に戯墨の筆を絶つべし。嚮に畫工佐藤正持が、武北の旅舎にて、八犬士を畫きて、贈り來せしに題する歌、

根はひとつ葉ずゑはやつにおく露のあはにつどひて玉となりぬる

粟と安房とは同訓にて、盧生が夢は、五十年、又吾戯墨も五十年、只一炊の隙ならて、嗚呼久しい哉、吾衰へたる、吾夢にすら思ひ瘵の、腹稿將に盡さまくす。後序に代たる口狀は、老の諄言ながくしとて、飽れやすらむ。已なむ、已なむ。

天保十一年陽月

養 笠 漁 隱

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中總目錄

卷之四十一 第六十七回

奔馬逐北大江籠暴 雛禽

再戰場親兵衛會五知己

同 卷 第六十八回

衝突三陣靈豬奏再功

報答舊恩成孝全前言

卷之四十二上 第六十九回

拾出野坑親兵衛受賜

掃除風葉諸勇士立談

同 卷 第七十回

神藥施得敵兵再生

現八拔箭活水死將

卷之四十二下 第七十一回

操三神變伏姬華三獅子初陣

調舊君信乃詳父祖忠義

卷之四十三、四 第七十二回

定正水路行大兵

音音江中燒一船

同 卷 第七十三回

借二數艘大角柱義武

達二降旗豐俊愚定正

同 卷 第七十四回

萬里一水道節射小仇

八百八人毛野鷹大敵

卷之四十五 第七十五回

南彌六顯靈祐子

禮儀失時時有爲

同 卷 第七十六回

禍福反覆三士同功

追兵屢逼忠臣拯主

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中總目錄終

里見八犬傳。一百八十一回。以多歲苦樂將盡稿。因而自贊曰。知吾者。其唯八犬傳歟。不知吾者。其唯八犬傳歟。傳傳可知可知。傳可擬可知。(上傳以下十一言。讀以音) 敗鼓亦藏革以做良醫。

辛丑孟春

七十五翁 蓑笠又戲識



第一百六十七回

奔馬北るを逐て大江暴鯨禽を籠にす
再戰場に親兵衛五知己に會す

再説、大江親兵衛は、長尾景春の堅陣を、一瞬間に殺顔して、逃るを透さず趕ふ程に、政木大全、姥雪代四郎、直塚紀二六、石龜次團太、越鯉三、向水五十三太、枝獨鉆素手吉、漕地喜勘太、大江の影兵等、又伴當に至るまで、勝に乗たる勢ひ劇しく、皆後れじとて相從へば、義通の先鋒の頭人、振照俱教二弘經も、刀痕に撓まず兵を找めて、奔馬に鞭を鳴らしけり。當下亦義通も、みづから敵を趕んとて、馬を其方へ乘向給へば、辰相急に走らせ來ぬる、馬より閃りと下立て、主の鑣に携りていふやう、料ざりける中途の勅敵、鬪戰難義に速びし折、豫其名を聞きりたる、正木孝嗣とやらんが義旗の援けあり。是だに得がたき幸ひなるに、又思ひかけざりし、京師より大江親兵衛が、折よくこの地へかへり來て、然しも勅敵景春を、伐敗走らせしは、是十二分の御利運に候はずや。然るを飽す思食て、漫に逃るを趕ひ給はば、窮猫狗兒を爪被る、害なからずや、量りがたかり。疾岡山へ還らせ給へ。意ふに長尾景春が、其隊の兵を多く將て、此路條へ出て來ぬるは、岡山の御陣に戍兵寡きを、他夙く聞知りて、攻拿まく欲せしにや候はむ。那里は君の知し召す如く、國府臺と相對ひて、涯るに箭斫河をもてしぬる、要害の地にて候を、倘敵に据られなば、臺の城も後竟に、守りがたくや候はむ。とくく還らせ給へかし。と理り切て諫しかば、義通は景春の、敗れ走りしを、趕も果さて中途より、還んことの本意ならねど、豫父君の嚴命ありて、身の後見に諫られたる、家の老の諫言

を、听ざらんはさすがにて、信乃現入等が鬪戰の、安危什麼と左に右に、今も心にか、れども、現岡山を喪はば、後悔其甲斐なかるべし、と思ひ復して默然たり。當下東六郎辰相は、士卒を整歸陣を示して、俱に義通に相俱して、岡の陣營に返し入るゝに、自家の刀瘡兒は、潤鷲手古内を首にて、士卒に多くこれあれども、皆幸ひに窮所を外れて、死に至る者なかりしかば、辰相則雜兵數十名に相昇せて、臺の城へぞ遣しける。爾程に大江親兵衛は、自家の士卒に先だちて、乘たる名馬青海波の、蹄に信せて驀直に、敵を趕ふこと急なりければ、既に迥に退き去れる、長尾景春の一軍は太郎爲景殿して、五百個の士卒を領て、後陣に在り。今趕近づく大江親兵衛の、小勢なるを見かへりて、冷笑ひつゝ、毫も謀がず、枯茫花いと深き處に、銃手の歩兵を兩三名伏置て、擊落させんと構たり。こは退口の草伏とて、趕來ぬる敵の猛將勇士を、擊捕るべき爲なるを、親兵衛蚤く猜すれども、敵に望みて今さらに、止るべき勢ひならず。況や名馬青海波の、疾こと飛鳥に彌増たれば、憶はず近くなる隨に、那草伏の歩兵等も、枯茫花の裏よりして、火蓋を鑽て撞と發せる、銃砲の窺ひ皆錯て、那身に中らず怪し蜚たり。以ある故八犬士は、各身を衛る靈玉あり。然ばこの時親兵衛が、胸邊より燦然たる、靈光兩三道晃めき出て、那歩兵等の眼を射ければ、歩兵等は憶はずも、吐嗟とばかりに銃砲を、捨て驚き立つ程に、五十三太素手吉胞弟兄は、俱に長械を挟みて、走りてこゝに來にけるを、親兵衛馬上に見かへりて、やよ那奴等を饒しなせを。といふより早く五十三太素手吉、こゝろ得たり。と長械を、拿直しつゝうち向ひ、悍く勇る勢ひに、中るべくもあらざれば、逃んとせしを走らせず、胞弟兄長械振閃めかして、件の三個の敵兵を、矢場に毆き仆しけり。其間に大江親兵衛は、馬を敵中へ乗入れて、群立つ敵の衆兵を、鎗もて多く難仆す。一騎の奮勇四下を拂ふて、縦横無算に駈破れば、長尾の士卒驚き怕れて、憶ずも逃走れば、長尾爲景怒りに得堪ず、士卒を罵る聲も烈しく、獨馬上に親兵衛と、鎗を合せて、一上一下と手を盡す。少年なれども、獍勇にて、堅を摧く本事あり、武藝足らざるにあらねども、然とて大江に敵し得んや。鎗法漸々に衰へて、既に危く見え

しかば、爲景の老黨近習、十名許返し來つ、主を援けて親兵衛を、撃んと競ふ程しもあらせず、政木孝嗣、姥雪與保、五十三太等が隊の乾兒の毎、齊一咄と走り來つ、推隔相柱えて、六七人に瘡を負せ、残る三人を五十三太門が、械の牙にぞ斃しける。當下大江親兵衛は、既に疲れし爲景を、刺さば一鎗に殺すべきを、素より仁慈の本性なれば、猶一霎時疲勞せて、怯むを得たり、と横に拂へば、爲景は鎗を持たながら、馬より墮と確落されて、俯平張りつ蠢きて、身を起さんと拵しを、親兵衛透さず馬上より、鎗直し幹當もて、爲景の背を押えて、毫も動せざりしかば、爲景は面を赤うしつ、耶と聲かけて幾番歟、反起まく欲するに、譬は千曳の石をもて、壓に措れしごとくにて、喘も出ずなりにけり。浩處に直塚紀二六は、漕地喜勘太以下の伴當、及五個の夥兵と俱に、走りてこゝに來にければ、親兵衛ヤヤ。と夥兵を喚て、頼もて虜兒を指示せば、夥兵等は、唯々と應も果す、下果りつゝ爲景に、緊しく索を掛にける、然ば長尾の士卒們は、或は撃れ、或は落して、四下に敵のあらずなりしかば、親兵衛は孝嗣次團太三が、恙もあらで、剩、五十三太素手吉其每さへ、義通君に従ひまつりて、這戰場に在るを見て、且訝り且歡びて、馳て馬より下立つ程に、振照俱教二弘經は、東六郎辰相の、指揮に依て、一千有餘の隊の兵と、新參の野武士、二四的寄舎五郎、須々利壇五郎、并に其從兵六十餘名と相共に、又親兵衛を相援んとて、今稍こゝに來にければ、親兵衛は孝嗣門に、面談を先聞きて、隨即俱教二門を迎へ勞ひて、却剛才この地方にて、敵の殿の隊長を、擒に做し、事の顛末を、簡様々々。と告知せて、又いふやう、我豫より人の噂に聞知りぬ。長尾景春の家子に、太郎爲景と喚做すあり、少年なれども胆勇にて、武藝十二分の本事ありとかいへり。意ふに今我生拘りたる、勇少年は、必是爲景ならむ。和殿は他を牽せ還りて、この義を開え上給ひね。我は舊友政木大至門に、料すも再會の情義を罄して、伴ふて御陣へまゐらん。景春遠く逃亡たれば、這里に多兵は無益也。隊の兵は皆俱し給ひね。といふに弘經敬服して、且羞て答るやう、卑職等は和殿と昨今にて、對面は今を始なれども、其武略勇敏の、今古に獨歩し給ふよしは、豫聞しに違は

りける、和殿のみかは犬塚大飼、俱に是豪傑の士にて、萬人の敵といひつべし。其備にはあらずし、卑職等は斗符の細人、驍附の功を欲するものから、响の鬪戰に散ばひし、隊の兵亟に聚合ざりしかば、後の戦ひに得あはずなりしは、面なくこそ候なれ。と勸解れば宿舎五壇五郎も、亦共侶にうち佗て、遲參の罪をす謝しにける。當下俱教二又いふやう、今は當所に要なしとて、卑職が預りまつりて、將て來にける隊の兵を、遺なく俱してかへりいなば、上の御旨に違ふに似たり。景春愛子の生拘られしを、聞かば怨に堪ずして、途より返し來つべき歟、是も亦知るべからず。卑職は二三百個の雜兵を從へて、其生口を牽せて退らん、この義を饒したまはんや。と請ふを親兵衛聞あへず、否とよ鬪戰の勝負は、隊兵の多少に依るにあらず、機に臨みよく變に應じて、其進むこと脱兎の如く、其退くとき處女の似く、未戰に安危を知る者は、必勝ずといふことなし。なれども上の御意とあるを、推辭まつらん、は最も畏し。爾らば隊兵五百を留めて、其餘を俱して退り給へ。しかすれば上の御意に悖らず等分なれば越度なかるべし。と諭すを俱教二強難て、竟に其議に任せつゝ、精兵五百名を拔出して、是を親兵衛に遞與し從せて、却孝嗣次團太三、五十三太素手吉門に名對面しつ、今日の義戰を、叮嚀に勞ひ謝して、且親兵衛に歡びを舒て、そが儘爲景を受拿りつ、隊の兵に牽せて隊伍齊整と、馬をはやめて暴河原なる、岡山を投て退りけり。爾程に大江親兵衛は、猶思ふよしあれば、夥兵三名を召よせて、事恁々と吩咐れば、皆こゝろ得て直走りに、葛西のかたへぞ赴きける。恁て又親兵衛は、喜勘太に吩咐て、敵の棄たる革柄を、五六枚拿よせて、亟に主客の座を備て、然而孝嗣門を請ひ坐らせつゝ、其身も坐して對面す。登時親兵衛がいふやう、料らざりける政木主、石龜師弟、向水弟兄、恙もあらで、いと愛たし。就中訝しきは、政木主等三人の上也。いはでもしるき事ながら、今茲四月某の日に、和殿等三名は、結城なる、左右川橋を渡りも果す、敵の連發ちぬる、鉄砲に擊墜されて、推流されし歟、沈みし歟、後に求獵れども知るよしなければ、我のみならず義兄弟等、七犬都て最惜て、今に至て忘るゝ時なし。このよし館も聞し召て、最忝き御

説ありき。然ば又我門八人は、結城よりかへるさに、故ありて徳北なる、落鮎の宿所に居り、程もなく館より、大師父を御使にて、稻村へ召させ給ひて、恩遇孰も淺からず。开が中に我仁は、京師へ使を奉りて、七月の下旬より那地に在り。館の願せ給ひし如く、掛向は最も畏き朝廷より、我門八人に、姓氏を賜りて、金碗宿禰になされき。恁過分き歡びあれば、不測の憂ひなきにあらず。管領政元主の計ひ稟して、副使に参りたる、蛸崎十一郎にのみ、身の暇を賜りて、我身は還ることを饒されず。伴當也ける、那姥雪代四郎叟と、蛸崎の若黨直塚紀二六と、夥兵五名と、若黨奴隸六七名、俱に京師に淹留して、前月廿四日時候まで、同じ憂に沈みて在りしに、我兩館の御盛徳と、諸神菩薩、伏姫神の、冥助にや依りたりけん、虎妖對治の功をもて、稍厄釋て主僕皆還ることを得たりしに、路にて愛馬走帆の、病て客舎に斃れしかば、是等の故に又日を費して、稍信濃路まで來にける程に、我君不慮の軍旅の風聲、漸々に具にて、鎌倉の兩管領、諸將を連ね兵を合せて、安房上總を攻略まくすといふ、事の趣聞えしかば、うち驚きつゝ、去向をいそぐに、上毛より東には、新關ありて過ることを得ず、只得間道を尋索めて、今朝しも武藏豊島なる、千住河まで來にける折、嚮に稻村の城内なる、既に繋ぎ在せたる、これ此名馬青海波の、奇くも河をうち涉して、這方へ來ぬるに逢しかば、訝りながら思ひがけなき便宜にあなれば、馳て這馬にうち乗て、千住河を涉す程に、姥雪直塚、夥兵若黨奴隸等は、或は馬の尾に携り、或は連枷に身を浮して、滔ぎて前面の岸に屈るに、料らざりける小敵あり、戦ひ勝て降參の折、其姓名を聳て聞知る、即野武士の頭領にて、其里に侍る寄舎五郎と壇五郎等也。原是當家へ歸服の情、願あり。是によりて青海波の、來歴も粗知られしかば、只この一隊を従へて、馬の足掻に儘せてぞ、心ともなく御曹司の、御危戦の折に騎著て、勅敵長尾景春を、斐拂ひつゝ復這里に、再戦の勝を得て、和殿等五箇の舊識に、再會の歡びあり。我上は先かくの如し、和殿并に石龜師弟の、再生は故こそあらめ、いかにぞや、いかにぞや。と問るゝ孝嗣次團太等はさらば、側聞せし向水枝獨鉗、この隊の壯俊等も、又二四的須々利の兵母、五百有

餘箇の軍兵まで、皆駭然と舌を巻く、奇談に感嘆したりける。姑且して孝嗣は、親兵衛に向ひていふやう、連愛たき和君の高運、妙用自然に稱ひしは、忠心義胆の致す所、神佛の冥助ならずや、但感心といはんは烏計にて、并て敬服の外候はず。就て我門三人の上は、いはてもしるき四月の時候、俱に和君に從ふて、那日結城に屈る時、和君の歩の蚤ければ、一町あまり後れつゝ、左右川とか喚なせる、野水に架たる圮橋を、渡りゆく程に、誰とは知ず發出す、幾十挺の銃砲に、撃れにけり、と思ひしのみ。といへば次團太語を續て、身を水中に墜せられて、推流されし歟、沈みし歟、我にもあらで候ひき。といへば鯉三郎等も同容、是より後の事はしも、哥々具に説出しね。といひつゝ、傍を見かへれば、五十三大含笑點頭て、却小可弟兄は、關宿に船果し時、結城へ伴を饒されねば、只得船を漕退けて、家路を投て還るものから、遺憾さに堪ざれば、家弟素手吉と商量すらく、和郎はいかに思ふやらん。曩に大江和子に植遇せしより、乾兒們と共に、水路を上總まで送りゆきしかど、素藤とやらんを對治せらるゝ、戰場へは伴れず、僅に落人を擄捕て、賞祿に米を賜りにき。恁て又大江和子は、友人三名を伴ふて、結城の法會に赴くと聞えしかば、我門又是を送りて、水路を關宿までゆきながら、法會の伴を饒されず。勿論辛苦錢也とて、金幾枚歟惠れしかど、錢財は咱等の本意にあらず。修羅の戰場菩薩の法會、其伴にしも省れて、阿容々々としてかへりいなんは、恥赫爽しき事にして、乾兒們に侮られん。我聞關宿より柴船の、結城へ暢ふ小流あり、急流なれども廣からず、其地々々の莊客が、用水にしぬるのみ。この故に巨船は、漕容るゝことを得ざれども、幸ひにして今日我船は、快船なれば易かりてん。いでや結城へ赴きて、驟れて法會を見て退らん。この議什麼と談すれば、といへば素手吉語を續て、小可是をうち聴て、开は最要ある主張也。和子に知られて、叱らるゝとも、分説はいくらもあらん。然らば蚤く潰復せとて、猛可に舵を拿更して、又關宿へ漕戻す程に、既にして日の暮れしかば、只得那里に船を歇て、其夜の明るを俟にき。といへば五十三太、却听給へ、恁而次の日の早天より、邪枝流へ船を漕入れて、結城を投て、浜るに、川幅のいと狭く

て、流急ければ、船罵ます。或は左右の岸に繁り立たる、樹の枝に俺れて、去向見えわかぬ處あり、或は流淺く船塗りて、竿を使ふに由なき處あり。其頭は素手吉を岸に陟せて、船を曳せて溯るに、然らても猶薦ぬ折は、弟兄水に下立て、船を肩擔ぎつゝ辛くして、推もて遣ること幾町なりけん、恚る辛苦に時移りて、日長き四月のかひもなく、結城へは尙二三里もあるべからんと思ふ比、日影は既に斜になりぬ。心連りに焦燥ども、其頭は特に流映くて、せん術もなき折から、と見れば人の浮屍骸、一人ならず三人まで、船に歇りて流れもあへず。噫息々し、と咳きて、竿をもて突流さまく欲するに、細流なれば、遣も反らず、只得又手素吉は、咳きながら湍に下立て、竿をもて其死骸を、突流さまくせし程に、忽地一聲苦と叫ぶを、小可聞つゝ驚て、見つゝ衣を脱捨て、下立て、又其浮屍骸をよく見るに、果して是政木主と、石龜屋の乾父乾兒也。訝しくも亦痛ましき、相識達三人まで、恚る横死に胸潰れて、さてもさても、とばかりに、小可も亦手傳ふて、三個の屍骸を左右して、皆船へ曳乗せて、見れば孰も身體に、銃瘡二三ヶ所づつあり。なれども猶幸ひに、面部胸腹などの窮所にあらず、只是隅と手脚のみ也。然る故にや三人俱に、死したることく見ゆれども、胸膈は温にて、推せば動脈あるに似たり。原來いまだ死絶ざりき。疾水を吐せよとて、一個々々に、舷へ、推掛て、倒にして腹を推すに、孰も多く水を吐きにき。しかれども氣息なし。登時小可素手吉と商量するやう、この人々は昨日關宿にて相別れしより、大江主に伴れて、結城の法會に赴きけん、皆瘡を負ふて水に陥りしは、必是故なからずや。我意ふに、今日那里には、不測の禍鬼起ることありて、聞諺にや及びけん。倘果して爾らには、大江主の安危心許なし。然ばとて、這九死一生なる三人をうち棄て、陸を走りて結城へゆくと、只其安危を知るのみにて、鄙語に云、喧嘩果たる杖三昧になるならば、事に益なきのみならず、反て大江主に恨みられん。所詮船を漕展して、宿所へ還りて、この人々を、活さば結城の安危も知れん、女々しくものを思んや。といひつゝ、傍を見かへれば、素手吉詞を受けて、愚兄の了簡中準なれば、懸て船を漕展すに、急流の降船は、其勢ひ創

に似ず、射箭の如く蚤ければ、其曠昏に關宿まで、戻りつ、猶も力を勤めて、通宵漕もてゆく程に、其詰朝兩國河原なる、宿所へ歸著きしかば、政木主門三人の爲に、醫師を招き、療治を請ふて、膏藥を打せ湯劑を薦るに、死も果せず活もせず。この比又小可は、悄地に結城へ赴きて、和君達の安危を撈るに、那里的風聲隠れもあらず、那一定寺の惡住持徳用、結城の家臣、長城枕介惺利、堅名衆司經稜、根生野飛雁太素頼們が、法會を亂妨の事、且件の僧俗奸虐人們は、皆八犬士に撃懲されて、活恥を曝せし事、又八犬士と、大庵主は、反て結城殿に譽られて、那里を退り給ひし事まで、聞得てかへり來ぬる比より、政木主石龜師弟は、やうやく痊可に赴くものから、撃れし脚の筋縮りて、起居不自由なりければ、垂籠てのみ在したり。といふを五十三太又續て、恚て三伏の夏過て、秋八九月になりし時候、安房より來ぬる商船に、八犬士達の上を諮問ひしに、今はしも八人ながら、里見殿に仕まつりて、瀧田の城内に在り。开が中に大江主は、七月の比使を奉りて、京師へ赴き給ひきといへり。この時三個の客人達は、舊瘡皆なごりなく愈て、手脚自由にして、行も、生平に異なくなり給ひしかば、咱等弟兄折々薦めて、いかで安房へ赴きて、里見殿に仕給へ。那里には犬士達の在るなれば、事成るべし、といひしかど、政木主も石龜叟も、俱に云々と意衷を演て、從ふべくもあらざりき。非如幾まで我家に、歇船にて在りとも、开が厭しきにあらねども、素より富る我身ならねば、錢なく米なく做る折々は、反て這個の客人達の、盤纏を費し米を買せて、養るゝ日も多かりき。といふを孝嗣、咳して、禁めて親兵衛に告るやう、我們三名が薄命なる、且再生の事の顛末は、目今這弟兄が、口狀に具なりき。然ば是等の趣を、いかで和君に告げや、と思ふものから夏果るまで、痼愈ざれば筆も把られず。又七月の比より歟、和君は京師へ使して、安房に在らずと聞えしかば、歸藩の便宜を待のみにて、向水等が義侠の帮助に、我のみならず石龜等さへ、心にもあらぬ長逗留して、做す事もなくありけるに、今番里見家危窮の軍役、敵は則扇谷、山内の兩管領にて、大軍水陸より攻伐まくすと云、檄文を市に掲げて、隠もあらず聞えしかば、咱等はさら也、石龜等も、うち

驚きつゝ人に問へども、和君は京より還れりや、いまだなるやを、誰もかも、知るよし絶てなかりしに、本月の五日に至りて、扇谷の間諜兒の、安房よりかへり來ぬるあり。原是向水の乾分なりければ、五十三太隨即他を哄誘して、兩敵の祕事を撈るに、大江主は、京よりいまだ還らず。この他、大阪は軍師にて、六犬士は防禦使たり。寄隊は則簡様々々、と水陸の隊配を叫び説示するに、國府臺の寄隊の大將は、山内顯定主と、足利成氏主と、兩旗にて、副將は山内憲房主也。兩隊の軍兵六萬餘騎、實は四萬有餘なるべし。今朝しも五十子の城より發向して、龜嶼に陣すといひしとぞ。咱等この義を傳聞て、猛可に主人弟兄と、石龜師弟を閑室に、聚合て密談しぬるやう、那大江は我恩人也、爾るに京師へ使して、今番の大事に逢ずならば、さぞ口惜く思ふべからん。我今那人に成も代りて、里見殿の御爲に、いかて一臂の力を盡して、那恩義に報ふべし。恁はいへども、扇谷殿は、是我舊君也、既に恩怨地を易て、讐敵に等くとも、那隊に向て弓を彎き、箭を飛さんば我本意にあらず。聞くに國府臺へ寄隊の大將顯定父子と成氏主には、我稟たる恩なく、義もあらず。況や國府臺の城には、里見義通君大將にて、防禦使犬塚大飼が、城を出て寄隊の大軍を、逆るといふにあらずや。然らば尤便宜の地なり。先や那里へ赴きて、時分を料り變に應じて、里見を援けて、寄隊を敗らん。この義什麼、と談ずれば、石龜師弟、向水弟兄、悦び勇みて、他議に及ばず。主人は情地に乾兒義子に、洵示しつゝ、集合るに、僅に半日許の程に、來會しぬる自家の壯俊、六十餘名に及びける。と告るを次團太受續て、却小可は越路の市人、悍く勇る物部の、八十宇治河の瀬には立ねど、少き時より角觥を好みて、老ても俠耗ねばや、始は犬田大川主に、知られまつりし歡びあり。其後淫婦奸夫に誣られて、身は罪ならぬ罪人に、做りて牢獄に繋れしに、鯽三がゆくりもなく、大阪主の救ひを得て、罪を免れし歡びあり。其後又兩國河原にて、御身に値遇し候ひしより、政木主と共侶に、館山の城攻にも、又結城の法會にも、伴れたる歡びありしに、左右川橋にて必死の大厄、向水弟兄の、資助によりて再生の、歡び四度に及べども、いまだ安房へは得もゆかて、御身は格別、犬田大川、

大阪主にも告ざりしは、今政木主の云云と、陳じ給ひし情由なれば、いかで饒させ給へかし。と陪話れば亦鯽三も、箭の口誼を孝嗣は、推禁めて又いふやう、大江主聞給へ。我兩敵の勝負を規ひしに、昨日までは鬪戰五角の聞えあり。這曉に至りては、寄隊の三將戰車を燒れて、敗績しつと告る者あり。爾るに長尾景春は、那三將の隊に附かず、今朝しも猛に旗を建て、岡山のかたへ赴くを、我聞知りて思ふやう、景春一箇の隊兵をもて、岡山のかたへ推寄するは、那里の空虚を規ひ知りて、攻拿まく欲するならん。倘那壘を奪ひ略られなば、臺の城の大害也。情地に後に跟て行て、機に臨みて撃破らんず、と思ふ心を我衆に、告て情地に將て來にけるに、豈計んや、義通君の一軍は、中途に景春に相逢ふて、他兵を雜へず野戰あり。里見の士卒勇なきにあらねど、景春も亦然る者なれば、早く士卒を三隊に分て、義通君の備在す、其隊をみづから撃亂して、鬪戰難義に見えしかば、咱等孤軍の壯俊等をもて、景春を相柱えて、力戰時を移せしかども、我隊兵は俠客のみにて、軍陣に熟たる者なく、且戎衣も器械も、眞物眞劍ならざれば、勝を拿ること難かりしに、折よく和君の馳著給ひて、一瞬間に景春を、敗り走らせ給ひぬる、そが上に、再戰の獲さへありけるは、我黨の及ばぬ所、雲と壤とに異ならず、感服至極に候。と祝せば、代四郎紀二六們、夥兵伴當いへばさら也、寄舍五壇五と、其隊の兵等は、耳新しき心地しつ、この人にして這友あり、寔に得がたしと、いはぬ者ななかりける。當下大江親兵衛は、甲乙の會話をつらくと聞果て、且歡び答るやう、命芽出たき和殿等の再會、我のみならず大阪犬山、犬川犬田自餘の犬士も、歡び必等しかるべし。以ある哉政木主は、是忠孝の俊傑也。又石龜の義俠なる、且鯽三が其師に孝順なる、又五十三太業手吉が、善に與して任俠なる、積善餘慶の天助虚しからず。或は縹緞の冤屈に陥れられて、白刃頭に蒞むといへども、或は不測の敵の矢丸に撃れて、急河に陥たりといへども、其死を起し生に回すに及びて、乙をもて甲を救せ、丙をして丁を援けしむ。因あり縁ある、同忠同義、造化の默契、妙なる哉。政木生は、曩に我が、素藤對治の日にも戰功ありしかば、只管奉仕を薦めしかども、猶云云

と意表を演て、從ふべくもあらざりしに、今日は又咱等に代りて、御曹司の危かりける、野戰を援けまつりて、劫敵長尾景春を、防ぎ禁めし拵きは、實に一人當千也。矧又石龜師弟、向水枝獨鉗弟兄が、其徒と共侶に、政木生に從ふて、當家の爲に忠戰は、始あり終あり。其舊縁を推すときは、いまだ仕へずといふといへども、皆是里見の家臣に同じ。この義を以聞え上なば、御曹司はまうすもさら也、兩館(義實義成を云ふ)御感大かたならで、恩祿子孫に傳るに足ん。寔に賀すべし、賀すべし。と連りに感嘆したりける。浩處に、嚮に大江親兵衛が、夥兵三名に吩咐て、敵の去向を見て來よとて、遣したりける其兵毎、走りかへり來て、跪居て親兵衛に告るやう、小可毎は、命ぜられしごとく、敵將長尾景春が、敗れ走りし迹を尋ねて、葛西のかたへ赴き候ひしに、景春は、戰に敗れしより、北走ること遙にして、やうやくに旗を建て、散ばひたる、士卒の集るを待に、一霎時の程に皆集合來て、其兵又三千有餘に做りたり。有恚し程に、其子爲景の殘兵の、擊漏されたるが、幾名歟逃かへり來て、事恚々と告しかば、景春聞つ、うち驚きて、且怒り且怨に得堪ず、隊長たる直江宇佐美、梶原樋口等を、遽しく召近づけて、爲景の事簡様箇様。と告知せて且いふやう、我愁に獨立の、志ある故に、山内の隊に附ず、獨岡山の壘を襲ふて、臺の城を拔ま欲し、計較早く翻顔ふて、乳の臭耗ざる義通に、戰ひ負たるのみならず、今番爲景は初陣なるに、漫に血氣の勇を負みて、みづから殿したればこそ、那小猴子大江とやらんが、辱に値にけめ。我子を敵に虜にせられて、阿容阿容として恚てのみあらば、潯我山内に笑れん。先や今亦推寄せて、大江を殺して、義通を、捕へて怨を復すにあらずは、生て二たび還るべからず。とくくせよ。と敦固き暴く軍扇をもて、膝うち鳴らす、臂を張り眼を瞪らし、連りに焦燥つ威勢に、隊長毎は諫難て、猛可に下知を傳へつ、馬には多く豆草を飼せ、士卒には皆腰戰飯を使せて、急に人馬を調へけり。却小可等は、敵の雜兵にうち雜りて、景春の身邊まで、紛れ入ることを得たりしかば、聞くこと具に候ひき。と詞ひとしく注進しぬるを、親兵衛はさもこそあらめ。とばかり答て領くのみ、騒ぐ氣色はなかりけり。

第六十八回

三陣を衝突して靈豬再功を奏す
舊恩を報答して戌孝前言を全す

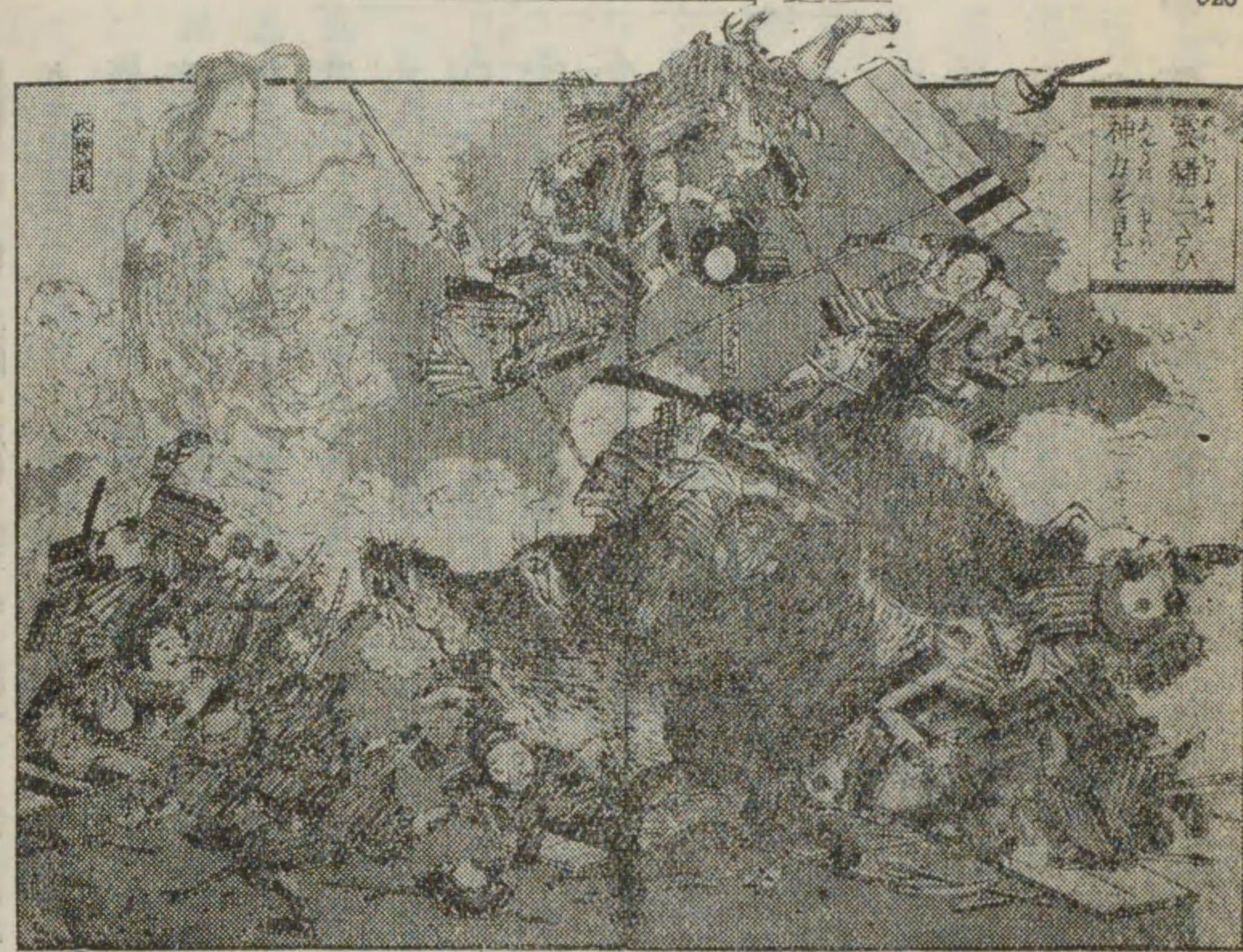
登時三個の夥兵等が、景春二たび推寄せ來つべしといふ、注進を側聞せる。姥雪代四郎以下の衆兵、直塚紀二六、漕地喜勘太、石龜次團太、越鱒三、向水五十三太、枝獨鉗素手吉、須々利壇五、二四的寄舎五郎等に至るまで、皆愕然と目を注して、胸安からずぞ思ひける。开が中に、政木大孝嗣は、敢驚く色もなく、徐に親兵衛に向ひていふやう、淺智の論辯、助言に似て、憚りなきに候はねども、敵は敗られて再聚なるも、猶三千の雄兵あり。自家は僅に五六百なる、而も疲勞れし士卒をもて、怒氣奮勇始に倍せる、敵を迎へて野戰せば、恐らく勝こと難かるべし。誠に愚案に候へども、怒る者は誘ひ易かり。今奇兵をもて彼を征せば、一戰必勝疑ひなかるべし。這頭には繁粒たる、冬樹の蔭あり。今在下に隊兵を分ちて、二三百名を授け給はば、埋伏して敵を敗らん。この義甚麼、と請問へば、親兵衛頭を敬けて、其策、反きならねど、古の聖王の、不從を征し給ひしを思ふに、正路に就て奇兵をもてせず、湯の榮を放ち、武王の紂を誅し、如きは、王者の軍といひつべし。然ば後の世といふといへども、賢君有道の正兵をもて、那亂虐を鎮るに方ては、亦當にかくの如くなるべし。我當富山に在りし時、姫神授與の陣法あり、孫子の八門遁甲の陣是なり。蜀漢の諸葛武侯、よくこの陣を布設て、もて照烈の危窮を救ひしかば、那里の俗は、是を孔明が八陣とも、又八卦の陣ともいへる也。其陣法は簡様々々。と即地に畫して、孝嗣并に頭人等に、教示して又いふやう、今こゝに在る隊の兵は、振照俱教二の分ちし者五百名、五十三太が從類六七十名、二四的須々利の從兵六十餘名、都ては六百三四十名なるべし。今是を八十餘名づつ八に分ちて、八門を守らしむべし。這一門毎の隊長は、政木生姥雪叟と、直塚須々利、二四的五十太、素手吉と我と、八名にて足れりとす。其進退は、我這軍扇をもて指揮せん。皆よく我

手に従ふて、景春を擒にすべし。景春尙この陣をよく知りて、東方、生炆の門より入りて、北方五鬼の死門を突破り、又生門より出るならば、其鬪戦互角ならむ。他知ずして死門より入らば、囊の物を探るが如く、必一人だも漏すべからず。或は又景春、この陣を知らずとも、他も亦然る者なれば、其機を査し、且疑ふて、戦はずして退かば、只緩やかに是を起ふべし、必急に追撃つべからず。他我起ふことの遅きを見て、焦燥て急に反し合せて、三七二十一に突もて蒐らば、胡意軽く戦ふて、詭り敗れて走るべし。却我五個の夥兵と、喜勘太等の伴當は、始よりして、八陣の備に管はて、各銃砲を携て、這頭に故りたる並松の、中枝に躲れうち登り居て、敵の進退を張ふべし。若我後案の如く、景春八陣を突ずして、反て我詭りて、敗れ走るを起ふてこの處に至りしなば、遣り過して後陣なる、敵の馬を撃つしね。景春是に驚き慌て、退かんとしぬる時、我急に引返して、其亂るゝを攻撃たば、勝すといふことあるべからず。大家この意を得よかし。と言叮嚀に説示せば、衆兵都て感服して。指揮に従ふそが中に、孝嗣は殊更に、親兵衛が宏論智計に、いよゝますく敬服して、かくの如き少年は、和漢今昔一人のみ、後の世も類あるべからず。と感じて敵を俟にけり。爾程に長尾景春は、二たび大江親兵衛と、死戦して、擒にせられし其子爲景を、とり復さんと思ひ惻れる、怒に堪ねば毫も擬議せず、みづから眞先に馬を找る、左に樋口小次郎維龍あり、右に梶原後平二景澄あり。直江莊司包道と、宇佐美三郎職政は、其後陣にぞ續きたる。軍兵約三千餘名、天をも掩ふ勢ひにて、故の戰場を投て返し來つ、爲景が事ありしは、這里也けり、と聞く隨に、景春は馬を駐めて、と見れば、敵はまだ退かて、一町許前面にあり。隊長は那大江なるべし。我又推寄來ぬるを聞知たる歟、布備たる陣の光景最奇くして、撃べき所なきに似たり。其爲體、八方に入流の楮幡を建て、其下に軍兵多くあり。例は八箇の陣門ありて、開閉時なく、四方相當り、四隅よく守るが如し。但隱々として雲霧の、其四下に起りて、推包むにやあらんとぞ怪しまる。景春見ること稍久しうして、急に左右を見かへりて、景澄維龍等にいふやう、若們他をいかに思ふや。我聞、唐山古昔の陣法

に、諸葛孔明が八陣あり、とばかりにして、何なるや、我いまだ學び得ざれども、其八陣は攻伐つ者、生門よりうち入て、又生門より出されば、必失ありといへり。那陣這に似たるにあらざや。縦八陣ならずとも、那八犬の奴們は、よく幻術を行ふとかいへば、今厭勝の法をもてせて、漫に撃ば、他が圈套に掛らるゝことなからずや。この故に我又憶ふに、今戦ずして退かば、敵は必隊を亂して、消滅て撃まざせん。其逼るを引受て、自家急に建更して、推包て劫がば、他は小勢也、我は大勢也。那大江奴を擒にせんこと、枝なる果實を挑が如けん。蚤く後陣へ傳へよ。と鼻蠢めかして説示せば、景澄維龍感佩して、隨即包道職政に、下知を傳へて後陣より、退せつゝ引返すを、親兵衛見つゝうち笑て、然ばこそあれ、思ひしことよ。景春果して我陣を、疑ふて是を撃ず、又徒に退き去るは、必我隊を亂して、起逼るを撃ん爲ならん。豫計りし事なるに、皆緩やかに起ふべしとて、隊を亂さず徐々と、是を起へども、敢逼らず、間近くなるときは、五十三太素手吉、乾兒門と、俱に罵りうち笑ふて、小石を抓て擲つを、景春見かへりて怒りに得堪ず、那奴們我を怖るればこそ、近くは起も撃ずして、侮り遊ぶ投石三昧、いまだ那期に至らずとも、疾駆向て、颯にせん。兵每返せと喚りつゝ、乗たる馬を推旋らして、鎗挟みて敵に向へば、景澄維龍いへばさら也、懦雄の壯俊等、近習外様の差別なく、俱に怒に堪ざれば、咄と嘯て駈向ふを、政木孝嗣、向水枝獨鉗、須々利二四的、其每も共侶に、敵を柱えて且戦ひ、胡意敗れて亂れ走れば、親兵衛代四郎、紀二六等も、獵場の獸の列卒繩を、踰るが如き馬に鞭ち、足に信せて逃走るを、景春は猶漏さじとて、隊兵を找めて息をも養れず、那里までもと起ふ程に、後に响く敵の銃音、連發てる程しもあらず、長尾の騎馬武者五六人、撃れて人馬共侶に、象棋倒になりしかば、是にぞ驚く諸軍兵、將帥士卒並て皆、胆を潰しつ吐嗟と叫びて、譟ぎ亂るゝ癖なれば、後なる敵を見も定めず、濃と顔れて逃走れば、豫期したる大江の隊の兵、齊一咄と執て返して、中るに任して撃つせば、敵はいよいよ度を失ふて、虚滅しつゝ馬に踏れて、果敢なく命を殞すも多かり。升が中に、樋口小二郎維龍は、いかで主將

を延さん、と思へば一騎敵に中りて、鎗の尖頭に血を濺ぐ、力戦に時移るまで、こゝを先途と挑みしを、政木孝嗣遙に見て、適敵やと嘆賞しつゝ、鎗挟み走り来て、名告かけつゝ刺んと找めば、維龍鎗をうち振り手扱て、馬を馳寄遣差へつゝ。一上一下と挑み戦ふ、送の武藝劣らず優らず、他難もせて死を争ふ、勇悍對應せざるにあらねど、維龍は數度の鬪戦に、疲勞れて眼や眩みけん、孝嗣が因めかす、鎗を拂ふに違なく、鎗の透を刺串れて、馬より墮と落しかど、孝嗣は其首級を捕ず、只馬をのみ分捕して、牽駐めつゝうち乗りて、猶も敵をば趕ふたりける。爾程に長尾景春は、亂れて走る自家の士卒を、禁めもあへず共侶に、馬の足搔に信せつゝ、腕くも二たび敗績しぬるを、須々利壇五郎、二四的寄舎五郎は、手下の野武士十人許と、簇々と趕蒐來つ、喚禁め罵辱めて、推捕籠て撃んと競ふを、長尾の近習五六名、返し合せて防ぎ戦ふ、音も劇しき劍戟鎗棒、寡をもて衆に敵しがたかる、長尾の近習は、病を負ぬもなく、二人は寄舎五、壇五郎の、鎗に縫れて仆れしかば、景春怒りに得堪ずして、馬を馳入れ手を下す、鎗尖銳かりければ、只この一騎に駈亂されて、痛癢に仆るゝ者多ければ、寄舎五郎も壇五郎も、俱に景春に中り難て、或は肩尖高股を、刺れて臀坐に仰反たり。浩處に政木孝嗣、姥雲與保、直塚紀二六、石龜次團太、越鯉三、里見の士卒四百名と、俱に景春を趕蒐來て、走り近づく多勢の敵に、免れがたく思ふ折から、直江包道、宇佐美職政、殘兵二百餘名を將て、主將を索ねて返し來つ、推蒐る敵を受禁て、入亂れつゝ戦へば、景春は今この虎口を、士卒に譲りつ、退きて、馬の喘を休る程に、梶原後平二景澄も、殘兵二十名許を將て、主を索ねて返し來つ、景春を見て、身邊近く、馬を馳よせ、禮を做て、詞急迫しく諫るやう、思ふにも似ざりける、今日の鬪戦機を失ふて、郎君擒になり給ひしに、君亦陣歿し給はゞ、長尾の家は斷絶せん、この義を思し召されずや。卒おん伴仕らん。といひも訖らず鞭をもて、景春が乗たる馬の、尻を敲と撻しかば、馬は撻れて轟直に、葛西のかたへ走りゆく。後方に従ふ梶原景澄、殘兵毎も共侶に、皆後れじとて走る程に、又趕近づく敵兵あり、是則別人ならず、大江親兵衛仁也。向水五十三太と、

枝獨鉗素手吉、其隊の壯俊、數十名を従へて、連りに馬を走らすれば、景澄只得殘兵を、留めて敵を防がせて、是より主從僅に二騎、汗する馬に鞭うちて、逃るを親兵衛仁と見て、他は必景春ならん、と思へば敵の殘兵を、五十三太門にうち任せて、這小輩を見かへらず、馬に拍敵中へ、乗入れつ亦馳脱て、遙に延たる二騎の敵を、走らせじとて趕蒐る。馬は名に負ふ青海波の駿足なれば、射る箭の如く、一瞬間に近づく隨に、四下に响く聲震立て、景春返せ仁なるぞ。大江を知ずや、蓬し返せ。と喚りつ、鎗を拵て馳よする、然しも勇士の威勢に、中るべうもあらざれど、景澄は主を撃せじ、と思ふ心を鬼にしつ、只得馬を乗旋らして、矢聲を發つゝ親兵衛と、鎗を交へて戦ふ程に、景春は大江が本事を、既にはよく知りぬ、勝ことかたしと思ひしかば、今景澄が、他と戦ふや否やを見もかへらず、走れる馬に鞭を中て、命を漚りに落亡ける。爾程に、梶原後平二景澄は、大江親兵衛と戦ふこと、いまだ久しからずして、腕衰へ鎗法亂れて、既に危く做りし時、景澄の從父昆弟にて、荻野五九郎泰儀と喚做す壯士、こも亦景春の往方を索ねて、料らずこゝに來にければ、今景澄が敵と鬪戦の、危きを見て毫も擬議せず、馬を馳寄せ相援けて、挟みて撃まくするに、親兵衛は物ともせず、精神ますく加りて、右に中り左を拂ふ、神出鬼没の慄姚に、景澄泰儀怕れず、俱に引外し馬を退けて、鎗を鳴らして逃走するを、親兵衛は猶逃さじとて、心ともなく自家の衆に、離れて追に、葛西なる、多枯野邊まで趕ふたりける。話分兩頭、この朝犬塚信乃、大飼現八、杉倉武者助、田税力助等は、寄隊の三將顯定、成氏憲房の、總軍既に敗績して、亂れ走るを趕蒐來つゝ、葛西なる假名町より、半里許這方なる、林原の頭にて、又寄隊の三將と、再戦の事の趣は、既に前回に見えたり。然ば信乃等は、僅に二三千の小兵なれども、地理を揣り切所に据りて、よく戦へば破られず。又寄隊の三將は、一旦敗軍の殘儘なれども、猶三萬餘の士卒あれば、先度の恥を雪んとて、三面齊一競ふのみ、未牌の時候になるまでも、雌雄を分たざりしかば、顯定頻りに焦燥て、屢軍使を走らせつゝ、左右の二將に謀じ合せて、三面一度に火箭を飛ばして、信乃現八門が籠りたる、



(す見を力神びた二猪靈)

茂林を焼まく欲するに、白石重勝、及隊長等、よくこの事を掌りて、士卒に下知して火薬を集め、既にして幾百枝の、火箭を一度に、射出さんとする程に、今朝より烈しく吹く風に、鈍くも火線を吹拿られて、其火反て四下なる、枯草に移りしかば、弓手はさら也、雑兵們は、こは什麼、とばかりに、驚慌て、俱に其火を撲滅さんとて、或は鎗、或は棒を、執るに儘せて枯茅萱を、擡は憶ず打出す、茅萱の裏に獸あり、是則別物ならず、嚮に牙に蕉火を結著られて、戰車を焼し大猪數も減らず六十五頭、忽焉として前後左右なる、高宜枯草踏踏きて、顯れ出て雑兵を、牙に掛つゝ投飛ばせば、彌驚く衆兵隊長、主將も俱に胸を潰して、野猪を殺しね、火を消留よと喚ど叫べど屈ぬ下知と、怪異に亂るゝ三面一禍の、野猪は皆威暴れ哮りて、又只寄隊の騎馬武者の、馬足を牙もて突折けば、人馬俯累りて死するもあり、然らぬは野火に逼られて、身を焦して叫ぶもありしを、信乃現八等は、是を見て、歡び勇ざる者なく、直元逸友三面一致の、隊兵を找めて攻入たる、中央は犬塚信乃、并に眞間

井樅二郎、勇士猛卒前後を争ふ、勢ひ宛破竹の如く、今日顯定を擒に做さずは、何の時を待んやとて、縦横無礙に擊散せば、然らても亂れし寄豫の衆兵、野猪に驚き野火に趕れて、恥を思はぬ雑兵は、皆四零八落に、逃て跡なくなりにける。开が中に白石城介重勝は、先鋒の頭人霧布五六と、いかで主君を後安く、退陣させんとのみ思ひしかば、殘兵四五千を推圍めて、程よき處に野火を避て、信乃が一隊と血戰す、其勇なきにあらねども、寄隊の士卒は皆胆落て、透もあらば逃まく思ふ、網裏なる魚籠に似たれば、敢隊ふ擬勢なく、僅に一千許なる、犬塚が戰の兵に、擊破られ立脚もなく、事急なるは、敵に加りて、反て自家を射るもあれば、白石霧布防ぐに甲斐なく、俱に馬を射させ痕を負ひしかば、逃る士卒にうち雜りて、迹を埋めて落亡けり。有恚りし程に、寄隊の副將、山内五郎憲房は、靈猪の野火の禍鬼に、憶ずも辟易して、二たび總頼にならまくせし折、犬飼現八信道は、繼橋綿四郎喬梁と俱に、隊兵を推找めて、突然として衝て入る、馬上の鎗頭、向ふに前なく、剩野火と野猪に、寄隊の士卒は防ぐに術なく、右往左往亂走るを、這隊の頭人、闇敷野汝八夏盛と喚做す猛者、鷹裂八九郎と共侶に、罵辱しめ喚返して、馬を跳らせ二騎相並て、眉尖刀をもて敵を交る、猛勢凄じかりければ、敢近づく者なきを、現八は好敵なめり、と思へば繼橋喬梁と共侶に、馬をよせ鎗見めかして、うち向んとする程に、汝八八九郎は、後よりして突もて來ぬる、二三頭の野猪に、馬の後脚を蒐られて、忽地撞と落しかば、能はじと思ひけん、痛楚を忍び身を起して、逃る雑兵にうち交りて、蛋くも影を躲せしかば、現八見つゝ冷笑ひて、思ふにも似ぬ白徒なりき。といへば士卒も喬梁も、憶ず咄と笑ひけり。然ば山内憲房は、近習僅に五七名を従へて、假名町の方へ落てゆく程に、現八は只一騎、士卒に先だち趕來つゝ、喚禁め窘めて、鎗を拈て嘯て蒐れば、憲房の近習們は、已ことを得ず、敵を迎へて、手々にうち振る刃の電光、一騎の敵と侮りて、俱に勇みしかひもなく、皆現八が鎗下に、仆るゝもあり、俯すもありて、竟に羽翼を喪ひし、憲房は逃るとも、他逃さじ、と覺期の大刀風、馬を馳違せて、一霎時は、挑戰ふものから、原是婦人の手に生育て、艱苦

を知らず、民情を査せず、心驕りて身は柔弱なる、貴介公子のいかにして、犬士の敵手に足る者ならねば、持たる大
 刀を打落されて、怯むを現八馬乗よせて、掻抓み引著て、宙に吊して動かせず、四下を乞と見かへる折から、繼橋綿
 四郎喬梁は、五百個許の士卒を將て、馬を走らせて來にければ、現八ヤ、と喚近づけて、やよ、繼橋生、この生口は
 寄隊の副將にて、多く得がたき賓客なれば、手暴くなせそ、逃すべからず。這が今乗捨たる、馬の鞍局に騰著て、牽
 もて去りて、疾郎君の御陣營へまゐらせ給へ。といふを喬梁歡び承て、馬より下りて士卒と俱に、弱り果たる憲房
 を、抱き取り推縮めて、件の馬にうち乗せて、鞍を解きて十の字に、緊しく懸けて、又故の、己が馬にうち乗つゝ、
 現八に、歡びを述相別れて、牽せて懸て義通君の陣所を投ていそぎける。案下、この時寄手の一將、足利成氏の一隊
 は、那野火も飛移らず、又野豬の怪異もなかりしかば、猶直元逸友等と、連りに挑戰ふ程に、猛可に自家の兩隊
 顯定憲房、父子の陣より亂れ謀ぎて、敗績しつと聞えしかば、成氏うち驚きて、則在村と新織素行に、件の父子を
 援けよとて、隊兵を分て遣しけり。この故に成氏の、士卒減少したりけるに、敵はいよゝ勢を得て、攻撃つこと
 甚急也。計我の士卒は、一二の陣の、敗軍に氣力折けて、撃るゝ者尠からず。其餘は多く落亡て、成氏の旗下に相
 從ふ、近臣股肱の每なる、科革七郎、望見一郎、是等を宗徒の精兵にて、五六百名に過ぎずなりしかば、成氏嘆嘆に
 堪ずして、今はしも是まで也、戰歿せん。と麾うち揮つゝ士卒を找めて、敵の隊長、杉倉武者助直元の、一隊を逆へ
 て推蒐る、這時遅し、那時速し、颯と降し來る狂風に、沙石を飛し、樹枝を鳴らして、天さへ暗くなる隨に、走りい
 て來る一箇の野豬、大きなること犢に等しく、疾こと虎にや似たらん歟、と思ふ可の猛威もて、成氏の乘たる馬を、
 駈仆し主を滾して、起んと蠢く甲の表帯を、牙に引掛け背に載て、往方も知ずなりにけり。然ば今この光景を、敵も
 自家の士卒們も、正可に見て知る者なければ、只狂風に驚き怯れて、活路をのみ索れば、いまだ刃を交へずして、勝
 負は既に決然たる、直元逸友隊兵を找めて、中るに任せて斫せば、敵兵多く逃亡て、科革望見の黨のみ、僅に陣

歿したりける。爾程に、横堀史在村、新織帆大夫素行は、成氏の軍令に従ひて、一二の陣の敗軍を援んとて、五六千
 の隊兵を領て、いそぐ程に、顯定親子は戰ひ敗れて、今さら拯ふべくもあらず。又後方を見かへれば、我一陣も、亦
 敗軍にや速びけん、自家なる士卒の落てゆく、後影多く見えしかば、在村は嘆息して、馬を駐めつ素行を、喚近づ
 けて、叫くやう、帆大夫殿はいかに思へる。こゝのみならて我陣も、亦敗北の兆見えたり。我君は恙なきや、陣歿
 し給ひし歟知らねども、左ても右ても三たびの負を、又建復すべくもあらず。然るを猶慮て在らば、必敵の俘にな
 らん。計我には、各宅眷あるに、疾かへり行て安危を揣らずは、後悔臍を噬んのみ。といふを素行うち聴て、賢慮
 寔にその利あり。然らばおん伴仕らん。と應て懸て間道より、千住のかたへ赴く程に、葛西の底不知野を過る時、從
 ひ來ぬる四五千の、士卒は蚤く落亡て、才に四個の鎧奴のみ、今も猶馬前に在り。在村と素行は、俱に呆れてうち眩
 く、心細さは涯りもなきを、迭に然らぬ面色して、好々、負しからぬ那奴們は、亡こそ結句優らめ、といふより外に
 術もなく、見直す限り遙なる、この野をとくく、踰んとて、俱に馬をぞ早めける。有恙し程に、犬塚信乃は、郷に顯
 定を撃も果さて、走らせたりける遺恨に堪ねば、自家の士卒に先だちて、往方を索ねて、只一騎、趕もて來ぬる、馬
 の左右に、從ふたる、雜兵僅に五六名、喘々ぞ續きける。折から前面を見直せば、足掻を早めゆく二騎の落人あ
 り、俱に兜を脱捨けん、息裂もて頭を裏める、一個は錦綉の戰袍也、一個は則絳白なる、段々間道ある戰外套を被
 て、うち相譚ひつゝゆく人馬の背骸、五六町西に見ゆめり。信乃はうち相て、歡びに堪ず、那錦繡の戰袍を被たる
 落武者は、必是山内の、管領にぞあらんすらむ。といふを從兵うち聞て、知る者ありて告るやう、否他は、管領に
 候はず、小可豫相記あり。戰袍被たるは計我の權宰、横堀史在村也。又戰外套は、其次職なる、新織帆大夫素行に、
 紛れもあらず候。といへば信乃又歡びて、爾らば、亦是我仇也、いでゝ。といひつゝも、簾に残りし二枝の、表挿
 の征箭拔出し、弓拿直して馬を走らせ、聲高やかに、其里に落ゆく騎馬武者は、計我の佞臣横堀在村、新織帆大夫素

行ならずや。我は是犬塚信乃金碗成孝也。若們奸佞邪智の本性、曩には我を虐げて、搦捕まくせしのみならず、新織素行を緝捕の頭人として、我行徳の客舎まで、穿鑿ることの急なりければ、義士山林房八が、我死に代りし血染の衣は、幌に爲りて我背に在り。今こそ復す舊恩舊怨、思ひ知るや。と喚れば、在村素行うち驚きて、馬を駐めて見かへる處を、能鸞固めて標と射る、矢局差はず素行は、左の耳より頤まで、鋭深く射られて叫びも果す、馬より墜て死んでげり。是にぞ怕るゝ在村は、項を締め泥障を蹴鳴らし、馬を馳つゝ逃んとするを、信乃は透さず趕蒐る、馬の足掻も彌疾き弓勢、箭接速なる弦响と、共に横堀在村は、項の邊を丁と射られて、苦と叫びて落もせず、只鞍局に俯たる儘に、走れる馬に乗せられて、死活は知ず做にたる。又那四個の鑣奴は、主より先に逃亡せしを、信乃は二たび趕まくするに、矢種既に盡きしかば、只得從兵の續くを俟て、持せし鎗を掻取りつゝ、若們は我がへり来るまで、權且這里に居よかし。といひ捨鞭をうち鳴して、又在村を趕蒐けり。浩處に大江親兵衛は、潮に長尾景春の隊長なる、梶原後平二景澄と、荻野五九郎泰儀が、親兵衛と戦ひ負て、逃るを連りに趕蒐る、勢ひ已ことを得ざりしかば、心ともなく葛西なる、底不知野に來にけるに、這里は茫々たる曠野にて、茅萱枯草花彌が上に腰累りて、路去りあへぬ地方なれども、逃る者は路を擇まず、又趕ふ者は、青海波の、駿足に乗れば、荆棘延蔓の野草を物ともせず。既にして親兵衛は、兩個の敵に近づく隨に、蓬し返せ。と喚かけ、繁き枯草踏開く、馬をいよく跳らせて、後れて馳る景澄の、背を鎗もて刺まくする時、怪むべし、この叢の繁きの中に、最大なる坑ありしを、知ねば馬蹄を踏や掛けん、人馬愕然と陥りて、在りとも見えずなりしかば、景澄是に氣力を得て、馬乗返して、鎗をもて、刺殺さんと、拿直す。恚る折から犬塚信乃は、猶も横堀在村を趕捕へんとて、只管に、馬を走らせて來ぬる程に、と見れば三騎の武者これあり、一騎は其兩敵を趕ふ者にて、この地に在るべしと思ざりける、大江親兵衛に似たりしかば、且訝り且歡びて、それかあらぬ歎、とばかりに、聲を掛んとしぬる時、其武者は忽焉と、叢隱なる坑中へ、人馬等しく陥し

かば、後れて走る一騎の輩、突然と返して來て、鎗もて坑なる叢叢を、刺殺さん、と馬を寄するを信乃は吐塵と馬馳よせて、やをれ白人、手な下しそ。と罵りつ、鎗を晃めかして、刺んと找めば、景澄うち見て、儼は誰そ。と問せも果ず、信乃答て、儼知ずや、我は是犬江親兵衛が義兄弟、里見殿の御内にて、八犬士の一人たる、犬塚信乃成孝也。原來好敵ごさんなれ。我は白井の隊長なる、梶原後平二景澄是也。當の敵にはあらねども、勝負を決せん、いざうれ。と名告かけ相喚りて、鎗を交へて戦ふ程に、既に迥に逃延たる、荻野五九郎泰儀は、這光景を見かへりて、只得馬を乗復し來て、又景澄に力を勦せて、連りに挑み戦へども、信乃は撓る色もなく、左右に敵を受ながら、劇しく中る鎗法に、兩敵共に腕亂れて、引外さんとせし程に、泰儀は項を刺れて、馬より仰さまに墜しかば、景澄是に驚怕れて、透もあらば逃まく思ふに、聊も其便りを得ず、反て信乃に小鬚を刺れて、こも亦馬より墜にけり。登時信乃は兩個の敵の、死活を敢見もかへらず、坑の頭に、馬を找めて、聲高やかに喚るやう、方僅認て、這坑へ陥りし騎馬武者は、大江なるべし、親兵衛ならずや。恚い我は犬塚信乃也。既に和殿の兩敵は、我鎗尖もて刺滅たり。いかて我這鎗の幹當に、携りて蚤く出よかし。と告喚被ること兩三番、やをら鎗を坑中へ、手繰下さまく做す程に、怪むべし這坑中より、起騰る白氣あり、隱々として煙の如く、天に冲ると見る程もあらず、又忽焉と風雷の、轟く如き音聞えて、颯と吹出す猛風と、共に大江親兵衛は、人馬ひとしく拾出されて、聊も身に恙あらず。馬も亦故の儘にて、主を乗せつゝ端然と、坑の畔に立しかば、信乃は二たび胆を潰して、且呆れ且歡びに堪ざりし、眼を定め、熟視て、原來大江、恙なかりき、不思議の面會なりけるかな。昔我行徳にて、和殿の親の終焉に、誓ひし言の虚しからで、今日果しぬる娛しさよ。と報る言の葉いと繁き、この段特に長やかなれば、又卷を易て下の回に解分るを聴ねかし。

南總里見八犬傳 第九輯卷之四十二上

東都 曲亭主人編次

第一百六十九回

野坑を拾出されて親兵衛賜を受く
風葉を帚除して諸勇士立談す

話表す犬塚信乃成孝は、料ずも葛西なる、底不知野の頭にて、大江親兵衛仁が爲に、二騎の敵を斃し得て、他が親山林夫婦の、舊恩を報ひしのみならず、底不知の坑に陥たりし、親兵衛も亦恙なく、件の坑より吹起す、勁猛風に吹騰されけん。人馬故の儘にして、出づることを得たりしかば、信乃が歡びいふべうもあらず。眼を定めてつらくと、見つゝ忻然として先問ふやう、大江和殿は幾の間に、京師よりかへり来て、今番の役に参り會たる、況や二騎の敵を趕來て、謬てこの坑に、陥りて見えずなりしに、特に奇きは坑中より、白氣立升ることありて、且猛可に聞えし風の音、雷霆の响と共に、自然に出ることを得たるは、必是其身を衛る、靈玉の大奇験と、伏姫神の冥助にあらずは、いかにしてこの幸あらんや。只這奇事のみならず、曩に和殿が、稻村なる、御厩人に預け置きたりし、其名馬青海波は、我和殿を憶ふの故に、這回の陣中に率もて來たるに、昨宵其馬はおのづから、絆を解きて走りし歟、然らずは人に竊れし歟。往方知れずと聞えしかば、後悔臍を噬るのみ。當晩は我火猪を放ちて、寄隊を敗まく欲する折也ければ、开を索るに違なかりしに、見れば件の青海波は、則ち和殿が乗て在り、こも亦大奇といひつべし。我は方僅那滄の俊臣なる、横堀史在村と、新識帆大夫素行が只二騎落てゆくを趕蒐て、射て斃すことを得たれども、在村は馬より墜ず、そが儘乗せて馬の走るを、趕捕へんとてこゝに來つ、憶ず和殿に兩敵あり、馬をかへしつ鎗をもて、坑なる

和殿を刺まくせしを、遮り制めて戰ふて、斃して和殿の窮厄を、拯ひ得てける歡びは、何事歟亦是に優すべき。忘れも得せぬ六稔の昔日、我身行徳の古那屋にて、必死の窮厄ありし時、和殿の先人山林が、我身に代りし義死の臨終、我只感謝に堪ざれば、その折は年四才なりし、和殿をやをら引よせて、我山林に誓らく、後年この子成長りて、俱に戰場に蒞む事あらば、我箭面に立ち、死にも代りて、今日の恩義に答ん、といひし言葉の露霜は、代謝て六稔まで、いまだ便宜なかりしに、今茲この冬君家の軍役、俱に防禦の使命ありて、水陸三箇所の大敵にうち向へども、争何せん和殿は京より還らねば、安危を俱に做しがたし、と思ひし者を思ひきや、不測に越に折を得て、這里に和殿の窮厄を、釋きも拯ふて、我前言を、全く果して世になき人に、後易くならんとは、噫嘻天なる乎、時なるかも。和殿この地に在らざりしかど、この事一霎時も胸に絶ねば、和殿の愛馬を、索せ來つるは、是も亦和殿に代る二扮の、防禦使たらん、と思へば也。又只この意味のみならず、見給へ、我掛たる這幌は、和殿の爺奶の血染の衣也。我年來艱苦の中にも、身に添て失はず、深く藏め措たりしを、這回幌に作らせしは、其芳名を自家の士卒にも、敵にもいかで知せまく、欲するまでの所行なりき。と心の誠うち出て、告もしつ、問も尋る、閑談細やか也ければ、親兵衛馬上に頭を低て、听つゝ坐に感涙の、進むを覺す長嘆して、果せるかな、至誠は必や神の如し、犬塚主の孝順忠信は、人の及ばぬ所なれども、誠心誠意愆までに、最厚しとも敦からずば、こゝに不測の援を得て、相逢ふ事を得べけんや。我身は必敵の鎗に、刺れて身はこの坑に命終らば、人知すこそなるべけれ。然ばこそ再生の洪恩を、千言萬句に盡すとも、嘆るべうもあらずかし。寔に此上なき幸ひなる哉。就て咱等は姥雪直塚門の伴當夥兵を領て、今朝しもかへり來ぬる程に、料らずも得にける這馬の、足搔に任せて御曹司の、御危戰を援け奉り、且勅敵長尾景春を、擊破り走らせて、其子長尾爲景を擒にせし事、又那河鯉佐太郎の政木大孝嗣、石龜次團太、越前三と、三人は共に、幸ひにしてかの折死なず、月屬兩國河原なる、向水五十三太が宿所に在りしに、我より先に御曹司の、鬪戰を援けま

つりて、長尾を柱えて力戦せし事、都て是等の事までも、會話いと多かれども、恁枯草繁き處では、下馬しても尻を掛る石だに見えず、那里に故たる松の下は、結縷草ありて、憩ふに宜し。卒給へ、那里にて、俱に意衷を盡すべし。といふに信乃も見かへりて、現那松蔭こそよかんめれ。和殿に据りて肇て知りぬ。原來御曹司も亦御出陣ましまして、長尾と戦ひ給ひし歟。鄙語に云燈臺は、倒に下閣くして、今肇て聞く鈍ましきよ。況や政木、石龜等が事はしも、最も芽出たき珍説也。蚤く听ずばあるべからず。卒々といひつゝも、俱に馬を歩行せて、徐に松の邊に造りて、下馬して餘談に及ぶ折から、犬飼現八、杉倉直元、田税逸友、眞間井秋季、頭人隊長陸續と、信乃が兵をも従へて、寄隊の兩將顯成氏の、敗れ走りしを趕捕へんとて、索ねてこゝに來にけるに、信乃が一個の若武者と、共侶に憩ひ居るを、遙に見て、現八は自餘の隊長と、俱に馬より下立て、找よりつゝ信乃にいふやう、犬塚、和殿は顯定主を、那里へか趕亡したる。咱等は副將意房を獲たれば、繼橋綿四郎們にうち守らせて、臺の城へまゐらせにき。卒立給へ、共侶に、索ねて顯定を捕へんず。といひつゝ、親兵衛を見かへりて、胆を潰しつゝ、又左見右見て、大江、和殿は幾間に、京師よりかへり來て、這戰場に在りけるや。と問へば親兵衛微笑て、然也。咱等は今朝この地に馳就て、御曹司の御危戦を、援けまつりて敵兵の、逃るを趕つゝ、この野邊に來て、料らずも必死の厄ありしを、幸ひにして犬塚に、拯れて、今這里に來つ。といふを現八聞あへず、开は又奇也、最芽出たし。御曹司の御出陣も、まだ聞知らぬ事ながら、時過たれば乙も甲も、寛やかにこそ听べけれ。今の急務は管領の、往方を求獵て懲さすは、異日又寇すべし。卒共侶に立給へ。やよとくくといそがするを、信乃は禁めて徐にいふやう、犬飼さのみ憐りなせそ。這回館の御軍令に、只防禦を旨として、殘忍慘刻の擗きを饒し給はず。非如寄隊の將帥也とも、逃なば脱すも寛仁大度の、御旨にこそ稱ふべけれ。といはれて現八忽地覺得て、然也々々、我愆ぬ。爾らばこゝに人馬を憩へて、敵は一人も在らずなりなば、岡山の陣所へかへるべし。と答て後方を見かへれば、直元逸友こゝろ得て、秋季と共侶に、找みよりつゝ親

兵衛に、歸國の歡びを筋などす。當下信乃は現八等に告るに、在村と素行を、射て斃しける事を首にて、親兵衛が認て、人馬等しく野中の坑へ、陥りし折、信乃が來て、其兩敵を斃しし事、又親兵衛が、坑中より、吹起す猛風に吹出されて、騎馬の儘にて恙なく、出來し事の尾まで、其大略を説示せば、大家听つゝ、感嘆す。开が中に現八は、笑片向て信乃にいふやう、犬塚、和殿の擗きは、都て至妙にあらぬはなけれど、就中横堀史在村と、新織帆大夫素行を、射て斃せしは愉快也。那在村が奸佞なる、君を惑し民を虐げ、能を媚み賢を憎り。曩は我芳流閣にて、和殿と組撃の事微りせば、竟に那奴に虐げられて、牢獄中に命終ん。又新織帆大夫も、常に在村に媚諛て、曩には和殿の緝捕を請承、行徳に來て求獵しかば、惜むべし、大江の爺嬢は、死して和殿を救ふに至れり。爾るを今番那奴等を、擊漏しなば、彌勒の世まで、後悔其甲斐なからんに、天羅張得て、路を譲らず、和殿に誅戮せられしは、造化の小兒の算帳精細、寔に脱落あることなし。況や和殿が山林に、報恩の前言を、今番の役に果さすべしとは、神ならずして誰か知ん。そを待難て云云と、催促しぬる人しもあらば、鄙語にいふ親の心を、子知すにこそあるべけれ。といひつゝ、呵々とうち笑へば、親兵衛は愀然たる貌を改め、且信乃等にうち向ひて、犬塚よ、犬飼も听給へ。咱等が京師に在りし時、政元主に抑留せられて、憂苦の中に日を涉りける、其事の顛末は、一朝に盡しがたかり。开は且く言省てん。我厄解けてやうやくに、華浴を辭し去りしは、十一月二十四五日の時候なりしに、憶ず路に掩留して、今朝稍この地に馳就ける、首をいへば、箇様々々、尾は又箇様々々。と名馬走帆の事、次信濃路にて、這回の役あるよしを聞知りし事、又千住河原にて愛馬青海波の、河を涉して來ぬるに逢し事、并に馬盜兒、活間野目奴九郎の事、及二四的寄舎五郎、須々利壇五郎の事、又親兵衛們が、長尾景春を敗り走らせし事、且再戦して、長尾爲景を生拘りし事、亦政木孝嗣、石龜次團太、越鱒三等が再生の顛末、及向水五十三太、枝獨鉆素手吉が義俠の事、并に孝嗣は、義に仗りて、次團太鱒三、五十三太素手吉等と俱に、多く其母を將て、義通君の鬪戦を、援けて軍功ありし事、都て

繁を交り言を約にして、漏すことなく告しかば、現八以下の頭人隊長、听つゝ俱に感佩して、美談也とぞ稱へける。當下信乃は笑しげに、親兵衛にうち向ひて、大江よ、原來那青海波は、昨宵盗兒に牽去られしを、やうやくに今覺得りにき。遮莫昨宵岡山の陣營は、三面奇隊に戰車もて、圍れたれば、鼠も暢はず、且背の方は暴河なるに、他にかにして潛入て、馬さへ竊出しけん。神變不測といはまくのみ。現活馬の目拔郎が、竊術こそ怪しけれ。といふに大塚家堪難て、齊一咄と笑ひけり。姑且して信乃は又、親兵衛に向ひていふやう、大江、這里は曠野にて、君命を傳るに宜き地方ならねども、明日まで閑くべきにあらねば、謹て承まつりね。といふに親兵衛、阿と應て、身を引降して跪けば、信乃がいふやう、曩に洲崎の御陣にて、鎧みづから、軍令を定させ給ひし時、大阪毛野を軍師に做され、并に和殿と我門七名は、俱に防禦使たるべし、と仰渡されて、且節刀に擬せられたる、御大刀を、各一口賜りて、這回軍旅の間、倘軍令に違ふ者あらば、先斬て後に告よ。と掟させ給ひにき。爾るにかの折、和殿と犬村大角は、御使して他郷に在れば、和殿に賜るべきを、則、咱等に遞與給ひぬ、又大角に賜るを、現八に預け給ひき。こゝをもて咱等この地に出陣の始より、其御大刀さへ腰に帶て、身に帶刀の多きを教はず、且青海波の名馬さへ、牽せ來つる心操は、嚮に解しせし如し。爾るに和殿折もよく、今日の御陣にかへり來て、且軍功の拔萃なるは、いまだ君命を承らずして、防禦使の大任虚しからず、求ずして館の御本意に稱ひぬる、武門の冥加あまりあり。一期の面目羨むべし。卒々御大刀を遞與んず。といひつゝ、臆て腰を撈りて、三刀佩たるそが中の、一刀を取すれば、親兵衛は謹て、受戴きつゝ、腰に佩て、身を退せて答るやう、臣等京師にて、權相の爲に豪留せられて、亟に御使を果し得ず、危急存亡の時をも、知らず、この身は他郷に在りけるに、君恩當務の義兄弟に異ならぬを、仰ぎまつれば身を措に、所なきまて辱く、拜戴受納仕りぬ。却犬村は何等の故に、他郷へ遣し給ひしや。と問ふを信乃は推禁めて、否この義は、些事由あれば、今明々地に告がたかり。そは後にこそ知らるべけれ。と答て現八を見かへりて、犬飼は、那折犬村に賜るべき、御大刀はいかにしつる。今も猶これあるや。と問へば現八、然ばとて、那折ありし後、異日斷配を定められて、咱等は和殿と共侶に、御曹司に従ひまつりて、この地の奇隊にうち向へば、犬村とはいよ、遠くなりぬ。然ば役果されば、他に件の仰を傳へて、御大刀を遞與すべくもあらず。因て當日軍師に就て、悄悄地に御旨を請奉りしに、館聞召て、开は我思ひ足らざりき。現八は返璧の暮にて、大角に値遇せしより、他も亦大士たるべき、明徴あるを知れりと歎聞しかば、この縁故あるをもて、件の太刀を現八に與せたりけれども、今隊配を定るに方りては、實に是不便になりぬ。开はその儘毛野に渡しね。大角には別人をもて、遣すべしと仰ありしかば、那御大刀は洲崎にて、そが儘達しまゐらせて、大阪に遞與したり。と聲低やかに答る折から、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太等の伴當夥兵、并に政木大孝、石龜次團太、越鯉三、向水五十三太、枝獨鉆素手吉、且二四的と須々利が手下の兵までも、長尾景春の隊長たる、直江包道、宇佐美職政と力戰して、撃取り追走せて、四下に敵の在らずなりしかば、俱に隊の兵を從へて、猶親兵衛を援んとて、索ねて這里に來にければ、親兵衛是を勞ふて、孝嗣以下新參の毎を、則、現八、并に直元逸友秋季等に、恁々と告て引合するに、大家其義旗勤軍の、大功あるを稱贊す。浩處に、葛西二郷藩なる村長故老莊客毎、釵脛衣して、鎌竹槍を携たるが、幾隊か里見の防禦使を索ね來て、俱に勝軍の壽詞を唱て、且いふやう、小人毎は、年來里見殿の仁政を、慕ひまつり候へば、曩に奇隊の敗北しぬるを追撃て、一人も脚を立て候はず。なれども敵の首を捕ることを饒し給はず、と傳聞て候へば、首級は齎し候はず。开が中に、計我殿の權臣なる、横堀史在村は、那身矢傷に死したるが、乗たる馬の鞍局に、俯たる隨にて來にければ、分捕仕り候ひぬ。他は民を虐げたる、奸佞の聞えある者にて、既にして死したれば、小人每里見殿へ、孝順の證にせんとて、其首斬て、持參仕り候ひしに、又今來ぬる路にて、亦矢傷に死したる落人あり。他は、則、在村が次職にて、同惡の佞人、新織帆大夫素行なるを、知れる者の告しかば、开も首捕てもて參りぬ。いかて實檢を賜ひぬ。とおそるゝ、懇

懇を交り言を約にして、漏すことなく告しかば、現八以下の頭人隊長、听つゝ俱に感佩して、美談也とぞ稱へける。當下信乃は笑しげに、親兵衛にうち向ひて、大江よ、原來那青海波は、昨宵盗兒に牽去られしを、やうやくに今覺得りにき。遮莫昨宵岡山の陣營は、三面奇隊に戰車もて、圍れたれば、鼠も暢はず、且背の方は暴河なるに、他にかにして潛入て、馬さへ竊出しけん。神變不測といはまくのみ。現活馬の目拔郎が、竊術こそ怪しけれ。といふに大塚家堪難て、齊一咄と笑ひけり。姑且して信乃は又、親兵衛に向ひていふやう、大江、這里は曠野にて、君命を傳るに宜き地方ならねども、明日まで閑くべきにあらねば、謹て承まつりね。といふに親兵衛、阿と應て、身を引降して跪けば、信乃がいふやう、曩に洲崎の御陣にて、鎧みづから、軍令を定させ給ひし時、大阪毛野を軍師に做され、并に和殿と我門七名は、俱に防禦使たるべし、と仰渡されて、且節刀に擬せられたる、御大刀を、各一口賜りて、這回軍旅の間、倘軍令に違ふ者あらば、先斬て後に告よ。と掟させ給ひにき。爾るにかの折、和殿と犬村大角は、御使して他郷に在れば、和殿に賜るべきを、則、咱等に遞與給ひぬ、又大角に賜るを、現八に預け給ひき。こゝをもて咱等この地に出陣の始より、其御大刀さへ腰に帶て、身に帶刀の多きを教はず、且青海波の名馬さへ、牽せ來つる心操は、嚮に解しせし如し。爾るに和殿折もよく、今日の御陣にかへり來て、且軍功の拔萃なるは、いまだ君命を承らずして、防禦使の大任虚しからず、求ずして館の御本意に稱ひぬる、武門の冥加あまりあり。一期の面目羨むべし。卒々御大刀を遞與んず。といひつゝ、臆て腰を撈りて、三刀佩たるそが中の、一刀を取すれば、親兵衛は謹て、受戴きつゝ、腰に佩て、身を退せて答るやう、臣等京師にて、權相の爲に豪留せられて、亟に御使を果し得ず、危急存亡の時をも、知らず、この身は他郷に在りけるに、君恩當務の義兄弟に異ならぬを、仰ぎまつれば身を措に、所なきまて辱く、拜戴受納仕りぬ。却犬村は何等の故に、他郷へ遣し給ひしや。と問ふを信乃は推禁めて、否この義は、些事由あれば、今明々地に告がたかり。そは後にこそ知らるべけれ。と答て現八を見かへりて、犬飼は、那折犬村に賜るべき、御大刀はいかにしつる。今も猶これあるや。と問へば現八、然ばとて、那折ありし後、異日斷配を定められて、咱等は和殿と共侶に、御曹司に従ひまつりて、この地の奇隊にうち向へば、犬村とはいよ、遠くなりぬ。然ば役果されば、他に件の仰を傳へて、御大刀を遞與すべくもあらず。因て當日軍師に就て、悄悄地に御旨を請奉りしに、館聞召て、开は我思ひ足らざりき。現八は返璧の暮にて、大角に値遇せしより、他も亦大士たるべき、明徴あるを知れりと歎聞しかば、この縁故あるをもて、件の太刀を現八に與せたりけれども、今隊配を定るに方りては、實に是不便になりぬ。开はその儘毛野に渡しね。大角には別人をもて、遣すべしと仰ありしかば、那御大刀は洲崎にて、そが儘達しまゐらせて、大阪に遞與したり。と聲低やかに答る折から、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太等の伴當夥兵、并に政木大孝、石龜次團太、越鯉三、向水五十三太、枝獨鉆素手吉、且二四的と須々利が手下の兵までも、長尾景春の隊長たる、直江包道、宇佐美職政と力戰して、撃取り追走せて、四下に敵の在らずなりしかば、俱に隊の兵を從へて、猶親兵衛を援んとて、索ねて這里に來にければ、親兵衛是を勞ふて、孝嗣以下新參の毎を、則、現八、并に直元逸友秋季等に、恁々と告て引合するに、大家其義旗勤軍の、大功あるを稱贊す。浩處に、葛西二郷藩なる村長故老莊客毎、釵脛衣して、鎌竹槍を携たるが、幾隊か里見の防禦使を索ね來て、俱に勝軍の壽詞を唱て、且いふやう、小人毎は、年來里見殿の仁政を、慕ひまつり候へば、曩に奇隊の敗北しぬるを追撃て、一人も脚を立て候はず。なれども敵の首を捕ることを饒し給はず、と傳聞て候へば、首級は齎し候はず。开が中に、計我殿の權臣なる、横堀史在村は、那身矢傷に死したるが、乗たる馬の鞍局に、俯たる隨にて來にければ、分捕仕り候ひぬ。他は民を虐げたる、奸佞の聞えある者にて、既にして死したれば、小人每里見殿へ、孝順の證にせんとて、其首斬て、持參仕り候ひしに、又今來ぬる路にて、亦矢傷に死したる落人あり。他は、則、在村が次職にて、同惡の佞人、新織帆大夫素行なるを、知れる者の告しかば、开も首捕てもて參りぬ。いかて實檢を賜ひぬ。とおそるゝ、懇

て、二級之首をまゐらするを、信乃は引よせて得と檢て、這在村と素行は、嚮に我が射て斃せし也。我君仁義の御軍令あれども、這在村素行は、君を惑し國を謬し、罪死を容ざる悪人なれば、必梟首せらるべし。大義にこそ。と勞らへば、現八も亦村長等にうち向ひて、若們こゝへ來つるこそ便宜なれ。約莫今日の鬪戦に、敵はさら也。自家にも、陣歿の者なきにあらず。其亡骸を拾集めて、便宜の寺院へ瘞むべし。といふを親兵衛うち聞て、犬塚犬飼兩賢兄はいかに思ふやらん。殘に克殺を去るは、則館の御本意ならずや。然ば今日の鬪戦に、自家はさら也、敵といふとも、陣歿して還ることなきは、皆是忠臣ならぬはなし。然るを其死を救ずして、埋めて壤に做ならば、長く怨を結んのみ。各位も知るごとく、我に不死の仙丹あり、姫神授與の神薬にて、深瘡に死したる者といふとも、二晝夜二十四時の中に、蚤く是を用れば、死を起して生に回すこと、譬ば旱天に枯たる苗の、甘雨を得て勃然と、起よりも速なる、其經驗はいぬる比、素藤に撃れたる、御曹司の伴當門の、皆甦生りしを見て知るべし。この義什麼と、請談ずれば、信乃は听つゝ歡びて、現大江が描る所、婦人の仁に似たりなど、いふ者もあらんを、我思ふよしはしからず。夫博く愛するは、則天地の心也。敵ながらも仙丹もて、活して還し遣さば、必や兩管領も、後竟に我君の、大仁至徳に感服して、悔て怨を解なるべし。意ふに今日の鬪戦に、返し合せて戦死したる、寄隊の遊軍、薩内外助及建柴某乙、又濟我の近習なる歟。望見科革など喚做たる壯俊は、俱に恥を知り君を奨して、恩義の爲に陣歿したり。倘是等を活しなば、善を勸る一術ならん。と議するを現八推禁めて、そは亦咱等も同意なれども、大江が所云不死の神薬は、僅に一箇の藥籠に、藏めたるのみならんに、敵と自家の刀瘡戦死千百人に、遺なく用るに足るべきや。と詰るを親兵衛聞あへず、其疑ひは理りながら、我神薬は、幾千人に、用るとも盡ることなし。曩には自家の刀瘡兒に、多く是を用ひし折も、後にも屢是を用ひて、剩分ちて一藥籠を、姥雪の腰に帶させたれども、故の隨にて毫も減らず、この義は心易かるべし。と解れて現八感服して、又いふよしもなかりけり。登時大江親兵衛は、村長等に

うち向ひて、若們目今聞つらん。我不死の薬をもて、敵と自家の兵の死を救まく欲す。なれども用ひて斃なきは、命數盡て免れざる者歟。然らずは積惡隱惡の、歹人にこそあるべけれ。其甦らざる亡骸は、集めてこの野の大坑に棄よ。就て我疑ひ思ふよしあり。那底不知とか喚做す坑は、繁き茅草に掩れたれば、愆て陥る者の、年々にあらんに、若們何どて埋ざるや。と問へば村長等答ていふやう、其義仰ては候へども、那坑は、昔より、埋めまく欲するに、底深ければ、そのかひあらず。試に石を投入れ候へば、水音幽に聞ゆる折あり。然れば底に地黎耶にて、捺落にや續きけん、こゝをもて誰いふとはなしに、底不知とこそ喚做候なれ。と言眞實立て陳すれば、親兵衛聞つゝ沈吟じて、开は亦奇き事なりき。我嚮に愆て、騎馬にて那坑に陥しに、下に受る者ありし歟。底まで至らざる故に、其水あるやなきやを知らねど、力を竭し日を累ねなば、埋めて埋らぬ坑あらんや。と詰るを、信乃は諾なひて、我もしかこそ思ふなれ。因てこゝに愚案あり。嘗聞五十四田河原の岡山は、原是土民們が、暴河の州を浚ひし折、其壤の遺る方なきに、心ともなく築成たりといへり。遮莫那岡は、僅に暴河を隔るものから、國府臺と相對へり。敵倘那岡に据ることあらば、城を守る爲に、害ありて利なかるべし。然らでも禮に云ずや、國に壘多きは、卿大夫の恥也。我異日凱旋の折、この義を館に聞えあげて、必那岡を崩させん。非如その路近からずとも、民皆畊稼の暇ある毎に、日を累ね年を歴るまで、一簣一車の功成らば、愚公の山を移すに至ん、然は思はずや。とうち譚へば、信乃現八等いへばさら也、直元逸友秋季も、政木姥雪以下の、毎も、件の論議を感佩して、其英手をぞ羨みける。こゝをもて義成主は、この次の年より、葛飾二郷の民に課て、五十四田の岡を鋤除せて、底不知の坑を填めさせ給ふに、民皆其盛徳を慕ふの故に、招ざれども聚合來て、其役を懇めしかば、僅に一稔可にして、件の岡を鋤執畢りて、件の坑を填め果しかば、義成主又土民に、五稔の調貢を饒して、其頭の曠野を遺なく鋤せて、新田開發の義を教給ふに、民皆歡びて、勉ざる者なかりしかば、开も二稔可にして、新田を開くこと、數百貫に及びしかば、永く公私の有益になりけ

り。然ばこの課役は、葛西二郷の衆民と、安房藩中の吏人と、心を同にし力を戮せて、害を除き利を興ししかば、時の人こそ新田を名づけて、二郷藩とぞ喚做しける。後の人二合半に作るは、同所ならん歟。且今も、葛西假名町の邊に新田村あり、是等も其餘波ならん歟。左まれ右まれ、道德仁義の、君臣の迹仰ぐべし。こは是後の話也。看官前後を照し見るべし。

第七十回

神藥施し得て敵兵再生す
現八箭を抜て水死の將を救ふ

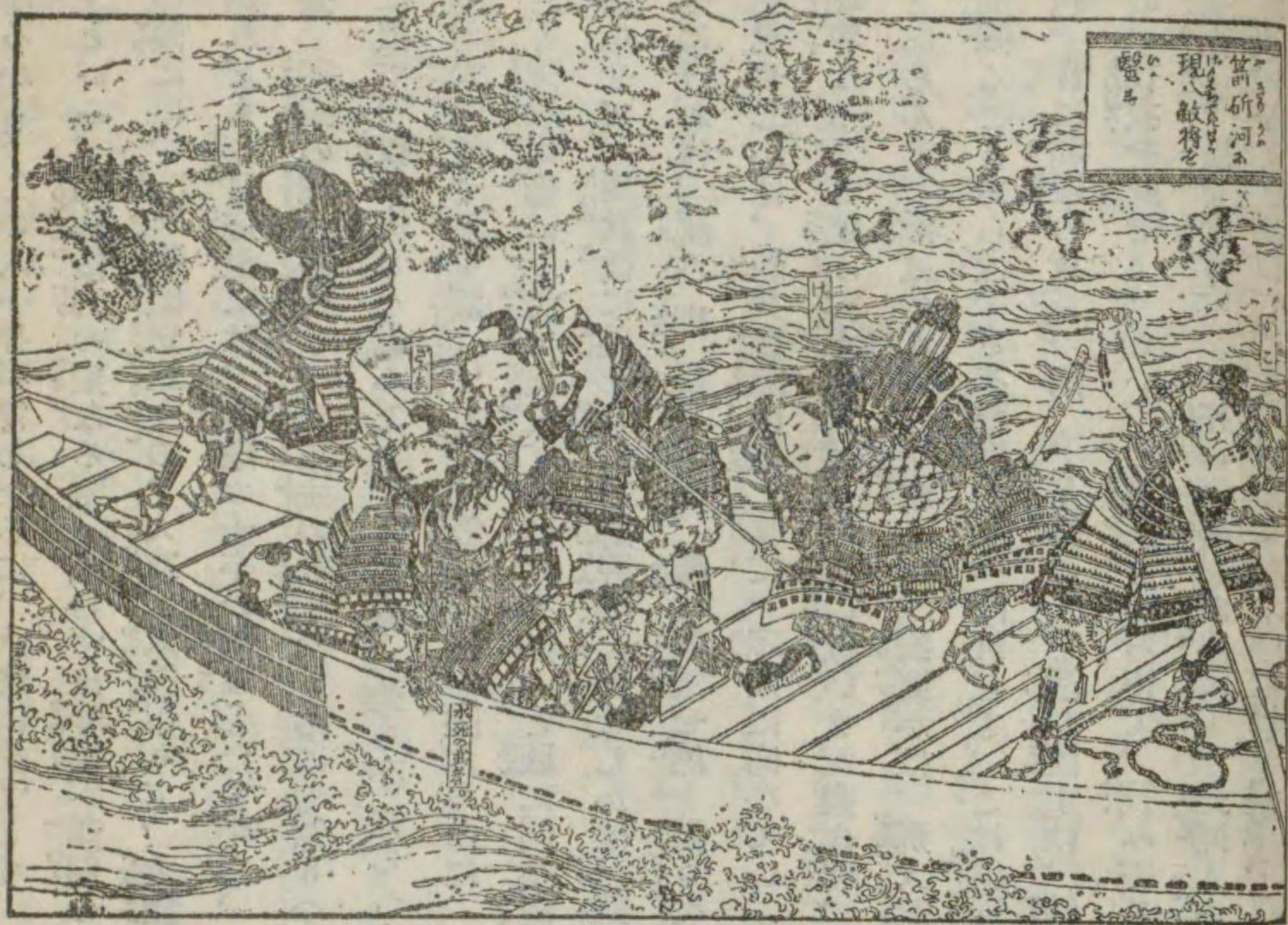
この日大江親兵衛は、博愛仁恕の心をもて、敵自家の差別なく、刀瘡兒及陣歿の兵毎に、神授の仙丹を施して、もて死を起し、生に回さまく欲するに、則信乃現八等と商量して、真間井縦二郎秋季を、施藥の頭人にして、代四郎、紀二六、喜勘太の三名をもて其副とす。他等は這神藥を用るに、よく其事に熟たれば也。然ば真間井秋季は、隊兵四五百名を従へて、代四郎、紀二六、喜勘太等と共に、這葛西なる、村長莊客毎を案内にして、既に立出んとしける程に、瀧に長尾景春と戦ふて、俱に瘡を負ふて仆れたる、須々利壇五郎、二四的寄舎五郎は、手下の野武士等に扶掖れて、索ねて這里に來にければ、親兵衛勞ひ勤りて、腰に吊たる藥籠より、又神藥を拿出して、其瘡に布するに、疼痛立地に祛き瘡愈て、心地清やかに做りしかば、寄舎五壇五は歡びに堪ず、二度の恩惠再生の幸ひありと云、親兵衛に感悅の詞を罄して、且信乃現八直元逸友秋季に、初對面の歡びを演などす、送の口誼は具にせず、看官是を查すべし。當下村長莊客們は、仁が神藥恵まてに、即效の至妙なるを見て、胆を潰しつ感佩して、其君仁慈に御座せば、其臣に亦かくの如き、神藥をもて敵自家の、死を救ふ神童あり、是豈凡夫の所爲ならんや、俱に神人なるべしとて、いよ、憑しく思ひけり、愆而施藥の頭人等は、五百個の隊の兵と、村長莊客們を領て、又戰場へ赴くに、施行の神藥は、曩に親兵衛が分ちて、代四郎に預けたる、一藥籠にて、事足ればとて今さら別に授るに及ばず、只親兵衛は、

代四郎紀二六喜勘太門を、叮嚀に警めて、人の命は千金より重かり。叟よ、直塚も喜勘太も、いふまでにあらねども、今日の施藥は我私の、生賢もて做すにあらず。是使是館の御本意にて、怨に報ふに徳をもてして、其覺るを俟義あれば、敵なりとても等閑なく、一人も多く救ふを善とす、隈なくものせよ、いそぎね。と諭せば、代四郎紀二六喜勘太門、秋季も亦共侶に、こゝろ得果てぞ罷りける。姑且して五十三太素手吉は、曩に政木孝嗣が、樋口維龍を刺斃したる、鎗の精妙、事の光景、簡様々々といひ出て、三犬士に説示すを、孝嗣急に推禁めて、已ね已ね、やよ哥々等よ、あればかりの事、何かあらん。といひつゝ、親兵衛にうち向ひて、在下今日の鬪戦に、長尾が隊長雜兵さへ、幾人歟斃し、かども、素より名利の爲にせねば、其首を捕らさ候ひき、愆て後に承りぬ。里見殿の御軍令に、敵の首を捕る者は、是軍功の二の町にて、必重賞すべからず、と掟させ給ひし、と人の告るに、こゝろ得がたく、虚言ならんと思ひしに、和君所藏の神藥をもて、敵の死をだも、救んとある、至仁の計議に照して見れば、實に仁の御盛徳、感ずるに餘りあり、敬服至極仕りぬ。と謝すれば親兵衛信乃現八も、孝嗣は今番のみならず、曩に素藤を對治の折も、敵の首を捕らずと聞えし、心操をぞ誓にける。當下直元逸友は、信乃現八に向ひていふやう、兩君は、いかに思ひ給ふやらん。約莫這回の一奇事は、那野豬に候はずや。初寄隊の戰車を燒て、三面敗績しぬる時、那野豬は、敵に刺れず火にも燒れず、掻消すごとく見えす做りしは、最怪むべき事なるに、寄隊の三將返し來て、三面各死を争ふ、戦ひ闌なりし時、件野豬六十五頭は、又忽焉と出て來て、寄隊の騎馬を駈けしける、幫助によりて、恚速に埒は開にき、倘那野豬微りせば、他人は知す、卑職等は、成氏主の一陣を、敗り難かる勢い也。と告れば現八點頭て、开は亦那等も同意也、那野豬の幫助によりて、然ばかり骨を折らずして、寄隊の副將を生拘にき、寔に可賀可賀。と祝せば信乃も笑局に入て、却親兵衛に恚々と、靈豬の事の顛末を、告れば親兵衛感嘆して、咱等も亦京師に在りし時、故畫の虎に靈憑て、拔出て山に入りしを、管領政元主の爲に、對治しける奇談あり。其首尾は簡様々々。

と徳用堅削の毒悪、政元主僕の奸詐、并に五虎の確執横死、又秋篠廣政が、賢才の計議まで、當時の崖略を、詳に説示せば、信乃現八はいふもさら也、大家耳を歎て、親兵衛が弓馬の本事は、天助神祐あるに似たと、其畫の虎の奇譚に、軍旅の疲勞を慰めて、感嘆せざるはなかりけり。有徳りし程に、季冬の暮の、稍伸たるも短く覺て、大陽斜に做りけるを、現八瞻仰て信乃にいふやう、寄隊は遺なく敗績して、この地に在らずなりしといへば、我門徳而居らんは要なし。和殿は杉倉と共侶に、大江井に政木以下、新參の人々を相伴ふて、岡山へ還り給はずや、御曹司の大江等を、さぞな待不樂給ふべけれ。我等はこゝより、假名町頭に赴きて、寄隊は既に大河をうち渉して、遠く逃走りたるや、否を穿鑿り果して、後にこそ參るべけれ。といそがし立るを、信乃諾なひて、其議寔にしかるべし。嚮には御曹司の御危戦を、我門其折知らざりければ、いまだ歸陣の歡びを稟し上ず、且全勝の後易きを、注進し奉らずはあるべからず。いでこゝといひつゝも、總て親兵衛と直元孝嗣門に、こゝろ得させつ、逸友と、隊兵過半をこゝに留めて、現八の勅助とす。配分亟に定りしかば、信乃は則親兵衛と、孝嗣次團太、鯉三、五十三太素手吉、寄舎五郎、壇五郎、并に手下の野武士高師等を従へて、杉倉直元と共侶に、二隊の士卒と、大江の夥兵と、伴當を相從せて、岡山を致てかへりゆく程に、現八は亦逸友と共侶に、隊兵一千七百名を領て、假名町へといそぎけり。爾程に眞間井樞二郎秋季、姥雪與保、直塚紀二六、漕地喜勘太等は、秋季の隊兵每と共侶に、其地其地の莊客們に、夫役を課て、自他陣歿の士卒を檢するに、自家は雜兵のみにして、有名の兵は、刀瘡兒のみ是あり。又寄隊には、山内顯定の遊軍、總内外助惟定、建柴浦介廣望、足利成氏の近習、科革七郎、望見一郎等、深遠數箇所ならぬはなし。又長尾景春の先鋒の頭人、樋口小二郎維龍、梶原後平二景澄、荻野五九郎泰儀等、處々に分散して在り。そが中に梶原景澄は、大塚信乃と鎗を交へし時、小鬘の外を刺れたれども、幸にして痰深からざりければ、腦を破るに至らず、又荻野泰儀は、項を刺れしに、こゝも其食道を外れて、左の方を傷られたるのみ。こゝをもて、怒る必死の毎も、共に亦再生

の藥の驗あり。代四郎は腰に帶たる神藥を、一個々に其舌に塗らして、且瘡口に藥を布くに、輕きは即時に甦生るもあり、重きは一時、或は二時、三時の程に呼吸出て、皆我に復らぬはなし。登時秋季與保等は、再生の敵兵を勦り慰めて、里見殿の軍令は、簡様々々。と仁義の要領を説示すに、鬪戰は、已ことを得ざる所行にて、其本意にあらす。こゝをもて自家の士卒に令して、專當の敵を撃果すとも、首を捕るを功とせられず、既に勝負定りて、鬪戰果ても、首實檢を行れず。仁慈はこのよしのみならず、非如敵の士卒也とも、戰ひ難義に及ぶ時、君の爲に戰死したるは、則是忠臣也、誰か憐むべからざらん。其陣歿の毎は、大江親兵衛が神授の仙丹をもて、生して返し遣すべしとある、御曹司の御説によりて、我門施藥の頭人たり。汝達降んと願ふ者は、則留めて召使はるべし。又其本貫へ還らまく欲する者は、隨意返し遣さるべし。この義によりて主張せよ。と言町寧に諭し示せば、大家夢の覺たる如く、其大仁と、神藥の經驗即妙なるを歡びて、感涙坐に找むまてに、敬服せざるはなかりけり。然れども、有名の勇士等は、この再生の恩によりて、降參せんはさすがにて、放ち遣られんことを、願ふ者も亦尠からず、秋季與保この義を以て信乃現八親兵衛に報て、且義通の下知により、放免せらるゝ寄隊の頭人は、總内外助、建柴浦介、樋口小二郎、梶原後平二、荻野五九郎、科革七郎、望見一郎也、この餘猶あるべし。然ばこの頭人等が、異日君邊にかへり來て、里見の仁心、簡様々々。と神藥施行の事までも、詳に告しかば、顯定景春駭嘆じて、懲りて、後悔せざることなし。こゝをもて、里見數世の後までも、山内扇谷の兩管領は、敢境を侵さずなりしは、只この一擧によりて也。問話休題、この日又神藥の奇効によりて、再生たる、寄隊の雜兵の泛々なるは、降らんと願ふも多かり。是等は皆國府臺の城へ駈入れて、軍役に充られけり。或は又敵の士卒の神藥の效あらで、甦らざる者の亡骸は、是命數限りある者歟。然らずは其性不仁にて、積惡の者なるべし。那在村と素行が。死首を土民に捕られて、再生の便著あらずなりしは、これ天罰の甚しき者なれども、亡骸のみは人並に、聚合て底不知野なる、坑に藏めて葬

るに及ばず。愆而この次の年に、岡山の壤をもて、件の坑を填め果し時、國府臺の守城の頭人、眞間井樅二郎秋季、繼橋綿四郎喬梁等、相謀て、那坑の迹なる塚の上に、石像の地藏菩薩一軀を造立しかば、土俗、是を底不知の、千人塚とぞ喚做しける。こも亦後の話也。却説、犬飼現八信道は、隊の兵多く従へて、權且假名町に陣を移して、寄隊の三將、顯定、成氏景春の、敗北の往方を探り極るに、皆大河をうち渡して、往方も知ずなりしと云、民の懇紛れもなきを、現八聞てしからんには、ここに居らんも亦要なし、疾岡山へ參らんとて、次の日の曉天に、田税力助逸友と共に、假名町を退陣して、連りに士卒をいそがせつゝ、岡山に近くなる隨に、先雜兵を走せて、陣營に告稟しゝに、義通君は、昨日自家の全勝の聞えありし時、東六郎が計ひ稟して、國府臺へ歸城し給ひぬ。この故に當所の陣營には、老練の士卒一千有餘をもて、守らせ給ふと聞えしかば、現八力助等は、岡山へ至るに及ばず、這方の岸に、多く維ぎ措れたる戦艦に、先逸友と士卒を載て、前岸へ渡し果させて、却現八は、故意隊の兵二十名を將て、徐に艦にうち乗りて、漕せて前面へ渡しけり。こは士卒拵合て、混亂させじと思へばなり。浩處に、擲甲たる一個の武者の浮死骸、海のかたより流れ來て、今横走る艦に墮れ係りて、流れもあへずありけるを、現八は心ともなく、見つゝ疑ひ訝りて、眼を定めて猶よく見れば、寄隊の大將品たる者にやあらむ、頭鎧の火形は白銀なるべし。肩額は黄金なる敷、水に透徹りて、隱々と見く光景は、宛小年魚の走る如く、澤瀉の花の淪むに似たれば、現八いよく訝りて、肚裏に思ふやう、昨日も亦隔昨も、岡山下の闘戦に。寄隊は一個の仿武者也とも、謬て此頭の河に、陥て溺死すべくもあらず。今引揚てよく檢せずは、我疑ひを解くよしなけん、と尋思をしつゝ、聲を立て、やよ兵毎、今この艦に流れ係りてある、那屍骸を掖揚よ。と叫べば、篙師們阿と應て、一人蚤く鉤索をもて、件の屍骸を掛止れば、自餘の篙師力を勤して、連りに艦を漕ぐ程に、艦は、懸て、前方の岸に寄りけり。然ども現八は尙岸に登らず、今保留たる浮死骸を、艦に掖登させて是を見るに、果して寄隊の大將にぞあらんずらむ。這人年齢は、二十許にて、面の色



(す 鑿を將敵八現に河新箭)

白く眉厚くして、相貌野しからず、身には上絹絨の、薄鉄の鎧の上に、梧桐の鳳凰の浮紋ある、故金襴の戰袍を被下して、皁皮の尻鞆掛たる、黄金袷装の大刀を佩たりし、开が乳の上三寸許、膺托の外を射られたる、征箭一枝、篋深く立てそが儘これあり、且頭鎧の肩額を又よく見るに、純金にて彫做したる、雉に群雀の花號ありければ、原來是の後生は、豫聞、行徳口へ寄隊の一將、扇谷定正主の嫡子なる、上杉五郎丸朝良主歟、然らずは定正の庶長子にて、洲洲へ寄する水軍の副將と聞えし上杉式部少輔輔寧主なるべし。要こそあれ、と尋思をしつゝ、其箭をやをら拔取りて見るに、箭幹に漆せし、四箇の細字ありて、犬山忠與と讀れしかば、現八思はず愕然たる、肚裏に又思ふやう、原來昨日水路の寄隊と、水戦の勝負ありし時、この朝寧を、道節が射て水中へ落せしならん。然ばこそあれ這死骸、安房歟、相摸の浦よりして、流々て一宵經て、この暴河へ漂ひ入りて、今我艦に、掛りしより稍是を知る事、不用意にして、不用意ならず、前より約束あるが如きは、噫奇なるかな妙

なるかも。この人一身甲冑したるに、水底に沈ずして、浮流れしも亦奇也。意ふに這鎧は薄鉄にて、水に入りても沈ずといふ、那南倭刀の類なる歟、然らずは琴高が浮劍の類歟、そは左まれ右もあれ、是によりて猜するに、昨日洲崎の澳には、必寄隊定正主の、大軍と水戦ありて、大阪が謀る所の、八百八人行れて。敵を輒にせしならむ。しかれども昨日這里には、寄隊の士卒の陣歿したるすら、大江親兵衛が仁術をもて、多く生して返せしに、この人は是、寄隊の總大將たる、定正主の愛子ならんに、知りつゝ其死を救はずは、我君大仁博愛の、御盛徳に欠たる所あるに似て、後に悔しく思ふことあらん歟、是も亦知るべからず。然ばとて、この人矢傷を身に負ふて、水中に落しより、大洋數十里を漂流れて、既に一夜を歴たらんに、非如大江が神薬なりとも、救ひ得がたかるべけれ。とは思へども先親兵衛に、告て商量するには不如、と吐に問ひ腹に答て、主意既に決りしかば、懸て一個の雑兵を、臺の城へ走らせて、親兵衛に義を告て、那神薬を乞せしかば、親兵衛聞て、時を移さず、伴當才に二三名を將て、其使と俱に來にければ、現八則親兵衛を、艦に請乗せ席を譲りて、告ること上に寫し、如く、且其意衷を解示して、件の死駭を見せしかば、親兵衛隨即檢し畢て、現八に向ひていふやう、犬飼和殿の推量妙也。こは寄隊水軍の副將と聞えし、朝寧なること違ふべからず。この人命數いまだ盡きず、且平生隱匿なく、死して二十四時を過すは、活すに生ざるべしとあらんや。然ば今この死を救ふて、拘置かば、那大敵を、いよく懲すに足りぬべし。この義を異日犬山が、傳へ聞知ることあらば、さぞな腹を立べけれども、こは道節が仇の子にて、正敵にあらざれば、飽まで盡すは要なき所行也。實に和殿の意見の如く、是等の人を活し置ずは、館の仁慈、天地に等しき、御盛徳に違ふべし。兵毎早く此死人の、戎衣を脱せよ。といふに雑兵こゝろ得て、找み寄る者兩三名、左右して水死の武者の、戎衣を解き果しかば、親兵衛則腰を撈りて、不死の神薬を拿出つゝ、先死人の口中へ、兩三番推入れて、又その矢傷へ推入れつゝ、そが上に又藥を布きなどして、又其胸膈へ塗らし畢て、却筋力ある雑兵に吩咐て、死人を、倒に抱せて、いと徐に推立てて、

其腹内に在る所の、潮水を吐するに、譬ば壘器を輾したることく、其口より出る水、幾舛なるを知ず、既にして吐盡せし時、やをら推居させて是を見るに、初は土の如くなりける、面部總身、稍血色を出し來て、中腕温熱あるに似たれば、親兵衛うち歡びて、恚ては這人必生くべし。徐に城内へ昇入させて、臥さするにしくことなし。といふに現八こゝろ得て、又雜兵を城へ走らせて、轎子一挺昇せ來させて、則其轎子に、件の武者をうち乗せて、昇せて臺の城へ遺すに、現八親兵衛は、左右に立てゆく程に、犬飼が隊の兵毎も、艦より出て、轎子を、うち守りつゝ齊整たり。恚而犬飼現八大江親兵衛は、俱に國府臺の城にかへり來つ、則犬塚信乃に、件のよしを告知せて、且東辰相に就て、義通君に聞え上て、却水死の少武者を、そが儘閑室に臥しめて、士卒に是を守らするに、約二時許にして、那人遂に甦生りて、手を動し又脚を動しなどする程に、稍我に復りけん、やをら頭を擡げつゝ、己を守る士卒を見て、うち驚くのみ所以を知ず、其身のこゝに在るよしを、悟難つゝ士卒に問へば、士卒則其義を告るに、心いよく驚れぬる、身は、愁に蘇生して、果敢なく敵の城内に、俘囚に做りし悔しさよ、と思ふものから可爲もなし。恚而現八親兵衛信乃等が、義通君の旨を請まつり、且辰相に告て、直元と共侶に、這蘇生の少武者を、城の問注廳に召出して、其姓名來歴を鞫問するに、詞を卑くし禮を正しくして、叮嚀に問慰めしかば、少武者は里見君臣の、仁に愧義に服して、頼陳ずることを得ず、言皆其實情を招了しけり。是によりて這人は、管領定正の、庶長子なる、式部少輔朝寧なるよしも、正可に知られ、又昨日洲崎の澳の鬪戦に、寄隊敗績しける事の光景も、那里の告を待すして、這里には夙く聞えけり。夫得と失とは天に在り、又人に在り。求るときは則得、棄るときは則失ふ、こは其得失の人に在る者也。又不用意にして得ぬるあり、小心して、反て是を失ふことあり。這得失は天に在り、人のよく做す所にあらず。譬ば老氏の所云、泰山に貨あり、貨に心なき者、これを得るといふが如し。看官こゝに意せよ。蓋這陸路二箇所の鬪戦に、滿呂復五郎重時は、寄隊の大將朝良を、深川の磯に赶蒐逼りて、既に擒にすべかりしを、反て大阪毛野に

獲られたり。這得失は人に在り。又洲崎の澳の水戦に、犬山道節忠興は、上杉朝寧を射て落したれども、矢場に其首を捕るに由なく、反て現八に其敵を獲られて、剩親兵衛が神薬にて、朝寧は再生たり。這得失は天に在り、人のよく作す所にあらず。是故に曰、得と失は天にあり、又人に在り。よく思はずはあるべからず。世の人この理に暗ければ、惑ふて且天を怨み、人を咎めざるはなし。开を醒さまく欲するは、作者の老婆深切にて、是本傳の、本傳たる以所也。越に先其緒を解く、道節朝寧を射る事は、後回水戦の段に具也。看官前後を照して見るべし。

南總里見八犬傳 第九輯 卷之四十二上 終

南總里見八犬傳 第九輯 卷之四十二下

東都 曲亭主人編次

第七十一回

神變を操りて伏姫猶子の初陣を華やかにす
舊君に調して信乃父祖の忠義を評にす

是より先に、犬塚信乃戊孝、杉倉武者介直元、及大江親兵衛仁等は、新參の義士、政木大至孝嗣并に石龜次團太、越前三、向水五十三太、枝獨鉆素手吉、須々利壇五郎、二四的寄舎五郎等の義士と、其徒さへうち合せし、隊の者多く従へて、十二月八日の下晡に、岡山の陣營にかへり來ぬる程に、義通君は、自家勝軍のよし聞えし時、東六郎辰相が薦め稟すによりて、岡の陣營には、鳥山真人以下、老練の士卒、一千有餘を留め成らせて、既に國府臺の城へ、還らせ給ひぬ、と聞えしかば、信乃等は徑に、箭所河を舫渡りして、臺の城に歸陣しつ、隨即東辰相に就て、寄隊は皆敗績して、迹なく落亡せし事、政木孝嗣門が、義俠勤軍戰功の事、大江親兵衛が歸東、武功拔萃の事、并に姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太等が、武勇の擢きの事、又二四的寄舎五郎、須々利壇五郎門が忠戰の事、又大江親兵衛が意見をもて、神授の靈丹を施行して自家の、士卒は更也、敵といへども忠死の者は、死を起し生に回して、降らんと請ふ者は是を留め、本貫に還り去まく願ふ者は、饒して放ち遣るべき事、但し滯我の佞臣、横堀在村、新織素行は、信乃に射て斃されし時、士民が、其首を捕て、齎せし積惡天罰の事、又犬飼現八は、猶殘虐を鎮ん爲に、權且假名町に在陣の事、又真間井樞二郎、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太は、或は施薬の頭人を奉り、或は施薬の裁領として、猶昨今の戰場に在勤の事、今朝しも寄隊の、三將再戰の時、那野猪六十五頭、又忽焉と見れ出て、自

家を援けて、寄隊を敗りし、出沒不測の事までも、漏すことなく告稟しよかば、義通感悦いふべうもあらず、この宵正應に出まして、信乃親兵衛、并に直元喬梁、正木孝嗣さへ、召よせて、對面し給ひけり。この他、大飼現八、田税逸友は、猶假名町の陣中に在り、又潤鷺手右内美容は、深痕を負ふて、臥てこの城内に在りしを、親兵衛が來ぬるに及びて、又神藥の奇効によりて、亟に愈ることを得たり。只手古内のみならず、嚮に義通の從軍たる者の疾を負へるは、皆親兵衛が神藥にて、一人も恙なかりけり。又次團太、鯉三、五十三太、素手吉們は、義俠といへども町人也、又直塚紀二六、漕地喜勘太は再臣なり、又須々利壇五郎、二四的寄舎五郎們は、他郷の野武士なり、こも亦俱に功はあるべけれども、防禦使及隊長等と、必同列なるべからずとて、是等は次の日、大飼現八、田税逸友、姥雪代四郎等がかへり來て、義通君に拜見の後、別に皆召出されて、功を譽させ給ひけり。間話休題、この宵義通君は、大塚信乃、大江親兵衛、杉倉武者助、繼橋綿四郎、政木大全を召よせて、兩茶の禮を賜るに、東六郎執達たり。給侍には、七浦六郎、朝夷三彌、白濱七郎ぞ侍りける。當下義通は、信乃親兵衛、大全等が、軍功を譽させて、うち譚ひ給ふやう、嚮には大飼現八が、齋藤兵衛太郎を生拘りて、當城へまゐらせたる、是軍功の首にて、今日は又寄隊の副將、上杉五郎憲房を擒にして、岡の陣營へ牽せしは、其勳功、全く現八にあるに似たり。然りけれども、信乃が火猪の謀をもて、寄隊の戰車を焼にあらすは、今日の全勝を得たかるべし。有恧れば其軍功は、正副伯仲すといはん歟。是に似るべくもあらぬ、咱等は二犬士と、直元逸友等が、鬪戰を援んとて、曩に岡山より出陣しける、途に長尾景春の、三隊の勅兵に撞見して、鬪戰難義に及びし折、思ひがけなき政木大全が、親兵衛と交遊の義に仗りて、他に立も代らんとて、同憂同宿の義士、次團太鯉三、五十三太素手吉とかいふ者と共侶に、其徒六七十を從へて、突然として援け來て、那鋒尖を折けども、尙勝負を分たざりしに、又幸ひに親兵衛が、京都よりかへり來て、伴當影兵、新參の義士門と俱に、數十名をもて援て、一瞬間に那勅敵を、殺戮し撃走らして、剩、景春の愛子と聞えし、長尾爲景を

擒にして、當城へ進らせしは、我面をしも起したる、這大功は、信乃現八に、指揮すといはまくのみ、孰れを伯とし孰を仲とせん、只感悦の外あらず。と年には倍て愉快くも、詞委なく稱へ給へば、辰相是を執合した、御説畏う承り候ひぬ。抑三犬士の才幹武勇は、左右いふべくも候はわども、就中大江仁が、殺伐攻戰の場に于て、仁慈の心を喪はず、敵に施藥の一條は、宋襄の仁に似たれども、武をもて人を征する者は、威勢必長久ならず、徳をもて人を征する者は、十世の後まで川流して、淳和せずといふことなし。則是館の御本意なるを、親兵衛がよく仕りぬ。と譽るを親兵衛推禁めて、御家老、仁を差殺なし給ひそ。館の御盛徳は格別也、臣等は今日來て今日承りし、御軍令に従ふのみ。細人の威勢あるは、政忌憚ることなし。懲して新に做すにあらずは、争ひ已ときなかるべし、と思ふばかりの所行なりき。と辭ふを信乃は諾なひて、其言愚意も相似たり。譬ば那靈猪の如きは、牙に蕉火を結著たれば、戰車を燒きしは然ることなれども、其折一頭も火に死なず、又敵にも擡殺されず、征方も知ずなりけるに、亦再戰の折に顯れ出で、自家を援けて敵の騎馬を、駈仆し又駈破りて、掻消す如く見えたりにき。意ふに懲る奇事は、則當家を守り給ふ、伏姫神の冥助ならずは、猛き獸のいかにして、懲る擗きを做すことあらんや。畢竟我君年來の、御善政の餘福にて、臣等が功德ならざるを、御褒賞は、倒にて、當りがたく候。と謝するを義通君推禁めて、信乃、其靈猪の事はしも、又一層の奇事あり、六郎具に告すや。と仰に辰相阿と應て、膝を找めて談するやう、犬塚大江、自餘の人々も听わかし。嚮に郎君岡山より、御歸城の議定りて、既に出んとし給ふ程に、怪むべし、一個の野猪大きき積に等しきが、一個の武者の鎧の表帯を、牙に引掛け背に載て、走る事飛鳥の如く、岡に登りつ、郎君の、御馬前に來にければ、伴の衆兵吐嗟と騒ぎて、防ぎ禁んとせし程に、野猪は背なる、武者を撞と振墜して、走りて往方は知すなりにき。こは未曾有の奇事なれば、咱等、則雜兵に、件の武者を扶起させてよく見るに、大將品の人なるべし、我衣都て綺羅やかなるが、既に半生半死にて在りしかば、藥を與へ、勦せて、且其姓名來歴を鞫問するに、其武者い

はざることを得ず。則寄隊の大將にて、許我の左兵衛督成氏也。嚮に自家敗軍の折、鈍くも暴猪に馬を仆されて、身も駈られき、と思ひしのみ、こゝへ將て來ぬるを覺す。意ふに這里は敵陣ならん。命運の傾く所、今更免るゝに路あらず。左も右もせられよ、と陳じ給ひしかば、咱等則答ふらく、御推量の如く這地方は、岡山の陣營にて、目今義通歸城の折也。御心易く思召ね。寡君義成は仁人なるに、父祖の舊交も候へば、御命に及ぶべくもあらず。先國府臺の城へ俱しまつらん、卒給へ、と慰めて、そが儘馬に扶け乗せて、士卒に緊しく守せて、當城内へ俱して來つ、則一室に屏籠て、番士を置て守らせたり。獨那君のみならず、大飼大江が擒にして、當城内へまゐらせし、憲房主あり、爲景孺子あり、又齋藤盛實あり、こも貴人也、隊長なれば、各檻室を異にして、衛士多く附置きぬ。城内賓客多かるは、是和殿門の手柄也、愛たき事にあらずや。と告るに感ずる、親兵衛はさら也、直元はうち驚くまで、且呆れ、且歡びて答るやう、原來かの折、成氏主も、靈野猪に駈られて、岡山へ將て去られし歟。臣等は、鬪戰稍克得て、敵を漏さじと思ひしのみ、然る光景を見ざれば知らず。さても、とばかりにて、悟るに由もなかりけり。當下信乃は、謹みて、辰相に答るやう、目今創て承る、那靈猪の擗きは、實に奇中の一大奇事にて、人のよく做得べき事にあらず。初臣等は、箭祈河をうち渡して、寄隊を逆へて戰ひしかども、成氏主の一隊には、直元逸友をのみ相向はせて、臣等は一トたびも箭を飛び、鋒を交へ候はず。其故如何とならば、那君は、臣等が大父、大塚匠作の主筋にて、父番作も當初は、其餘祿をもて成長れり。又義兄弟大飼現八が爲には、是現在の故主也。今は恩仇地を易て、讐敵の思ひをせらるゝとも、只君命をのみ倡て、鋒を交へ箭を飛ばし、戰ひ克て、或は生拘り、或は其首を捕らば、人其是を何とかいはん。君子の忍びざる所なれば、正人には憎るべし。この故に今日の再戰にも、臣等は、眞間井秋季を將て、顯定主と挑み戰ひ、現八は亦繼橋喬梁を副として、憲房主と戰ふて、却成氏主の一隊には、杉倉と田税を指向て、三面俱に戰克しは、靈猪の援によりてなり。爾るにかの折直元逸友兩個をもて、成氏主を擒にせば、臣等が

做すにあらねども、臣等は防禦の正使にて、其軍配は外ならず、則臣等が、隊配なれば、五十歩百歩の差池あるのみ、臣等が擒に做せしに同じ。この故に神明地靈、那靈猪をもて、成氏主を駈馳せて、岡山なる御陣へ餓りて、もて郎若の御手に入れて、這回郎若初陣の、御手柄に做されしかば、臣等は故主を擒にすと云、悪名を得ずなりにき、と今こそ悟れ其奇其妙、凡智に量知られんや、必是伏姫神の、神通廣大にして、物に憑給ふ、冥助に疑なかるべし、と思ふも疎に候はめ。と心の誠うち出て、言細やかに解論せば、義通感悦いふべうもあらず、況や辰相直元孝嗣等が、説れて思旋らせば、信乃が誠心、始を忘れず、曩には飽まで情なかりし、那君をしも怒ることなき、理義分明なる高論は、人の惑ひを醒すに足れり。こも學問の力にこそ。と感嘆すれば親兵衛も、有理々々然也。と點頭て、唇言也。とぞ稱へける。然ば義通凱陣の後、この義を嚴君、義成主に告給ひしかば義成則、箭祈河原なる摩利支天神へ、堂料五十貫文を寄布し給ひて、且其堂内に、伏姫神の神號木主を置くことを許すべし。と制度せらる。是によりて、摩利支天の別當西妙、并に初那野猪六十五頭を、虚舟より援陟して養置ける莊客們に、米錢許多賜りしかば、皆國恩を拜戴して、歡ざるはなかりけり。こは是後の話也。却説、この宵國府臺なる城内には、信乃等が云云と、議し稟す程に、小夜深しかば、親兵衛則計ひ稟しつ、政木大是苦戰の疲勞あらん、疾憩室へ退りて、睡に就べしとて、身の暇を賜ひしかば、案内者等孝嗣を俱して、外面へ退出にけり。登時信乃は、又辰相等に談ずるやう、この地の大敵皆散落して、稍靜悄に垂とす。明日は夙めて急遞脚の使者を、洲崎の御陣へまゐらせて、先この義を告まつり。且那里の御安危を、伺ひ奉らずばあるべからず。但し行徳口なる防禦使、莊介小文吾はいかなるや。先他等に仰合されずは、不便にこそ候はめ。と議すれば亦親兵衛も俱にいふやう、臣等は京師より、御使を果し來て、いまだ稻村へ進らざれども、嚮に信乃に傳達せられて、防禦使たるべきよしの、台命を奉り、且御大刀さへ賜りたれば、寄敵この地に在らん程は、鬪戰を援け奉るべし。寄敵既に退たるに、猶當城に掩留せば、怠れるに似て、不思なるべくや。といふ

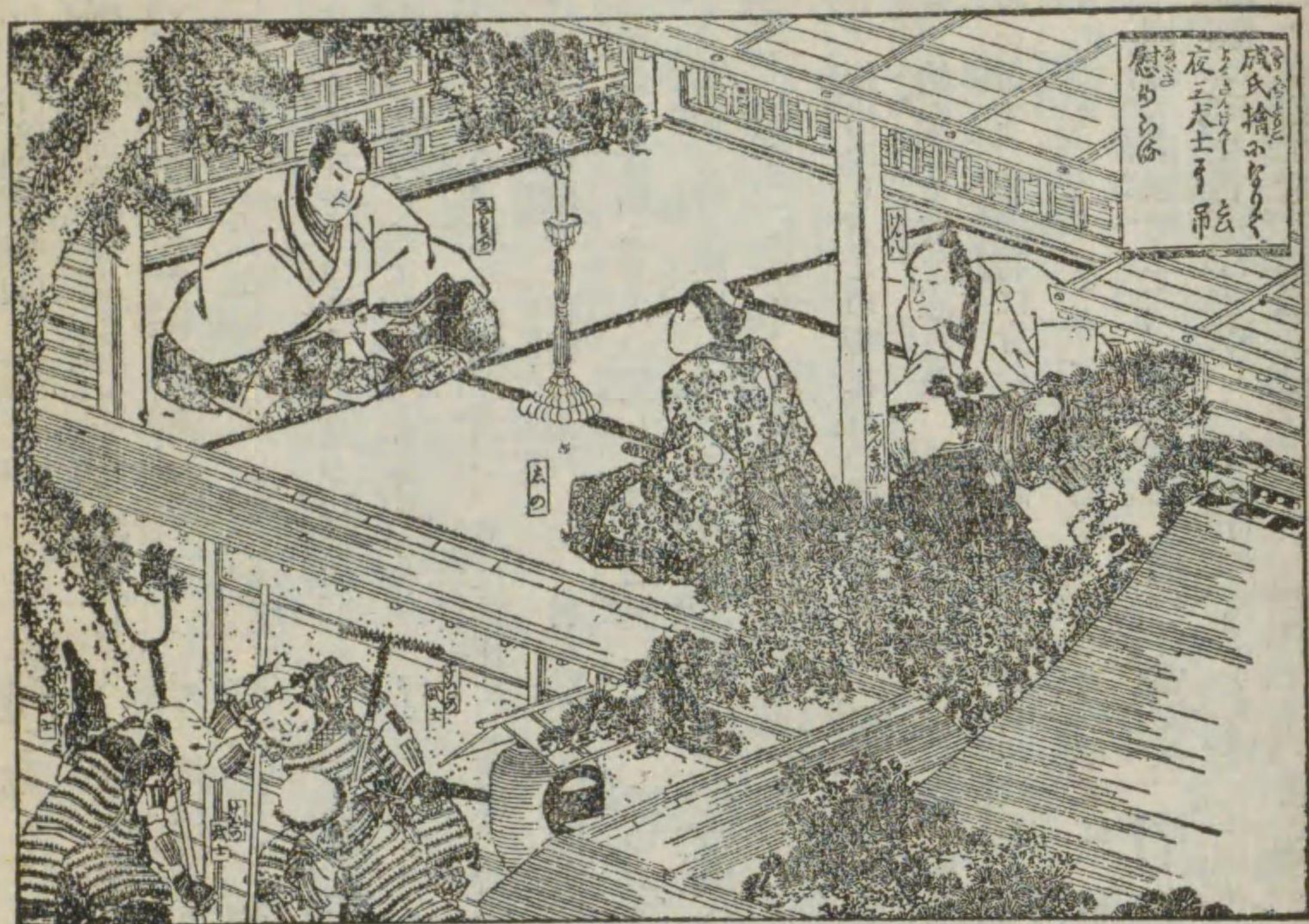
議論を、辰相うち聞いて、二犬士の意見其理あり。然らば行徳へは、振照俱教二を遣して、那川の安危を問すべし。又洲崎の御陣へは、繼橋綿四郎をまゐらせて、この地の勝軍を注進せん。大江生は従來の夥兵兩三個をもて、歸東の由を告奉りて、寄隊彌在らず做なば、その折稻村へ参るとも、いまだ遅きにあらざるべし。と議すれば、二犬士この意に儘せて、直元と共侶に、退りて連署の注進状を、筆吏に寫せなどす。既にして曉天になりし時候、振照俱教二弘經は、義通君の命によりて、夥兵幾名か領て、行徳口なる大川犬田が、陣營に赴きしに、那川より莊介小文吾の使として、滿呂再太郎信重が、安西就介景重が隊の兵を將て、快船にうち乗りつゝ、暴河を浜り來て、大川犬田が勝軍の告文と、信乃現八へ與る書狀を呈閱す。是によりて、這再太郎は、滿呂復五郎重時の、養嗣たるべき者なるよしも、又就介は、安西出來介が、獨子なるよしも知られて、那川の鬪戦に、莊介小文吾が、千葉自胤と大石憲重原胤久等を擒にしたる事、胤久は深瘡にて、命危きよしも、告文に載たるに、且再太郎就介が、口狀にて具也ければ、東辰相歡び譽て、這兩個の少年を、見參に入れしかば、義通則再太郎就介に、牽出物を賜りて、則這里よりも、方僅振照弘經を遣せしかば、若們が還りいなざる以前に這方の事は知らるべし。只この上は、館へ注進をいそぐべし。と仰合させて、身の暇を賜ひけり。この時大江親兵衛は、那里にも刀槍人多しと聞て、則神藥一盒を、莊介小文吾に餽り遣せしかば、那隊の士卒の重瘡はさら也、原胤久の如き必死の人も、死ざることを得たりけり。愆而繼橋綿四郎喬梁と、大江親兵衛が夥兵毎は、この朝安房へ忽遞脚の使を承りて、洲崎の陣營へ赴きけり。有恸りし程に、五十三太素手吉は、次國太鯨三等と俱に、見參の禮果て、兩國河原へ退らんと請ひしを、義通固く留め給へども、他們は只氣を便ひ、任侠を磨くのみにて、武士たる事を欲りせず、熟たる活業も候へば、枉て身の暇を賜るべし。と願ひ稟すにより、親兵衛孝嗣も、是を禁るに術なきよしを聞え上しかば、則五十三太素手吉等六七十名には、當坐の賞祿を多く賜りて、異日稻村より召れなば、必まゐるべし。と仰らる。この時亦孝嗣も意衷を陳て、既に大江に代りまく欲り

しし志は果したり。今は大江のかへり來て、且寄敵落亡たれば、この地に所用なき身になりぬ。向水門と共侶に、退るべしといひしを、親兵衛何てふ饒すべき。義通君も、其言を傳へ聞て、放ち給ふべくもあらず、管待いよく厚かりければ、孝嗣は今さらに、辭ひ稟さんはさすがにて、只得次國太鯨三等と俱に、當城に留りけり。爾程に犬飼現八は、寄隊敗軍の往方を穿鑿果して、田税逸友と俱に、假名町を退陣して、當城へかへり來ぬる程に、箭斫河にて、思ひがけなき、水路の敵將、扇谷式部少輔朝寧の水死を甦生らせて、更に擒にしたるよしは、既に上に見えたる如し。現八及力助逸友等は、敵將足利成氏を、靈野猪が駈齋して、義通君の初陣の、華に做せしといふ奇談に、胆を潰しつ相賀して、逸友と、共侶に、義通君に見參す。又真間井樅二郎、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太等は、神樂施行の事果て、この日の囃音にかへり來にければ、親兵衛は明日の早天に、代四郎以下の毎と、孝嗣次國太鯨三等、寄舎五郎壇五郎、その黨さへ相伴ひて、安房へ還まく欲す。恁遽し折なれば、親兵衛が京師にてありし事、又歸路の事は、義通君にも辰相にも、告るに具ならざるものから、事に觸ては聞知る者あり。然らても信乃等が聞つる隨に、義通君に告稟せしかば、人咸これを知ざるはなく、奇異に驚き武勇を譽て、もて茶話にぞしたりける。間話休題。爾程に信乃親兵衛は、敵といへども生口の敗將、隊長を侮り卑めず、義通君に聞え上て、其款待に等閑なく、警固の士卒を傲めて、無禮なることを饒さざりしかば、現八も共侶に、三四室なる囹圄を看輪りて、憲房爲景、盛實等を問慰るに、憲房爲景は、羞て頭を擡げ得ず、衣うち被きて、陽睡して居り。又成氏の身邊に造るに、是も亦、警固の士卒にうち圍れて、燈燭の下なる棚の上に坐して、手を又き頭を低て在り。當下信乃現八親兵衛は、鎖を衛子等に啓せて、俱に檻室の内に找み入て、額衝き拜して安否を諮へば、成氏は驚きながら、手を解き急に禮を返して、和殿等は、是誰そ。と問ふ、問れて信乃は膝を找めて、敬て答るやう、早くも忘れさせ給へる歟、臣等は、則生人ならず、君が兄に御坐せし、春王君安王君の、小傳なりける、武藏國豊島郡の人氏、大塚匠作三成が孫、大塚番作

一成が獨子なる、犬塚信乃金碗成孝にて候也。恁稟さば、言故にたれど、往時嘉吉の擾亂に、結城十萬の義兵三稔を歴て、竟に弓折れ勢竭て、兩公達は敵の爲に、俘囚と做り給ひし折、臣等が大父三成は、殺て出猶戰ふて、陣歿をしてけり、と口碑に傳へたり。當時番作十八歳、父の遺訓により重圍を殺脱、像見の名刀村雨丸を、腰に帶つゝ兩公達の、去向を悄悄地に跟まつりて、美濃の垂井に至る程に、痛しきかな兩公達は、金蓮寺にて御事あり。番作は其御終焉を、見るに得堪ず、奮然と、跳り出つゝ、劊手の武士を、只一刀に斫して、兩公達の御首級を、悄悄地に瘞め奉りぬ。爾るに當晩番作は、宿を投めし草庵にて、手束と喚做す少女に逢ぬ。并は結髪に妻にして、其父も亦結城にて、匠作と俱に陣歿しつゝ、母さへ早く世を去りて、所寓なき身の今さらば、天縁の熟する所、遂に迭に捨るに忍びず、則是臣等が母也。折から父は金蓮寺にて、受たる痛癢に堪ざれば、筑摩に赴き湯治して、稍刀瘡は癒たれども、是より行歩自由ならねば、夫婦相携て、辛くして故郷なる、武藏の大塚にかへり來つ、是より氏を改めて、犬塚と做喚して、兵法武藝を郷黨に、教へて年を歴る隨に、臣等を生候ひぬ。幸なきは只是のみならず、母は臣等が六七歳の比、舊病重りて身故りにき。父も年來多病なりしに、則父の姉婿なる、大塚臺六と做喚せし細人は、則大塚の郷の莊官にて、其心術便僻たり。且我父の姉龜篠も、同惡にして憑しからず。父が年來祕藏せる、村雨丸の名刀を、言に假托け術をもて、奮拿らまく欲せしを、父は猜して防げども、既にして年闋て、病痾且夕に身に逼るをもて、命長からじ、と覺期して、一夕臣等に父祖の忠義と、村雨の大刀の傳來を、説示すこと右の如く、汝成長りし時、請我の御所へ參上りて、這名刀を獻りて、且其大刀の傳來と、父祖の忠義を聞え上て、仕官を願ひ奉れ、と教る詞の露ならで、光玉なす刃を抜て、腹撞折て俯侍りぬ。この時臣等は十三歳、親の遺訓に従ふて、憑しからぬ伯母夫婦許、養れつつ堪がたき、艱苦を忍ぶ年を歴て、身は稍成長りしかば、今茲より六稔以前、文明十年夏月の時候、臣等請我に赴きて、

隨即御所に伺候しつ、村雨の大刀を進らせしに、猶思慮足らずして、其名刀は、歹人に、拔易られしを悟らざりき。然ば横堀在村が、贖物也、と看破りて、一言半句も分説を听ず、反て臣等を隣國の間諜兒なるべしとて、猛に居多の力士に課て、擲捕せんと欲せしかば、臣等勢ひ已ことを得ず、緝捕の力士を殺拂ひて、芳流閣とか喚做たる、高樓の屋上に攀登りて、脱れ去まく欲せし程に、御内の力士、犬飼見八が、登り來ぬるに組打して、兩失脚しつ、滾落て、閣下なる河邊に在りける、船に受られ、隨斷離れて、身は氣絶して在りし程、船は急湍に推流されて、行徳の浦に寓りしを、當日地方の豪傑、大田小文吾親子に救れて、死ざることを得たれども、計我にて受たる刀傷の、破傷風に做りしかば、身は病臥て古那屋に在り。古那屋は、則小文吾の親、文五兵衛が歇店の號也。折から横堀在村が沙汰として、御内の侍新織帆大夫素行が、臣等を緝捕の頭人を奉りて、夥兵を多く從へて、行徳へ來て穿鑿りしかば、臣等が窮厄逼迫て、免るべうもあらざりしを、小文吾が妹夫、這里に侍る犬江親兵衛が父也ける、義士山林房八が、其妻共侶身を殺し、其鮮血をもて、臣等が瘡に澱ぎしかば、奇藥の效愈たず、我破傷風亟に癒て、身は只恙なきことを得たるのみならず、房八が面影の、よく臣等に肖たるにより、小文吾則其首をもて、新織帆大夫を欺き還して、再厄遂に解けたれば、義兄弟と共侶に、遊歴浮浪六箇年を歴ぬる程に、臣等は同因果の義兄弟、俱に犬をもて苗字に做せる者、八人なるべきよしも知られ、且未生以前より、里見殿に宿因ありて、家臣たるべきよしを悟れども、いまだ其時至らざりしに、今茲の夏四月の時候、君臣の天縁竟に熟して、皆共侶に安房へ徵れて、寵遇特に淺からず。恁而這回の鬪戰に、臣等と犬飼現八は、義通の隊に隸られて、則這地の防禦使たり。聊臙臂を抗しより、連勝して這田地に至れり。遮莫微功に誇んとて、家の賤譜を稟すにあらず、只父祖の忠魂義胆を、御聽に入れんとて、多辯に及び候ひき。其將六日の菑蒲なるべく、十日の菊に似たれども、この折をもて先人の、志を告まつらざるは、不幸ならんと思ひしより、言憚りなく候ひき。と心の誠うち出で、言爽に説果て、やをら後方を見かへりつ

つ、身を退かせて座を譲れば、現八やを膝を找めて、成氏主にうち向ひて、額衝て且告るやう、臣等は素是微賤の小卒、恚る瀬に立候はずば、御視徹を饒されんや。然るを咫尺し奉りて、名告るは烏計に候へども、本國は上總にて、武藏なる豊島大塚の根（他郷より流寓の民を根といふ）糠介が獨子なりしを、襦袢の中より御内の走卒、犬飼見兵衛に養はれて、計我の藩中にて成長り候ひぬ。養父歿して、卑職を嗣て、則犬飼見八と喚れしは一霎の程にて、今は里見の防禦使なる、犬飼現八金碗信道にて候也。臣等貴藩に在りし日は、兵員ならぬ卑職なれども、君に仕へて私なく、忠義を盡すに至りては、祿の多少と職の尊卑に、依るべくも候はず。是をもて、髻歳たりし初より、師を擇み技を勵みて、兵法七書、弓馬劍術、緝捕白打に至るまで、學び得ずといふことなし。然りけれども、御内の冢宰、横堀史在村は、能を媚みて賢を擧げず、反て臣等が媚ず、求ることなきを憎みて、職を轉じて獄吏に做しぬ。臣等は牢獄の小吏たること、其情願にあらざれば、屢辭ひ侍りしを、在村不敬の罪とし誣て、臣等を牢獄に繋ぎたり。恚而一日、犬塚信乃を緝捕の力士門、芳流閣上に挑み負て、死を致す者多かりしかば、在村則計ひ稟しつ、臣等を獄舎より饒し出して、件の緝捕を課しかば、臣等則芳流閣上に攀登りて、組打の顛末は、目今信乃が口狀に具也。然ばその折氣絶して、船行徳へ流れ來つ、我に復りて由來を問ふに、信乃は疎忽の失あるのみ、擲捕らるべき罪にあらず。且臣等が實父糧介は、則信乃と同郷にて、信乃を紹介の手簡あり。奇遇は、又只これのみならず、信乃と臣等は宿因あり。異姓の弟兄たりぬべき、徴は迭に身の内に瘧ありて、形牡丹の花に似たり。又感得の靈玉あり。小文吾と親兵衛も、同因同果の痣あり玉あり、八人たるべきそが中に、この日この時、小文吾等と、四人相逢ふことを得たり。恚れば信乃は罪なき者也、必擲捕るべからず。然ばとて、臣等只一人、阿容々々として計我へ還らば、又其罪を議せられて、必在村が手に死ん。進退維谷りぬ。この故に信乃と俱に、躲れて行徳の古那屋に居り。是より浮浪六稔を歴て、義兄弟等と共に、召れて安房へ参りしは、こも亦信乃が口狀に具也。薄情やな、君は只、



(るらめ懸吊に土犬三夜てりなに成氏成)

在村が奸虐私論の誣言をのみ、信容させ給ふをもて、今も猶信乃と臣等を、憎しとのみ思し召すらめ。信乃と臣等が意衷はしからず。非如恩仇地を易て、今君命に依るといへども、舊君故主を敵とし逆へて、箭を飛し鋒を舞して、死を争んは、本意にあらず。この故に始より、君が一隊の御陣へは、杉倉武者助直元、田税力助逸友をのみ指向て、信乃と臣等は、顯定親子の隊と戦ひしに、料らず靈猪の援あり、君が敗軍の時に臨みて、駈て背にうち駈せて、我公子義通の、陣營に致せしは、神明佛陀の冥助にて、信乃と臣等が始を忘れぬ、胡馬の北風燕鷁南枝の、心を監み給ひけん、一大奇事にて候ひき。といはれて成氏いよ／＼羞て、連りに額に汗するのみ、いまだ答に及ばざりしを、信乃は又慰めて、君知し召れずや。嚮に横堀在村と、新織素行は、御陣の敗を見かへらず、二騎連立て落亡せしを、底不知野の邊にて、臣等趕蒐て、射て斃しにき。然るを地方の莊客が、其首を斬もて來て、實檢に入れ候ひき。寡君這回の軍令に、只當の敵を撃つことを許して、敵の首を捕る者を功とせず。然るを在

村素行は俱に死首を士民に捕られて、軍門に梟られしは、年來君を惑して、賢を害ひ民を虐げて、家を富したる。天罰にこそ候はめ。と解れて成氏嘆息して、いはるゝ頭末、皆金玉に異ならず。我不明にして始より、和郎等賢良英才なるを思はず、棄て鄰國の實に做したる。悔は楚懷の憂に同じ。烏の頭は白くなるとも、生て計我へ還りがたけん、覺期は既に究めたり。と答て嗟嘆に堪ざりけり。登時大江親兵衛は、找み出つゝ拜していふやう、やよ殿さのみな嘆せ給ひそ。臣等も里見の防禦使なる。大江親兵衛仁に侍り。言自負に似て候へども、寡君義成が仁義の家風に、相従ふ我々まで、惻隱忠恕辭讓是非の、行ひにあらざといふものなし。こゝをもて、昨今の鬪戦に、自家はさら也、敵の士卒の、或は深痕を負ひ、或は戦死せし者は、皆是其君の爲に命を惜ねば、忠臣也、豈是を、憐ざらんや。この故に臣等が秘藏の、神藥を施行して、君が隊の兵と聞えたる、科革七郎望見一郎、この他、寄隊の士卒の死を救ふて、其還らんと願ふ者は、饒して其主に復しにき。敵の士卒すらかくの如し、君に於て何かあらん。義成安房へ迎まつりて、舊交を脩め候はん。と言叮嚀に慰れば、信乃現八も復共侶に、臣等君を辱めんとて、父祖の上さへうち出て、云云と稟すにあらず、只其忠義の心操を、知せまつらんと思ふのみ。又こそ見參すべけれ。と告別しつゝ外面へ、うち連立て退出けり。この時左右の櫓室に在る、憲房爲景、盛實等はさら也、守護の士卒に至るまで、這三大士の忠孝傳愛、始を推て故を忘れぬ、眞面目は是なめりとて、感服せざるはなかりけり。愆而大江親兵衛は、この宵東辰相に意衷を告て、義通君に身の暇を請ふ程に、眞間井秋季、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太門は、施藥の事果てかへりにけり。こゝをもて親兵衛は、次の日の早天に、信乃現八、井に直元逸友以下の隊長、諸頭人に相別れて、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太門の伴當影兵、政木孝嗣、石龜次團太、越鯉三、二四的寄舎五郎、須々和壇五郎と其隊の兵六十餘名を將て、名馬青海波にうち跨りつゝ、洲崎の陣營へ赴くに、昨日の朝洲崎へは、影兵兩三名を參せて、歸東の義を注進し奉りしに、洲崎の澳の勝軍は、既に朝寧主の口中にてしるしければ、今さらいそくは要なし

とて、今番は路を貪らず。先犬川大田を訪ふて、那里の勝軍の事の光景を、よく尋問ひ聞知りて兩館へ稟上んとて、この日行徳へ立寄りけり。然ばこの時莊介小文吾は猶今井河原の柵に在り。昨日盾持篠杖朝經と、一二の精兵を洲崎の陣へ、急遽脚の使にうち起せて、鬪戦全勝の事、井に生口の交名を注進しけるに、この日石濱の、千葉の老黨士卒は、自胤擲になりぬ、と聞知りて、驚き怖るゝこと大かたならず、然ては這孤城を久しく抱へがたしとて、主君の妻妾、諸臣の宅眷と、資財什物を、各舫に執乘せて、城を棄て落亡けり。この義を夙く河原の柵に告る者ありしかば、莊介小文吾うち笑ひて、我より捉るにあらねども、牙が儘開かば、野武士山賊の據ることもあらんかとて、隨即登桐山入郎良子に、隊兵一千二百を分ち授けて、亟に石濱へ遣して、件の城を守らせけり。有恚りし程に今日とは知ざる、大江親兵衛、姥雪代四郎、が政木大全、石龜次團太、越鯉三と、新附の野武士、二四的寄舎五郎、須々利壇五郎門を相伴ひて、國府臺より來にければ、迭の歡びいふべうもあらず。聽て柵の大廳に、賓主の席を設つゝ、月屬會話に、時の移るを覺ず。滿呂復五郎、再太郎、安西就介、木樟村主も、這席末に列りて、俱に歡びを盡すめり。當下莊介小文吾は、次團太にうち對ひて、曩に稻戸津衛が好意にて、片貝の驟處を脱れ去りし時、足下の宿所へ立よりて、報知せまく思ひしかども、人に知れんことを怕れて、果さざりき。とうち勸解れば、又次團太鯉三は、毛野が智計の幫助にて、再生たる歡びを、いふべき便宜なかりしに、今番やうやく時至りて、安房へ赴くと云、歡びを告なとす。又莊介小文吾以下の母は、孝嗣の人と爲りを、最慕しく思ひしかば、其管待大江姥雪等に異ならず。又親兵衛には、昨日餓られし神樂にて、原胤久の深痕はさら也、この他も刀瘡兒に用ひて、即効あらずといふ者なし、但惜むらく、戦死せし、敵自家の士卒の骸は、惴りて皆埋めしかば、神樂こゝに至るといへども、其死を起すことを得ず。何どてかく幸なきや。意ふに皆是命數歎きし歟、然らずば業報ならんと云、主客の相譚ひ闌なる時、滿呂再太郎と安西就介が、酌を執て、盃を勸る程に日景は既に歛きしかば、親兵衛急に別を告て、且同伴の衆人

を、いそがし立つ、青海波の、馬を牽せて今井河、今又渡す船果て、上總路投て立出けり。然ば親兵衛が、この日の進止、さぞな待らん、安房に在す、君と親とを等閑にして、只其情義の故をもて、這頭に路草を喫けるは、相應しからずと思ふ者もあらん。牙は人を知らざる也。蓋這陸地二箇所の圍戰に、一箇も軍監なし。親兵衛は、悄悄地に東辰相と商量して、且義通君の命を棄て、其職を兼たれば、異日軍功を媚む者の、誣言を防んとて、故意行徳へ立よれる也。然ばこの小集は、私の所以のみならず、亦是公事なりき。既にして、陸地二箇所の軍談は、こゝに説盡したり。是より又洲崎の澳なる、水戦は甚麼ぞや、分教あり。

赤壁阿瞞勢勿負。燒彈線纜有。周郎。

こは前板坂東將帥の像贊のみ、猶詳に知まく欲さば、又卷を改めて、且下回到、説分るを聴ねかし。

南總里見八犬傳 第九輯 卷之四十二下 終

南總里見八犬傳 第九輯 卷之四十三、四

東都 曲亭主人編次

第一百七十二回

定正水路に大兵を行る
音音江中に一船を燒く

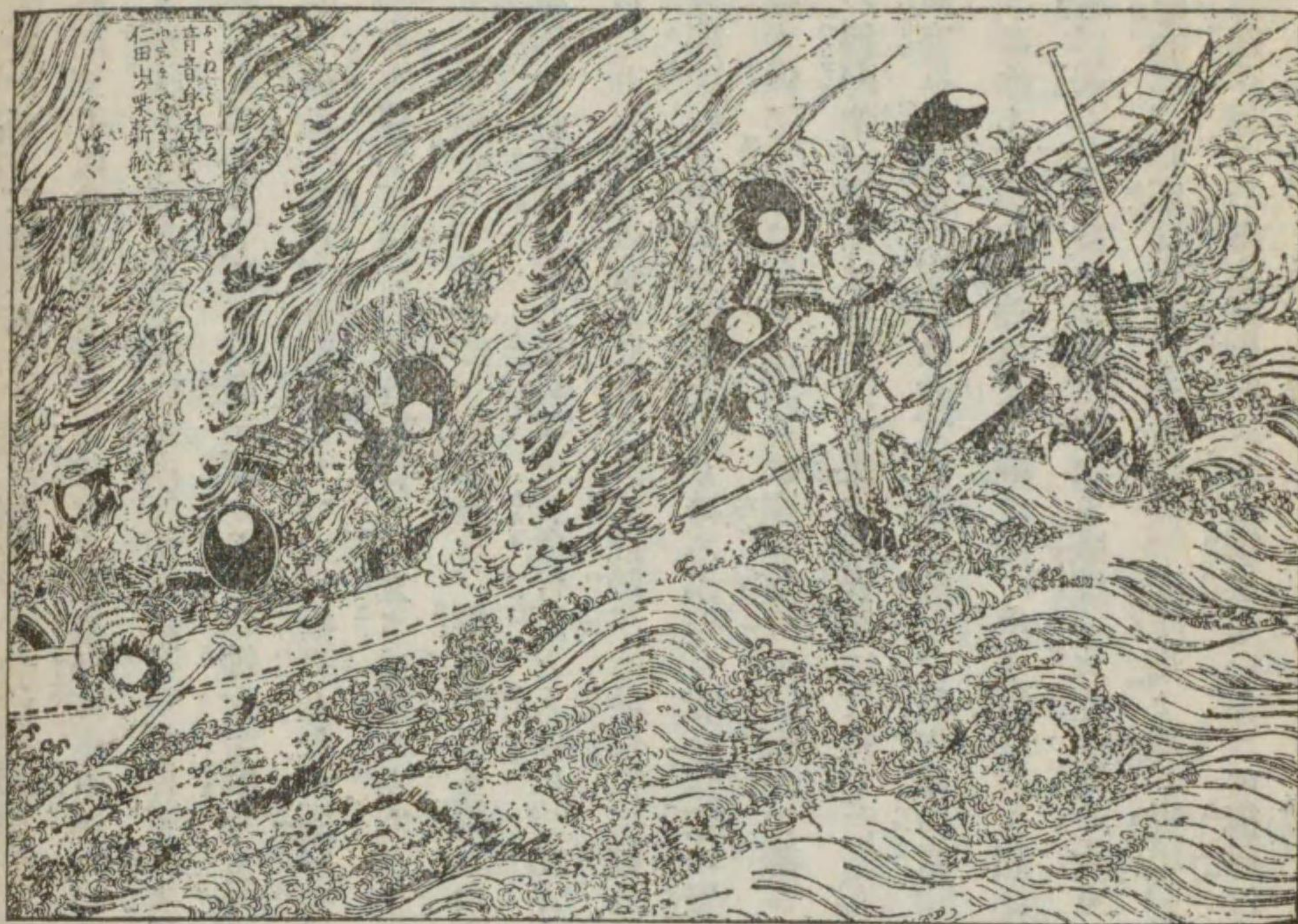
話表す這時武藏なる、五十子の城内には、十二月五日の早天に、陸地の諸將、山内顯定、其子憲房、足利成氏、扇谷朝良、千葉自胤、四家の隊長、白石重勝、大石憲重、横堀在村、原胤久等、各數萬の軍兵を將て、下總の葛飾なる、眞間國府臺、及行徳を投てうち向ひしかば、今城内に在る士卒は、三萬餘名に過ぎざりしに、五日六日に至りて、甲斐の武田信昌の名代たる、武田左京亮信隆を首にて、近國の野武士、伊豆相摸なる海賊毎、勢を見て利を測り、多を負て敵を侮る、烏合雲集の、客兵無慮二萬餘名、俱に定正の隊に附まく欲りして、各先非を謝し、忠義を倡て、皆十五子の城に推參す。事の便宜は是のみならず、上總なる故の榎本の城主、千代丸圖書助豊俊が舊臣、濱縣馬助(浦安牛助友勝が、偽姓名なり)を密使として、降書を齎し、且其家臣の宅眷たる、老弱四個の婦女子を、保質に參らせて、海上火攻の約束あり、獨巨田新六郎助友が、父道灌の名代として、糟谷の館より領て來ぬる、隊兵は僅に五百に過ぎず。況や今番水戦の、利害を論じ理義を詳にして、定正を諫るに、犯さざることなかりしかば、定正怒に堪ずして、追退けて是を用ひず。遮莫定正親子に相從ふ、水軍の兵は、既に五萬餘に及びたる、牙が中に、南海道より移り來にける、海賊の頭領に、水禽隼四郎綠林、錦帆八四九郎近範と喚做すあり。此は是嚮に三河の苛子崎にて、犬江仁、姥雪與保、蚤崎照文等に、對治せられし、海龍王修羅五郎、今純友查勘太と伯仲すべき、驕勇の手煨煉にて、

船をもて家とすなれば、水戦の進退を、辨ずること極めて賢しく、且一千餘の支黨あれば、定正其罪を許して、則先鋒の頭人とす。威勢かくの如くにて、且赤岳百中（犬村大角が偽姓名なり）の如き者の幫助あれば、猶且敵の胆を、拉ぐ爲にとて、總兵五萬を僞りて、十萬餘騎とぞ倡へける。然れども這隊の水軍は、十二月八日の早旦に、洲崎の港口を攻破りて、稻村の城を抜くべし、と逆下定たりければ、定正朝寧父子は、尙五十子の城内に在り。愆而七日の早旦に、大石源左衛門尉憲儀は、精進し沐浴して、鎧の上に淨衣を被て、駿馬にうち乗りつゝ、百個可の士卒を將て、いそぎて谷山に赴きて、懸て馬より下立て、攀登りつゝ山の半腹なる、洞内を窺ふに、那風外道人は、靑石の上に結跏趺坐して、香を焼き合掌して、經文を誦して在り。當下憲儀は、恭しく找み朝ひて、師父よ喃、大石憲儀が詣候也。潮に教給ひぬる、水戦に宜き日は、既に是明日になりぬ、いよ、那順風を賜ふべきや。船出は幾時候を好とせん、この義を諮問まつれといはれし、寡君の名代にこそ候なれ。教給へ。と請問へば、風外道人領きて、善哉、信男信士、現明日は、八日になりぬ。貧道なてふ教を更んや。明日丑三の時よりして、諸艦齊一漕出て、三浦の澳に錨兒を下しね。其折俺、大ならず、又小ならぬ順風をもて、蚤く那澳へ推もて遣ん。愆而其詰旦、黎明の時候よりして、俺又猛烈き順風を起して、敵を火攻に便宜を得させん。この餘の事は、前に示し、如し、やよな疑ひそ、勉めよかし。と言諄からず宣示せば、憲儀額衝き、阿と答て、示教うけばり候ひぬ。退りて寡君に反命せば、さぞな歡び候はむ、復こそ見參すべけれ。と告別しつ身を起して、山を下り馬を早めて、五十子の城にかへり來つ、隨即前條の趣を遺なく聞え上しかば、定正いよく信仰して、兎毛の杓に置く露許も敢疑ふ心なく、然らば疾艦汰して、這曠昏より諸軍兵を、分ち載するこそよかめれ。と詞急迫しく下知すれば、憲儀は唯々とばかりに、答て懸て退り出て、其隊毎なる隊長に、下知を傳へていそがするに、冬の日なれば短くて、夕陽西に淪みしより、士卒は反て準備に違あらず、左右する程に七日の月の没る時候に、五十子の城内なる、將帥、五萬の軍兵まで、皆悉、出盡して、陸を

離れ水に就く、柴浦より大森まで、海上遙に見直せば、乗浮めたる千百の戦艦は、布備たる碁石の儼く、五彩の旌旗、八色なる戦幟は、夜半の浦風に閃めきて、綠波も寄せあへず、晃々として星影に、光を争ふ、八千餘は、神代のむかし早蟬成す、魔軍降伏、天泰らけき、例もかくやと負しく、思ふ衆心に勇みあり。然ば寄隊の大軍は、于二刻の時候よりして、衆艦漸次に漕出つゝ、三浦を望て走らす、第一番の先鋒の頭人、大茂林小彦和中と、濱川小渡鉄久に、新附の海賊の頭領、水禽軍四郎綠林、錦帆八四九郎近範を副として、其隊の海賊と俱に五千餘名、巨艦四五十艘にうち乗たり。第二第三の隊は、小幡木工頭東良、士卒相從ふ者五千餘名、大石源左衛門尉憲儀、士卒八千餘名、有名の兵頭、是に従ふ者尠からず。第四番は、定正の長男上杉式部少輔朝寧を副將として、武勇の老兵、呢近の青侍、華美に撰甲たる者一百餘名、雜兵と俱に一萬二千餘名たり。第五の隊は、總大將、扇谷修理大夫、定正、隨從の兵頭、箕田源次兵衛后綱、信城左傳達頼、九本佛九郎望洋、城峯麻生介廣原、是等を宗徒の隊長として、從兵二萬五千四百名、總軍五萬に餘れば、千百十數箇の巨艦に、真帆揚て、白浪に隣る舵の响、篙工們が調ふ棹の歌、皆野干玉の夜を犯して、衆艦三浦の澳邊に造るに、豫風外道人の、契りし風術差ふことなく、猛可に順風吹起りて、投方便宜也ければ、舵工等は都て烏夢に惑はず、蚤く三浦の澳に到るに、武田左京亮信隆は、船を出すに最遅ければ、始よりして諸艦に續かず、胡意遙に引下る。那身は隊兵のみを將て、艦を寛く行後れさせて、浦河の澳に錨兒を下しつ、風の便宜を俟たりしに、定正朝寧はさら也、諸艦の隊長士卒まで、波上の暗きに紛れて、是を知る者なかりけり。然ば寄隊の諸艦は、既に順風に吹送られて、この曉寅の初刻に、夙く三浦の澳に來つ、衆艦都て帆を縮し、錨を降し相歇て、風外が約束の、順風の亦復吹起るべき、其天の明るを俟にける。牙が中に、仁田山晉六武佐は、敵の戦艦を燔盡すべき、火薬の頭人なりければ、柴薪焰硝を多く積載たる、二三十箇の快船を掌り、且千代丸豊俊の保質なる、老婦人音音を豫り守りて、前日より柴浦に在り。しかるに這晉六武佐は、其性酒を貪りて、且酒癖ありければ、當役を

承し日より、過失あらんことを怕れて、絶て酒盃を採ることなかりしに、既にして、十二月七日の下晡に造りて、同船なる隊の兵等に向ひていふやう、我はさらば汝達も、連日勤務多かりければ、さぞな疲勞たるならん。既には今宵真夜半には、大將御艦を出させ給へば、人も我も從ひまつりて、死活の境に赴くに、切て嗜る酒也とも、思ひの隨に喫すもあらば、何をもてよく胆さへ肥して、宅眷を忘れて、死地に就く、忠戦を致さんや。この故に、我既に、奴隷毎に吩咐て、其頭の準備もしたる也。先や和郎等と獻酬して、酔を盡して解纜を等ん。といふを大家うち聞て、そは辱き、御計ひに候也。然らば御酌仕らん。と答る間に奴隷の輩が、酒を盪め、酒菜を出して、按ぞ排る船の内なる、客の間特に映ければ、音音も膝を並べて居り。當下仁田山管六は、酒盃を執抗げながら、音音を見かへり合笑て、昔は知らず、今は是、枯樹に降れる雪の白髪、額に寄る波濤松柏の、肌膚にこそと思へども、酌は婦女子に極れり、是節てよ。と指出せば、音音も俱に微笑て、嗟夫御見出しに與りまつりて、恥しくこそ侍るなれ。足駄の端緒に敗藥索も、時の用には達にやあらん。相應しからぬ聆娘後、梅が香ならぬ枯野の密房、非如刺とも甲斐なしとて、不甘な喫しめされそ。と戯れながら十分に、節ども溢さぬ老女の手煉に、大家ヤヤとうち興じて、受けつ流しつ行更す。現是酒は狂薬にて、禮に始り亂に終る。武佐素より強飲なるに、隊の兵も威高量にて、呑こと宛大蛇の如く、刺こと恰も蜂に似たるに、音音は喫まず、よく提撕て、昔採たる杵柄の、春謠にあらなくに、興を添たる早歌に、舌も遠らぬ武佐と、俱に衆兵亂酔して、舷に凭れて反吐を突くあり、額を敲きて呻吟くあり。艦の間に侍りたる、雜兵奴隸舵工篙師まで、罇を敲けて足ることを知らず、殺を竊みて好歹なきを思はず、皆悉酔臥て、喚べども應へず、掖けども起す、死人に仁田山管六們、既に日は暮れ更闌て、主將定正の衆船はさら也、己が與る火薬の船も、皆定正に従ひて、俱に漕去しを知らざれば、獨武佐が乗たる船のみ、舊の儘にて柴浦に在り。只音音のみ酔ざれば、枕を亂して熟睡をしたる。武佐們を見て嗟嘆に堪はず、肚裏に思ふやう、這仁田山管六武佐は、六稔以前戸田川にて、我兒子等

(故十條力二郎尺八なり)を害したる、仁田山管六が弟にて、大石親子に仕へぬる、二代の權幸也といふ、人の噂に聞知りにき。然らても這奴は火薬の頭人、自家の爲に害ある者也。這奴が預る火薬の船は、方偉寄隊に従ふて、多く漕去りたれども、時に臨みて這奴が在らずは、放火に頭人なき故に、先にゆきたる火薬の船は、必便宜を喪ん。然ばとてかくまでに、酔て睡りし音六等を、醒しも果す刺殺さば、姥也とても、武士の妻に、似げなしとて人や挾せん。要こそあれ、と尋思をしつゝ、掛直したる張灯の、光に就て、船床なる、鎮砲一挺、悄と引よせて、火線を取りつ火を移して、見れば這鉄砲に、兩丸さへ籠てあり。こは究竟と开が儘に、右手のかたに引著て、臂近なりける長盆もて、覆ひ隠しつ今更に、轟く胸を、推鎮めても果しなき、いくそばくその物思ひ、曳手單節妙眞刀自は、潮に別れて、城内へ、捉籠られし後の事、安危什麼と人傳に、訪ふよしとても浪枕、身は浮舟の憂かりける、兩個の愛孫いへばさらなり、我伏は今も恙なく、大江腋子と共侶に、枯れにし冬野の草枕、旅宿して尙京師に在歟、と思ふのみにて、南末與美の、甲斐なき別になりけるかな。我今冤家の覺るを俟て、計るが如く船を燒きて、脱れ去るべく暇なくば、我身も俱に火燭にならん。そは兩館莫大の、御恩に報ひ奉る、老の命を惜んや。只兩個の孫、兩個の娘に、別は鴛鴦の劍羽や、竟には水に身を果す、過世にこそ、といへばえに、舂打つ波濤になみだの雨も、垂氷にならん冬の夜の、浦風寒み群知鳥、慰めはせて友喚ぶ聲の、往方は何處、星光り、天に餘波の銀漢、俯仰瞻つゝ點頭て、夜は丑三尅を過ぎにけん、這白徒等はまだ醒すや。疾々覺よ、と思ふこと、言に出さて咳くのみ、叔焉として俟つ、長き夜に、蠟燭將に竭んとするや、船に掛たる張燈の火光小暗くなりけり。然ばいよく更闌て、霜氷る夜の潮風に、吹醒る、武佐們は、稍明なるとしつる時候、咽吭渴き睡り覺て、俱に頭を擡げつゝ、四下を見かへりうち驚きて、こはいかにせん鈍かりき。御主君尉殿(大石憲儀をいふ)の御船はさら也、兩館(定正朝寧)は乗船ましゝて、洲崎へ推寄せ給ひけん、這頭に一箇も艦なくなりぬ。こよなき越度を致したり。と悔て頭を擡ぐもありしを、武佐噪かず深念をして、



(く播を船薪柴が山田仁てし熟を身音音)

聲苛めしく喚るやう、既に時分を失ちて、御伴に後れたる、越度は勿論越度なれども、然りとてかくて在るべきにあらず、先疾船を出さずや。と焦燥しげにいそがせば、篙師們が稍覺て、阿と應つゝ遽しく、帆を揚げ鰻を解く程に、武佐は又二二の小頭人を、身邊へ招きよせて叫くやう、我今即妙の計あり。期に後れたる分説には、那保質の老女奴を、蚤く殺すにしくことなし。といふを小頭人等訝りて、牙は又何等の故なるや。と問へば答て、然ばとよ、我今船を走らせて、御艦に赴著奉りて、稟さんやうは、臣等御伴に後れたりしは、中途に禍事あれば也。其故は、前日臣等に預けさせ給ひたる、那千代丸豊後が、保質の老女奴は、里見の間諜見なりけん、隙を覘ひ胆太くも、臣等を刺まくしてけるを、搦捕んとせし程に、支黨の歹人數十名、忽焉として快船に、乗走らして援け來つ、這方の船に乗り移りて、老女を幫助て戦ひしを、臣等并に隊の兵まで、力を勦せ奮勇して、敵を漏さず殺沈め、老婦を撃捕り候ひぬ。這鬪戦に時移りて、今に及び候ひき、と實しやかに哄稟して、首級を實檢

に入れまつらば、必運參の御咎を、免るゝのみならず、反て御感に干らん。這議什麼。と惜やかに、其計較を告ぐる程に、船は柴浦を漕離れて、大茂林濱の澳に出けり。登時件の小頭人毎は、武佐が奸計を、皆听訖り額を分ちて、俱に憶はず含笑て、牙は最奇也妙なるかな。と譽て後方を見かへれば、音音は聴く其機を猜して、準備の銃砲、拿る手もはやく、銃口其方へ推向けし、雄胆魂氣聲悍やかに、若們驚き噪ぎなせそ、伎倆は既に聞知たり。今武佐が奸計は、反て是我實情也。我を誰とか思ふらん、曩に戸田の河邊にて、武佐が、兄仁田山音五が、緝捕の多兵と血戦して、竟に戦歿したりける、十條力二郎尺八が母、犬山道節が舊老僕にて、今は里見殿の家臣なる、姥雪代四郎が妻、音音は我也。武佐、汝も冤家の半隻、思ひ知るや。と明々地に、名告被つゝ銃砲の、火蓋を續て撞と發せば、那時遅、這時速、武佐いよく驚慌て、立まくしける程しもなく、吭を撲地と撃抜れて、叫びも果す仆れけり。吐嗟とばかり隊の兵毎は、音音を捕捕んとて、推稠籠る、間もあらせず、音音は銃砲拿更して、船の内に積措れける、囊の火薬に擲ちて、身を仰さまに、舷より、海へ爰と飛入りける。其水音と共侶に、火線の燐兒許多き囊の焰硝に、燦と燃移る這時速し、猛火激烈、威勢迅速、現百千の雷霆の、一度に墜るに異ならず。人はさら也、柴さへ船さへ、一瞬間に燒盡されて、遺るは僅に船底のみ。水に遁れし音音すら、恙はなしや、あり磯瀉、測り得がたき死活の、海には水滯の建られぬ、迹しら波とぞなりにける。

第七十三回

數艘を借て大角義武を柱ゆ
降旗を建て豊俊定正を愚にす

却説、犬村大角禮儀は、那日の早天に、五十子の城を立去りて、先谷山に赴きつ、大法師と商量して、隨即所從の雜兵二名を、安房なる洲崎の陣營へ遣して、那籌策の成れるよしを、大阪氏野に告げしかば、牙がかへり來ぬるを俟んとて、艦て相摸路に赴きて、便宜の浦邊に在りし程、次の日の夜に至りて、兩人の使の雜兵と俱に、堀内雜魚太

郎貞住は、隊の兵三百餘名を領て、快船にうち乗りて、約束の浦邊に来つ、大村に對面して、則義成の密説と、毛野の意衷を叫び傳れば、使に建ける雜兵は、毛野の回翰を拿出して、先大角に呈閱し、且其反命を具にす。是に由り大角は、其言を聞其書を閱して、貞住等が乗りし快船は、安房へ返して一箇も留めず、隊の兵は、皆東西へ分ち潛せつ、水戦の日を俟つ程に、既にして大角は、洲崎の陣の事の光景、及大坂毛野を軍師に做され、自餘の七犬士は、防禦使たる事、并に大角にも賜るべき、御大刀を現八に渡し給ひしに、大角は、犬塚と共に、國府臺に敵を俟つ、那地の防禦使たるをもて、毛野が是を與りて、權且藏指たりしを、則今番の便宜をもて、堀内貞住に是を遞與して、大角に傳へしかば、大角は其君命を承り、此賜を受まつる、其悦びいふべうもあらず。又只是等のことのみならず、犬塚信乃犬飼現八は、東辰相杉倉直元門と共に、義通君に俱しまつりて、國府臺の城に敵を迎る事、又犬川莊介、大田小文吾は、行徳口に出陣して、俱に敵を俟つと云、水陸の隊配この餘の事、千代丸豊俊に行はする、毛野が反間の計略、又此密策に預りぬる、浦安牛助友勝、音音曳手單節妙眞の、敵地に赴きし事までも、この時具に聞えしかば、大角深く感佩して、貞住に情語くやう、聞くが如きは此一策は、則是苦中の苦にして、危しとも最殆かな。故何とならば、音音妙眞兩姫と、曳手單節女兄弟が、千代丸豊俊の、密使と偽唱へて、柴浦へ至りし時、定正必保質にして、件の四人の婦女子を、城内に留め置くべし。恁而水戦の日に至りて、定正焼れて敗績すとも、脱れて五十子の城へかへり來ば、必怒に堪ずして、音音妙眞曳手單節を、戮さることを得んや。恁れば大坂が計る所、則自家の勇婦四名を售て、徒其死地に入るゝのみ、抑又危ふからずや。然りとはいへども曆日に、危をもて黃道吉日とす、事危ければ必慎む、慎む時は失少し。大坂この理を知ずして、叨に苦計を行はんや。因て又おもふに、大坂一擧に敵を破らば、逃るを追ひつゝ五十子の、城を拔べき手段ありて、この苦計を行ふならん。定正城に入ることを得ず、城兵防禦に他事なくば、何人か亦暇ありて、四人の勇婦を害せんや。己を知り又敵を知りて、大坂が計る

所、必や違ふべからず。非如他には及ばずとも、我も亦水戦の、一計に與れり。然るを四人の女流にだも、軍功及ぼて二の町ならば、生て安房へ還るべからず。なからん後の思ひ出に、この義をこゝろ得給ひね。と告る意衷に貞住は、有理々々然也、然もこそ。と答て感嘆したりける。是より大家影を隠し、跡を埋めて俟つ程に、十二月七日に做りしかば、大村大角禮儀は、堀内雜魚太郎貞住と共に、甲冑に身を固めて、隊の兵三百餘名を將て、新井の海邊に赴きつ、貞住の隊の兵等は、そが儘に這里に在らせて、却大角は、この宵初更の左側に、雜兵十名許を從へて、新井の城に赴きて、城門を敲きて、喚るやう、是は今番扇谷殿へ、新附なる野武士の頭領、赤岳百中と呼做す者也。年來足柄多武澤に候なる、同志の毎を駆集來て、明日の水戦に、找て先鋒たらまくす。この義前日山内殿より、當城へ通達せられしならん。顯定主の符契ここに在り、この義稟し給へ。とぞ喚門ひける。當下門衛の士卒是をうち聞て、應と答つゝ左右なく容れず。隨即門卒を走らせて、恁と注進しければ、這新井の城主たる、三浦陸奥守義同うち聞て、この義は豫山内殿より、謀し合されたりければ、今さら疑ふべくもあらず。然ばとて、今の世の人心、由斷せば後悔あらん。咱先對面して、其符契を相て鑑を借すべし。やよ兵毎、其赤岳百中と伴當一兩名をのみ、門内へ入ることを饒しね。必由斷すべからず。いてくといひつゝも身甲の上に、衣獵烏帽子を拿裝ひて、小刀を腰に跨へつゝ、力士二十許を從へて、玄關に出る程に、近習は燈を秉て先に立ち、大刀を執て後に跟く、小心等閑ならざりけり。爾程に護門の士卒は、君命の趣を、大角に傳へ示して、那身と伴當一兩名を、角門より裡面に入らせて、玄關に案内をす。當下大角阿容たる色なく、引れて玄關にうち登るに、點し連ねし燭臺は、晃く星に異ならず。上座には城主義同、兎兎兒に尻を掛て在り、左右に侍る力士們は、狼の如くに見かへり、蛸の像くに疾視へたる、面魂凡庸ならず。近習は主の後方に居り、孰も本事ある者ならん、と見えざるはなかりけり。既にして大角は、程よき處に跪くを、義同みづから聲を被て、赤岳百中とは和郎なるや。と問へば大角額衝きたる、頭を擡て、然候。顯定

主の、齋せ給ひし、借船の符契こゝに在り。いかで戦艦十艘と、焰硝柴薪を借まく欲す、この義を仰付させ給へ。と乞へば義同點頭て、その義は豫心得たり。和郎の隊の兵幾名なるや。と問へば答て、然候。同盟の毎は、三百餘名候を、近き海邊に留めて將て來ず、小可が伴當は、僅に是十名のみ、夜分の憚りあれば也。といひつゝ聊退きて、艦で鎧の懷鏢より、符契を拿出て呈すれば、一人の近習身を起し來て、把て主君に呈閱しぬるを、義同やをら受取りつゝ、近習に手燭を抗させて、懐よりして隻符を、出して自他合せ見て、相違なし。と獨言つゝ符契を藏めて、又大角に向ひていふやう、持參の符契に疑なければ、敢異議すべくもあらず。艦は昨日より準備させて、焰硝柴薪と共に、遠からぬ馬頭上に在り。旌旗水帳は甚賤ぞや。と問へば大角、然候。其二種は扇谷殿の、預け給はり候ひしを、相携て候へば、只御艦と柴薪をのみ、貸し給はらば物足りてん。と推辭を義同聞あへず、そはその準備あるべけれども、我艦に我水帳を、建ずして人に貸さんや。且愚息義武は、頃者風寒に感冒されて、いまだ病牀を出ねば、兩管領家の催促に、従ひまつることを得ず。他はさら也我さへに、遺憾やる方なきものから、義武に代るべき、勇士なければ黙止しに、和郎今我艦に乗りて、先鋒に進むこそ幸ひなれ。我も亦兩三人の兵頭に、雄兵四五百名を授けて、俱に戦ひを幫助くべし。といふを大角推禁めて、开は然る故も候はめど、小司今番、兩管領のおん爲に、死をもて敵を敗らまく欲するに、今さに他兵を雜へられんは、素より望む所にあらず。且小可は、扇谷殿の先鋒にて、當家の加兵にあらざるに、縦艦を借るとても、當家の水帳を建られんは、こも亦事の宜きにあらず、這理を思ひ給はずや。と氣色を變て論ずれば、義同一霎時沈吟じて、實にいはるれば其理あり。和郎一器量徴りせば、這席上の孤客にして、我に對ひて斯までに、意衷を遺さて論ぜんや。武勇に願て望に任せん、疾々退り候へとて、艦で士卒に吩咐て、準備の馬頭上に送らすれば、大角面を和らげて、开は、忝く候なれ。郎君の御欠安を、猶も御保護あれかし。と口誼を符別を告て、外面へ退り出れば、城兵五六名、蕉火を振照し、犬村主僕を角門より、出して馬頭上へ

送る程に、堀内雜魚太郎貞住は、三百個の隊の兵と俱に、甲夜より這頭に俟て居り。這海邊に雜れたる、新井の戰艦多かる中に、兩管領の需に應ずる、準備の艦十餘艘あり、其一艘には、焰硝柴薪さへありしを、船小屋より番卒出で、大角に遞與せしかば、貞住も共侶に、歡びを述受奉て、其艦毎に、士卒三十名づつ分ち乗するに、各々携來つる、弓矢火銃器械あり、且楫を拿り艦を操る、航工さへ置しからざれば、渺茫たる大洋の、闇きに迷はず齊々と、艦拍手揃へて漕出す、夜はまだ丑に過ぎりけり。有恙し程に、三浦義武の獨子なりける、三浦暴二郎義武は、今宵も尙病牀に、垂籠て在りけるが、件の事の趣を、うち聞しより遺恨に堪ねば、横兒掻遣りつ身を起して、枕方近く措きたる、鎧を拿て身を固め、太刀を佩き一具しつ、兜を看病の女房に持せつゝ、走りて親の身邊にゆきて、跪くすら暴やかに、奮然として稟すやう、當家は是人も知たる、兩管領の親族なるに、今番の戰に値ざるは、兒が病著の故にして、是非の及ばぬ所なれども、赤齒百中とか喚做たる、相模野武士に先を断させて、我艦を貸て乗せながら、こより一隊の軍兵をだも、出し遣り給はざるは甚麼ぞや。今より艦を出させて、海に浮み射方の大兵を、等得て明日の先隊に找ん、暇稟すといひつゝも、既に立まくしてけるを、義同急に喚禁めて、等ね義武、和郎の遺恨は然ることながら、身に猶熱邪を帶たるに、夜を犯して海に浮み、暴き潮風に吹冷されなば、寒熱忽地再發して、太刀抜くことも克ぬまでに、狗滅を做さんのみ、そをしも勇士の本意といはんや。然ば這回の圖戰に、我は伊勢長氏の壓として、出陣を禁められ、加兵に親族をもて名代に、出せとある重役なれば、非如その義に及ばずとも、後に咎なかるべし、已ね。と窘れば、義武聽ず推返して、否我身この曠昏より、熱邪退きぬと覺しに、今は心地清やかになりぬ。縦病著復起るとも、武士たる者は、百萬の、大敵と血戦して、命を其首に捨てこそ、名を後の世に揚げもせめ。蒲團の上不起臥しつゝ、婦女童蒙に看病せられて、死するを本意に做すべきや。いはでもしるきことなれども、當家は平氏なりけるに、上杉氏より養嗣せられて、本領立堵したりしより、兩管領家は親族にて、藤原氏の血肉なるに、這回大事の

鬪戰に、不知出處の野武士門に、艦を貸たるのみにして、阿容々々として出ずもあらば、世の胡盧にならんのみ。この義ばかりは饒させ給へ。と詞烈しく答も果す、衝と身を起し外に出て、急に隊の兵を召聚るに、懦雄の壯士等は、今宵出船なきを恨みて、倘兵頭を出さるゝ、こともやあらんと思ひしかば、甲夜より各甲冑して、戰飯に飽ざる者なく、今かくと俟つ折なれば、這武者汰を聞くところが、水崎蟹人、甲良龜九郎、小磯眞砂五郎など、喚做たる、兵頭を首にて、弓手銃手、前後を亂さぬ、雄兵都て一千有餘、城の支關の頭より、正門の内なる塙城に、處陝まで聚合しかば、義武は忻然と、鑣奴等が牽寄する馬に、搖哩とうち跨て、海邊を投ていそぐ程に、又是準備の戰艦、こゝに二三十艘維ぎてあり。番卒毎出迎へて、艦に柴薪炮硝を拿入れて、水帆を配建などす。當下義武は、其戰艦二十餘艘に、隊の兵五十名づつ分ち乗せて、其身は胡意快船にうち乗りて、大角の赤岳百中を逐まくす。頃は十二月八日の曉天なれば、渺々たる大洋の、波瀾烏くして星影移らず、刃成す寒風に、面を撲るゝ諸軍兵は、並て憶ず戰栗るゝ、肌膚粒疎色蒼然て、身は生ながら、鯨兒にやならん、と思ふ可に堪がたければ、弓拿る手さへ研らるゝ如く、其弦凍て斷るゝもありしを、獨この艦隊の主將なる、三浦暴二郎義武は、今茲十八歳の少年なれども、武勇力藝親に劣らず、勇は萬騎に敵すべく、臂力は千鈞を擧るに堪たり。遮莫今宵は病後にて、出陣心許なし、と思はぬもなかりしに、幸にしてこの曠野より、寒熱共に瘳りて、氣力衰へねば、夜風の烈しきを物ともせず、疾百中に趕著んとて、連りに舵工をいそがせける。然ば又犬村大角は、有恚るべしとは知るよしもなく、既に義同を欺きて、一十箇の艦を借得て、漕出せども、去向をいそがず。堀内貞住と、船を並てゆく程に、那城内にてありし事の、趣、城主三浦義同と、問答議論の顛末を、悄語々々告知すれば、貞住以下の老兵まで、覺す俱に含笑れて、愉快の事とぞ稱えける。浩、處に新井の方より、漕もて來ぬる快船あり。忽地に聲を發て、其首へ漕ゆく衆船には、野武士の長と聞えたる、赤岳百中もあるなるべし。恚いふ我は三浦陸奥守義同の嫡子なる、三浦暴二郎義武なるぞ、權且艦を止めよ。と喚りく近

づき來ぬれば、大家驚くそが中に、大角佐と見かへりて、毫も噪ぐ氣色なく、然也、赤岳百中はこゝに在り。何等の所要候ぞ。と答る詞も果ぬ間に、義武の快船は、這方の艦に漕よせて、其隊の兵等鈞索もて、曳よせ曳寄せ掛留る、程しもあらず、三浦の伴船二十餘艘、水崎蟹人甲良龜九、小磯眞砂五等、追風に儘せ推續き來て、犬村が十許艘の、艦の前後を捕圍みて、こも鈞索もて一箇も漏さず、皆縛々と掛留めけり。當下暴二郎義武は、犬村大角にうち向ひて、やをれ其隊の頭人、加勢の野武士、赤岳百中は和郎なるよ。我名は豫聞つらん、我は親の名代にて、疾五十子の城へ參るべかりしに、憶ず風寒の病者ありて、出船遅々して、今に及べり。和郎は新附の加勢にて、我艦に乗るからは、宜く我隊に従ふべし。と威勢猛く宣權すを、大角聞つゝ冷笑ひて、并は謂なき争ひなるべし。咱等は、いぬる日、五十子の城内にて、水路の郷導見たるべし、と定められたる者なるに、今さら他人に譲らんや。這艦は、三浦氏より出されたりとも、我私に借たるにあらず、扇谷殿の處分にて、課て所要に充給へば、則是扇谷殿の船に同じ。然るを這艦に乗たればとて、和殿の隊に隸けといはるゝは、管領家をも憚らて、隊に従へまく欲する歟。年少しとも遠慮なきは、最烏滯也。と窘れば、義武滿面朱を濺ぎて、怵難たる聲高やかに、いはすればとて舌長し、軍神の血祭に首を捕んず、覺期をせよ。と刀の柄に手を掛るを、大角猶も怖るゝ色なく、非理の前には道理なき、威勢をもて克まくするや。和殿腰に帶劍あらば、我も亦身を護る、是の刃なきにあらず。已ことを得ざるときは、敢敵手を擇まねども、一朝の怒に其身を忘るゝは、是君子の慎む所、小人の悔る所也。然るを和殿事を好むは、敵に反忠するにやあらん。いまだ里見を攻伐ずして、同士撃を做すならば、何をもち管領家に忠とせん、義といはん。然る狂人には敵手にならず。といはせも果す義武は、衝と身を起して舷に、脚踏掛つゝ大角を、研らんと叫ぶ聲と共に、刀を晃りと拔放せば、左右に在りける老兵母、吐嗟とばかり推隔て、抱き禁つゝ諫る程に、猶且這隊兵頭水崎蟹人、小磯眞砂五等も、義武が怒罵る、其苛聲に驚きて、船を傳ひつ移り來て、俱に義武を諫るやう、那赤岳百中が過言は憎

く候へども、他も亦管領家の、御隊の兵て候に、同士撃を做されなば、非如今番の鬪戦に御軍功ありとも、後難免れがたかるべし。枉て饒させ給ひね。と理り切に和解れば、義武は老黨の、意見を聴ざらんはさすがにて、うち領きつゝ退きて、刃を鞘を藏れども、尙理らぬ怒氣と共に、只諄々と罵りけり。話分兩頭、この日十二月八日の曉天に、扇谷定正の諸軍船は、三浦の澳に錨兒を下して、風外道人の風術をもて、起す順風を等つ程に、幾千の艦艦に、掛互したる張燈は、波を照らし水に映じて、魚鼈もこゝに寄るなるべし。浩處に洲崎の方より、快船一艘漕もて來つ、降人と書寫したる、弦掛提燈を指抗て、うち振りく喚るやう、是はこれ安房の降人、千代丸圖書助が密使にて、濱縣馬助と喚做す者也。火急の言上あるをもて、いかで直訴し奉らまく欲す。この義を稟し給へといふ。聲共偪に近づくを、扇谷の士卒小舫に乘りて、出迎へつゝ鈎留めて、引て大石憲儀の艦の邊に將てゆきて、恁と注進しければ、憲儀則水幕を抗させて、出で濱縣馬助に對面す。這馬助は、浦安牛助友勝也。當下友勝がいふやう、豊後豫約しまつりし如く、今日しも且開の水戦には、豊後里見の衆艦の背よりうち起りて、火を放ちて颯にすべし。但しその折乾の順風の、最も烈しく吹き候はゞ、豊後が放火は里見の衆艦に蒐らずして、向火反て我艦を燒ん。然れば豊後は、里見の衆艦を漕脱て、逆て蚤く火を放さん。その折御艦を找めさせて、俱に火攻し給はゞ、全勝十二分に候べし。この義を謀しまつらん爲に、復こそ推參仕りぬ。と實しやかに説諭れば、憲儀听つゝ點頭て、聽て小舫に乘移りて、引て定正の艦に造りて、件の義を告しかば、定正悦び大かたならず、其義我よくこゝろ得たり。疾衆艦に下知を傳へて、且開の進退を示すべし。豊後主僕大功あらば、賞祿は異日の沙汰にあらん。先この旨を答謀して、馬助とやらんをかへし遣りね。といふを友勝側聞して、憲儀に向ひていふやう、既に天明に程なからんに、小可慙に安房へ還りなば、里見の士卒に怪しめられて、事の破れにや作り候はん。縦目今の御答を、豊後に告ずとも、御同意にをはしまさば、事違ふべくも候はず、この義を稟し給ひね。と請へば憲儀又點頭て、隨即友勝のいふよしを、又定正に

告しかば、定正いよく感悦して、現其遠慮も謂あり。然ば其馬助を、憲儀汝の隊に隸よ。軍忠隨意なるべけれ。といふに憲儀異議もなく、御誕承り候ひぬ。柴薪を積たる船母は、既に御伴に候へども、其頭人を課たる、家臣仁田山晉六は、いかにしつらん、いまだ參らず。第一義なる柴薪に、頭人なくば不便なるべし。然れば晉六が來ぬるまで、這馬助を代として、那役に充候はゞ、便利にこそ候はめ。この義怎麼。と請問へば、定正聞つゝ又點頭て、現他が主なる千代丸豊後は、既に放火の頭人也。且主僕俱に安房人にて、波上の擗き自由ならんに、其一役を課なば、反て仁田山晉六に、優すこともあらん。退りて柴薪船を遞與しね。と得たり貌に吩咐れば、憲儀唯々と言承して、船を漕せつ退きて、却友勝に柴薪船を、預けて其進退を任せしかば、友勝は思ふに倍たる、事の首尾の十分なるに、笑を忍びつ歡び謝して、そがまゝこゝに留りけり。左右する程に絳輝引く、東稍垂曉としぬる時候、風外道人の約東違はず、乾のかたに天引たる、横雲の間よりして、勁風颯と吹起りて、激波高く艦揺めければ、この期を得たる寄敵の大兵、寒氣も俱に忘るゝまでに、孰か歡び勇ざらん。素破乾の順風吹出たれ。皆疾錨兒を曳抗て、寄せよ。と喚りて、伍置を守りて漕出す、先鋒は則當軍の兵頭、大茂林小彦和中、濱川小渡鉄久、士卒五千人、并に新附の海賊の頭領、水禽半四郎綠林、錦帆及四九郎近範、其徒二千餘名を左右の副とす、共に雄兵七千餘名、其艦一百許なるべし。次は管領四家老の隨一なる、小幡全頭東良、士卒三千名、次は上杉式部少輔朝寧に、大石源左衛門尉憲儀を副とす、信城左傳達頼、九本佛九郎望洋等是に従ふ、其兵一萬餘名也。次は總大將、扇谷修理大夫定正、從兵三萬千名、十數名、箕田源二兵衛后綱、白峰麻生介廣原等、及阪東に有名の郡司郷士の、是にしたがふ者尠からず。又降人千代丸豊後の密使なる、那濱縣馬助すら、柴薪船を預けられて、先鋒に従ひて找めども、武田信昌の名代なる、武田左京亮信隆と、新參の浮浪人、赤齒百中と、仁田山晉六武佐のみ、中途に障る事ある歟、この時までも其船見えねば、定正を首にて、朝寧憲儀東良等はさら也、機密を知りたる老兵は、今さら他等を俟んとて、躊躇ふべきにあらざれば、

寄隊二千箇の戰艦を構らせ、船を鳴らして、整々として前後を亂さず、乾の順風に儘せて、徑に洲崎へ推寄せて、
 稻村瀧田の城を屠りて、義成親子の首を捕んとて、勇ざる者なかりける。事の勢正に是、曹魏江に浮みて吳を吞ま
 く欲りし、胡元海を渡して、東に寇せし日も、恁やありけん戰世の、人の心は死活の、海を海ともしら波に、彼岸遠
 く後の世を、思さるこそ薄情けれ。

第百七十四回

萬里一水道節小仇を射る
 八百八人毛野大敵を應にす

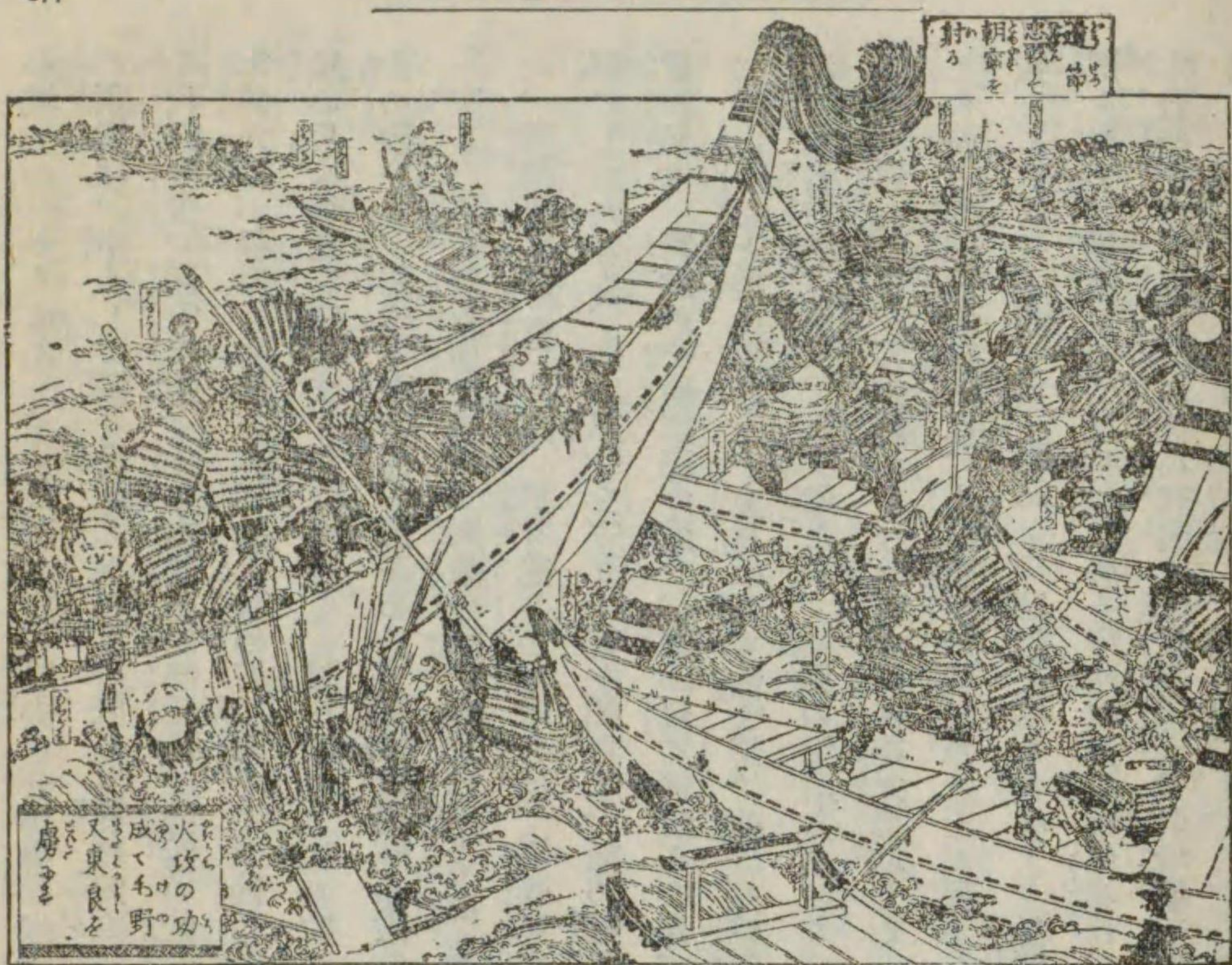
却説、この時安房の洲崎なる、里見の陣營には、國守安房守義成主、昨十二月七日に至りて、軍師大阪毛野、防禦使
 大山道節、并に兵頭小森但一郎高宗、及諸兵頭、老兵と、恩赦の罪人、故の上總の榎本の城主なりける、千代丸圖書
 助豊後等を、召集へて、明日の水戰の隊配を定めらる。印東小六明相、荒川太郎一郎清英、木曾三助季元、小湊目
 堅宗等も、俱に這席にぞ與りける。并が中に大阪毛野は、獨君命を承りて、諸隊の前後を配分す。先鋒は則小森
 高宗に、千代丸豊後を副として、毛野が謀る所あり、其船毎に、柴薪焰硝を積入れらる、放火を宗とすべき與也。次
 は大山道節に、荒川清英、印東明相を、左右の副とす。次は軍使大阪毛野にて、木曾三助季元是に従ふ。從軍の諸頭
 人の交名は、枚擧るに違あらず。しかれども自餘の五犬士と、東辰相、荒川清澄、杉倉直元、田稅逸友、登桐良于、
 滿呂重時、鮎船茂足、東峯春高、堀内貞住等は、或は陸地の敵を防ん與、或は悄悄地に謀を授けて、他方へ遣した
 り。そが中に、大江仁、姥雪與保は、京師よりいまだかへり來ず、剩 蟹崎 照文と、田稅逸時、苦屋景能を、重ねて
 京へまゐらせたれば、當陣に勇士多からず。義成も艦を出させて、俱に大敵を防ぐべしとありしを、軍師胤智禁め
 棄して、當陣に本事ある兵多からねども、事十二分に謀り得たれば、大敵も怖るゝに足らず。且明日の水戰に、君こ
 の處を動坐あらば、反て守衛薄くして、萬一の時誰かよく、陸にうち登る敵を防ん。且奸民郷兇の、野心も料りがた

ければ、猶この御陣に御坐すこそ、後安く候べけれ。と其理を説きめしかば、義成この義を受容れて、曩に水戲水
 馬の調煉を、檢覽の與に建させたる、望洋臺にうち登りて、明日の水戰を觀つべしと定めらる。折から瀧田の城より
 堀内藏人貞行が、老侯の使として、安危を拜問の與に來にければ、義成歡びて對面あり。幸の事也とて、そが儘こ
 こに留めあらせて、瀧田へは、別に使をもて、この事を請せらる。明日貞行を、當陣の、一頭人に充んとて也。獨小
 湊 目のみ、明日の隊配に漏しかば、痛く望を失ひて、思難つゝ毛野にいふやう、在下は原是老館の、御使を承り
 て、瀧田より参りしかども、同僚東峯鮎船等は、既に用ひらるゝ所ありしに、在下をのみ、甚麼ぞや、明日の水戰に
 俱し給はぬは、用るとも益なし、と思ふ、故なる歟、こゝろ得がたく候。と卿言がましく怨ずるを、毛野は听つゝ含
 笑て、否とよ和殿は、別に用る所あり。いそがざる事なれば、いまだ其義に及ざりき。耳をよせね。と膝を找めて、悄
 消やかに誨るやう、明日水戰の時に臨て、朝風必異にならん。其折和殿は五百の雄兵と俱に、快船十餘艘にうち乗
 りて、敵に管はて幕直に、蚤く武藏の河崎へ渡すべし。鮎内葉四郎と、雜兵猿岡猿八は、俱に其故郷は、武藏なる、
 矢口也と歟いひし事あり、那里の地理に具なるべし。因て他等を從せん。那地に屆りて進退は、箇様々々。と説
 示せば、小湊目は欣然と、承歡びつゝ退きて、事の準備をしたりける。恁而大阪胤智は、大山道節と共に、明日
 の軍兵を整るに、諸頭人と船長們に、君命を傳へていふやう、約莫明日の水戰は、各こゝろ得べき進退あり。意
 ふに黎明の時候より、乾の勁風起ることあらば、敵の大兵艦を找めて、幕直に推寄せ來つべし。然りとて我諸隊の
 艦は、猶皆岸に在りて動くべからず。其風變りて異にならば、敵を逆へて火を放つを要とす。勿論館の御軍令に、隨
 ひまつりて、縦勝に乗るとても、多く敵を殺すべからず、只生拘を全功とす。倘違ふ者あらば、立地に是を斬ん。艦
 には今宵、柴薪を積載て、且開の、戰飯は、各艦に在て、握飯たるべし、且纏腰飯を忘るべからず。この義は天津九
 三四郎が、稻村より來て、炊飯の夫役等に指揮すべければ、事に礙滞あるべからず。この御旨を得よかし。と言 嚴

に説示せば、大家敢異議する者なく、共に言承をしぬる牙が中に、千代丸圖書助豊俊は、この日管掌兒、堀内許より召出されて、この隊に在り。潮に義成主に見參を饒されて、且恩命あり。這回の團戰に大功あらば、舊領城地を返し給ふべし。と仰らる。しかれども豊俊は、舊臣の浮浪して、安房上總に在る者は、いまだこの義を知ざれば、那身に一僕だもあらず。遮莫先鋒の次將なれば、面目あまりあるなるべし。恁而この夜は、篝火を燒して、既に曉天になりしかば、將帥義成主は、望洋臺にうち登りて、明日の水戦を見まく欲す。致仕の老黨、堀内貞行を首にて、老兵士卒三千餘名、臺上臺下に、多く高張燈を掛互して、最も堅固に備たり。水隊は軍兵一萬餘名、八日の曉天に至りて、一隊毎に、士卒威艦に乘果て、敵のうち寄するを俟程に、天は向明としぬる時候より、乾の勁風吹出て、磯打激波凄じく、艦を遣るべき便宜にあらねば、士卒齊一感悟して、果せる哉、軍師の先見毫も違はず、既に乾の勁風發りぬ、敵推寄するに程はあらじ。恁てはこの風吹變りて、異にこそなるべけれ。と思へば都て勇みあり。寒風肌膚を冒すを忘れて、弓弦を潤しつ火銃の、丸を籠つゝ敵を俟つ、威勢こゝに振然たり。爾程に、扇谷の諸軍艦は、既にこの順風を得て、歡び勇ざる者あらず、各正帆を七八分にして、風のまに／＼走らすに、皆是巨艦なるをもて、猛風洪波にも危ふからず。三浦の澳より洲崎まで、水路五六里に足らざれば、今はしも、一里許もやあるべからんと思ふ程、忽地に風歇ぎ波理りて、衆艦都て毫も走らず。是はいかに、と訝る程に、其風猛可に異に變りて、いよく便宜を失ふ折から、洲崎の岸より突然と、快船十餘艘漕出で、前なる敵にはうちも逆はず、波を横ぎり、一瞬間に、武藏のたへ漕去りける。是則別人ならず、小湊目堅宗が、腕内葉四郎、狙岡猿八等と、五百の雄兵を従へて、目今那地へ渡す也けり。當下軍師大坂毛野は、一萬の軍兵一千有餘の戰艦を、三隊に分ちて鼓を鳴らさせ、帆を振らせて、連りに士卒を找れば、則先鋒の頭人なる、小森但一郎高宗、千代丸圖書助豊俊が隊の兵三千、艦三四百艘波を開きて漕出す。第一番なる水艦に、降人千代丸豊俊と寫せしを、扇谷の先鋒の艦なる、大茂林小彦、濱河小渡井に水禽軍

四郎、錦帆八四九郎們、いへばさら也、後方に續く寄隊の衆艦、大石憲儀、小幡東長、將帥(定正)副將(朝寧)も是を見て、原來千代丸豊俊は、順風の便宜を喪ふ故に、里見の衆船の背より、火を放つこと得ならねば、胡意找みて先に立し歟、然るにても里見の士卒は、他を怪みて制する者なく、舵を連ねて近づき來ぬるは、故あることか、こゝろ得がたし。疾瀆縣馬助を、召よせて問すや。と喚る聲も果ぬ間に、小森千代丸が隊の頭艦は、射の箭の像く漕よせて、俱に準備の小柴に、火薬を夾みて敵の船に、投入々々攻寄すれば、折から烈しき潮風に、放火の威勢一霎時もあらず、寄隊の艦に在る所の、柴薪に其火移りて、發と煙立つ程しもあらず、先鋒の衆艦免るゝ者なく、猛火と做りて爆爛たる、軻遇突の威勢漕りもなきに、且猶浦安牛助友勝は、扇谷の柴薪を預りて、先鋒の艦の後方に在り。件の放火發ると見るより、同船の軍兵四五名を、研仆し又研伏せて、左右なる船の柴薪に、火を放ちて、猶も在る敵兵を、中に儘せて研殺す、大刀風と共に聲震發て、愚なる哉定正憲儀、寄隊の衆兵皆听ね、豊俊焉ぞ敵に降ん。我は其舊臣なる、濱縣馬助と名告りしは實にあらざ、軍師大坂の密策に従ふて、定正を哄し得たる、實は里見恩顧の頭人、浦安牛助友勝なるを知ざるや。若們は是鬼の群鳥、這圈套に入りたれば、皆夷禽にならんのみ。笑ふべし。と喚りつ、みづから艦を推、衝と漕脱て、自家の先鋒に加りて、俱に敵をぞ攻撃ける。爾程に風火いよく爛にて、寄隊の艦は一箇として、其燬を受ざるもなかりしかば、將帥士卒の差別なく、こはいかに。とばかりに、慌燥ぎつ、度を喪ひて、艦を脱れんと欲りして海に入る者は、水に溺れて命を殞し、然らぬは猛火に身を焦して、免るゝ者極て稀なり。弁が中に式部少輔朝寧は、心疾き小將也ければ、蚤くも艦を漕辟せて、風側よりして三浦のかたへ、脱れ去んとしぬる程に、印東明相荒川清英、俱に快船に乗走らせて、二隊の從兵七八百名返せくと喚りて、透もあらせず追蒐來ぬれば、朝寧の近習外官の老兵、皆只主を撃せじとて、近づく敵を研拂へば、朝寧も亦防箭射つゝ、且戦ひ且走る、逃るに順風の艦なれば、明相清英勇なきにあらねど、波の上自由ならで、撃漏すべく見えたる折から、大山道節忠與は、

は、定正を生拘んとて、速りに艦を找る程に、と見れば落ゆく敵船あり。明相清英二隊の艦もて、趕へども竟に及ざりける、其敵の旌旗水帳は是紛ふべくもあらぬ、朝寧ならんと思ひしかば、心いよ／＼いそがれて、他は則定正の庶冢子也、故主の爲には、冤家の半隻、さしも當君里見殿には、是鏡敵の骨肉也、疾撃捕らずや印東荒川、噫手寛し。と焦燥て、且我舵工を罵勵せども、間遙に遠ければ、亟に趕もつきがたき、道節いよ／＼焦燥て、那りに落ゆく敵の船は、扇谷少部少輔朝寧也と見しは僻目歟。恚いふ我は煉馬の舊臣、今は里見の股肱の臣、八犬士の隨一たる、犬山道節忠與なるを知らざるや。返せく。と喚りて、箭間は言に程あれども、豈脱さんや。と執る弓は、三人張に十五束、三伏なるに征箭うち刺ふて、最も易げに能彎固る箭矢を敵はしら波の、立たる隨に肩尖刀引提て、見かへる處を道節は、矢聲劇しく礮と射る。射られて朝寧一霎時也得堪ず、身を仰反せて大洋に、墜て水底にぞ沈みける。是にぞ驚く其隊の士卒は、吐嗟とばかりに、鈇兒をもて、主を拯ひ揚んとて、舵を留めてありける程に、印東荒川二隊の艦は、波濤を開きつ漕よせ來て、乗移りく、敵を擧す所す。就中明助清英の太刀風に、中る敵兵あることなければ、多くは船の内に平張伏し、或は跪き頭を敲きて、命を乞ふ者尠からねば、明相清英うち笑ひて、無益の殺生すべからずとて、皆悉く結柱せけり。有恚し程に、道節は、艦を走せ趕もて來つ、這光景を見て喚るやう、小六太郎一、开は要なし。其泛なる奴們を、降すとも生拘るとも、穀潰しのみ何にせん。器械艦舵を奪拿て、潮のまに／＼流し遣りね。但等閑にせざるべきは、我射て墜したる一將也。他は必朝寧ならん。惜むべし遠箭にかけしかば、落て水底に沈みにけん、首を獲ざりし悔しきよ。先承獵んず、承獵ずや。と詞急迫しく罵示しつ、士卒に下知して、今朝寧の墜たる四下に、鈇兒を入れて搦撈らするに、水底深くて届かねば、又小錨を下させて、那亡骸を索求めて、引掛させまく欲するに、流れやしけん、舷に契して、劍を求るに異ならず。竟に其功あることなければ、道節屢嗟嘆して、恚と知らば趕迫て、必撃捕るべかりしに、遠箭にかけし悔しきよ。と獨言のみ士卒等は、俱に慰難たりける。(前



(すに勝た良東又野毛て成功の攻火・る射を寧朝てし戰艦節道)

卷第七十回に現入箭を抜て、水死の將を救ふとある段を照し見るべし。當下明相清英は、敵兵の器械艦舵を、皆悉く捉棄て、結柱りし隨に流し遣る、没架船の往方定めぬ、扇谷の士卒等は、恥を思はて蜻蛉の、命生きしを歡びて、流に儘する船の内より共侶に、伊豆相摸の方を見互して、那見よ遙に那里へゆく船は、我老館(定正をいふ)にこそ御座すめれ。臣等を俱させ給はずや。といふを、道節明相清英聞つつ遙に乞と相て、原來定正ござんなれ、疾撃捕ん。と船公們を、いそがし立てぞ趕蒐る。順風の舵に導りなき、伊豆歟、相摸歟、武藏野の、逃水也とて逃さじ。と憚る心ぞ勇れける。案下この日里見の先鋒の頭人、小森但一郎高宗千代丸圖書助豊俊は、浦安牛助友勝と相俱に、寄隊の前後より火を放ちて、多く敵の衆艦を焼きしかば、扇谷の先隊の頭人、大茂林小彦濱川小渡、其隊の士卒共侶に、燒れて命を損さぬはなし。然ども寄隊の總大將扇谷定正は、大石源左衛門尉憲儀、箕田源二兵衛后綱、白峰麻生介廣原と、近習の毎のみにして、蚤く敷箇の小舫に乗移り、疾五十子

の城へかへり入らんとて、武藏を投て脱去る开が中に、第一の隊長なる小幡木工頭東良と、頭人九本佛九郎望洋の隊の兩艦は、辛くして燬を逸れしかども、既に其艦は焼亡て、小舫もあらずなりしかば、俱に澳に漂ひしを、小森高宗、千代丸豊俊、浦安友勝、并に木曾三助季元は、其隊の快船數艘をもて、透間もあらせず趕蒐來つ、高宗と豊俊は、九本佛九郎が隊にうち向ひて、兵を找めて攻戦ふに、佛九郎望洋は、本事ある猛者なれば、左右なく撃も伏られず。其隊の兵も皆死を究めて、免れがたしと思ひけん、敵の船に飛乗々々、或は引組て刺送へ、或は俱に海に入る、在昔壽永の戦ひも、恁やありけんと思ふめる、望洋は近づく敵を、殺拂ひ殺退けて、竟に千代丸豊俊と、鎗を合しつ、一上一下と、迭の奮勇術を盡す。兩敵の船、寄ては辟き、辟きては合ふ、生死の、海に潮成す知死期時、孰先ぞ、と見る程に、豊俊既に腕亂れて、那身危ふかりければ、小森高宗是を見て、蚤くも船をよせ合せつ、遂に九本望洋を、斷撃にしたれども、俱に軍令を守りて首を捕らず、敵の殘兵の降るを饒して、這鬪戦は果にけり。去程に浦安友勝、木曾季元は、兩隊の快船三三十艘を、飛が似くに走らせ來て、小幡木工頭東良の、没舵艦を、釜木香術の像くうち圍みて、拗んと競ひ蒐るを、東良は毫も怯まず、他は是管領四家老の一人にて、武勇拔萃の聞えあり。且其家臣、木代漁傳太名増瀬五四郎、と喚做たる、兩個の猛者ありけり。俱にこの隊にありければ、主僕力を勦せ敵を防ぎて、撓む士卒を罵辱る、刀尖銳かりければ、友勝季元勇敢しといへども、尙鬪戦は互角にて、兩敵雌雄を分ざりけり。然ばこの時、犬阪毛野胤智は、小幡東良の獍勇なるを、豫より聞知りたれば、友勝季元卒爾にして、捕漏すこともあらん歟とて、其身も船を找ませつ、間近く寄せ合せて、舳頭に兇兒を建させつ、鏢をもて輪縁したる、軍扇を採つ、尻を掛て、端然としてうち見て居り。然ば里見の衆兵は、是に機を得て奮勇十倍、勝に乗たる开が程に、浦安友勝、木曾季元は、俱に那兩門の猛者、木代漁傳太、名増瀬五四郎と、挑戦ふこと半响許、季元竟に瀬五四郎を、ばらりずんと斫仆す。この時小幡東良は、鎗の尖頭に血を濺ぎて、近づく敵を幾名歟、刺殺して寄せ立ず、今瀬五四郎が撃

れしを、見つゝ怨に堪ざれば、奮然たる鎗拿延て、耶と聲かけて、季元の、肩尖を愚然と刺す。刺れて季元身を仰反せて、海へ突と、墜しかば、東良得たりと鎗拿直して、二たび刺んと推下すに、季元は水中にて、敵の鎗の蛭纏に、楚と拂りつ身を浮せて、曳るゝ隨に敵の艦に、跳り入りつゝ、其鎗の幹を、握抜て東良に引組て、採伴さんと角へども、東良は阪東に、名高る力者もせし、敢又物ともせず、竟に季元を組伏せて、首を搔んとヒ首を、撈りて拔まくせし程に、手野は持たる軍扇を、礙と擲つ手術錯はず、東良眉間を打傷られて、颯と潰る鮮血と共に、眼眩みて仰反れば、季元下より反覆して、壓て索を被まくするに、東良膂力剛ければ、其手を抓て拵かせず。當下里見の雄兵等、及浦安友勝は、竟に木代漁傳太を、斫仆して、自家の士卒共侶に、季元を相接けて、折累りつゝ、東良を、緊しく結紐りて、牽居けり。然ば小幡の隊の兵等の、悍き者は既に撃れぬ。其餘は敵に殺立られて、今東良の虜に做るを、拯ふに暇あらざれば、誰か亦よく敵に中らん。皆刃を捨、跪きて、俱に擒に倣りにける。恁而季元友勝は、生口小幡東良を、這方の艦に移し乗せて、軍師の實檢に入れしかば、毛野は只管嗟嘆に得堪ず、慨然としていへるやう、現孫子を讀む者は、非如温順の君子といへども、不仁の心の起らぬはなし。其人を殺して、もて己を利する、方の教に由れば也。現兵は凶器なる哉。抑我兩館里見殿御親子は、今の世に又得易らぬ、仁君に御座せども、我毎敵を迎へて、死生を爭ふ、這戰場にて何ぞ仁慈を行ふに由あらんや。是則亂を撥めて民保かる、湯武の心に同じかるべし。已なん／＼。と獨言たる、貌を乞と更めて、却東良に向ひていふやう、小幡生今日の拵き、視を驚かすまでに最愛たし。我風火の謀をもて、寄隊の衆艦を燒きしより、定正主を首にて、其隊長諸頭人、雜兵に至るまで、敢敵に中る者なく、皆免れまく欲する故に、反て死する者多かり。然るを和殿は乘たる艦の、楫を燒れし故なるべけれど、敵に中りて血戦して、事のこゝに至りしは、瓦礫の内なる眞玉に似たり。我其武勇を愛るの故に、解恕してかへし得させん。和殿一個を饒したりとて、我勝軍の負べくもあらず。こは我君の御心也、我私の慈善とな思ひそ。兵母、やよ其索を、早く

解すや。といそがせば、執索の雜兵阿と答て、東良に被たる索を、手ばやく解て搔遣り棄れば、東良は身の福ひに、且恥且感謝に堪ず、姑且して毛野に向ひていふやう、思はざりける慈悲放免、現江湖上の噂に錯はず、里見殿君臣の、仁心こゝに至んとは、是に就ても恥しき、這回扇谷殿の攻伐は、佞人門の薦る所、我始より其歹を知れども、諒て聽るべきにあれざれば、心にもあらで、我衆と俱に、今日の水戦に従ひしに、いまだ一戦に及ずして、既にこの大敗あり。主將の安危を知るよしもなく、我身一個免れたりとて、今さら何等の面目ありて、故の城地に還んや。君辱めらるゝときは、臣死すといへり。齊の田横、鳥取部の、萬の義烈には及ばずとも、我も亦然ばかりの、志は致すべし。已なん／＼、是まで也。といひも訖らず傍なる、雜兵の帶たる太刀を、晃りと拔拿る手も見せず、項に楚と推加て、みづから首を斫落して、軀は撲地と俯たりける。思ふに優たる東良の、勇猛義烈に驚嘆する、友勝季元、士卒們はさら也、小森高宗、千代丸豊俊も、既に敵に戦ひ克て、船を併べて在りしかば、這爲體を視も听もして、俱に感嘆したりける。そが中に犬阪毛野は、憶ずも膝を拍鳴らして、嗚呼果せるかな、忠臣義士の、生を厭ひて、死を樂む志は、誰も慙こそあるべけれ。定正賢良ならざれば、行ひ都て道に違へど、猶其大夫に道灌あり、且那子に助友あり。又這小幡東良あり、こゝをもて、其大職を失はず。削らるゝことありといへども、いまだ亡びざる所以也。先や這亡骸を、宅眷に贈りて我君の、大仁大慈を知らしめん。やよ兵母、其生口を解饒して、遺なく這意を告知せよ。といふに士卒こゝろ得て、恩赦の一義に及ぶ程に、毛野は又舵工に課て、那艦に相應しかるべき、舵一挺を擲出させて、小幡の士卒に取すれば、東良の殘兵は、頭を敵き恩を謝して、隨即東良の首と其骸さへ、擡起しつ故の艦に移し載つ別を告て、順風に儘する帆を揚て、相摸地投て還りゆく船の、迹なき如く世間に、脆きは人の命也。かくて又毛野胤智は、高宗豊俊、友勝季元等の、この日の擢きを譽ていふやう、各戰功甲乙なし。千代丸生は舊罪を、償に足りぬべし。就中木曾生は、いはでもしるきことながら、杉倉翁の季子とて、武者助の弟なれども、尙青年なるをもて、

今番初陣也と聞えしに、小幡東良と戦ひし時、水中の擢きは、實に奇にして亦妙なり。藍より出て藍より蒼き、久後負しかりぬべし。和殿其肩尖なるは、淺瘡なれども、潮水に入りたれば、夙く療治せよ。いで／＼といひつゝも、總て準備の薬を拿出して、其鎗傷に塗らしける。勞勩等閑ならざれば、季元深く感謝して、心入りに勇みける。當下毛野は又いふやう、約莫この圖戦に、大角が今まで出て來ざるは、故もやあらん、心許なし。獨那人のみならず、敵の爲に保質にせられたる、妙眞音音、曳手單節も、恙あらずや胸安からず。疾五十子の城に推寄て、一旦城を攻拿ずは、猶大敵を懲すに足らず。四婦女の安危を訪ふに由なし。今勢に乗らずして、竟にこの圖を失はば、蛇を殺して頭を遺す、後の患ひなからずや。疾柴浦へ艦を找ん。諸軍兵この意を得て、先腰戰飯を披くべし。といふを友勝等皆諾なひて、現那四個の婦女は、今も五十子の城に在ん。定正逃て城に還らば、必敗軍の怨に堪ずして、四個の保質を戮べし。いそぎ給ふは理り也。といへば、胤智點頭て、我も亦始より、飽まで苦計を施さざれば、この田地に屈りがたかり。非如定正燬を免れて、城にかへり入るとても、只心怯れ胆落て、防戦の備をなさんのみ、敵に保質を、戮すに暇あるべからず。この義は心易かりてん。と解れて大家感佩す。但犬村大角が、三浦暴二郎義武と、争ひの安危いまだ具ならず。开は又下回に、解分るを聴ねかし。

南總里見八犬傳 第九輯卷之四十五

東都 曲亭主人編次

第七百七十五回

南彌六靈を顯して子を祐く
禮儀時を失ふて時に爲ること有り

この日文明十五年十二月八日の曉天に、甲斐の武田信昌の代軍なりける、武田左京亮信隆は、豫欲するよしあれば、定正の衆艦と、共に纜を解ものから、胡意波上遙に後れて、隊那には從はず、浦河の澳に錨兒を下して、悄地に順風を俟つ程に、天は稍明なんと思ふ時候、戌亥の勁風起りしかば、是究竟と舵工們に下知して、前面に見ゆる鋸山の麓路投て漕するに、正に相摸なる浦河より、上總の鋸山は最近くて、水行三里に過ぎるに、順風に儘する便宜にあなれば、一瞬間に其衆艦は、件の浦邊に果にけり。當下信隆は、艦を棄、磯に登りて、隊の兵を皆從へつゝ、悄地に山路にうち入りて、己が故の城地なる。應南へ赴きしを、地方の民等も知ざりけん、この事後に聞えけり。話分兩頭。この日洲崎の陣中には、荒磯南彌六が身後の蟬蛤兒なる、磯崎増松は、其實父、重野の阿彌七と、椿村の鑿八と共に、烽火臺の加役に充られて、件の臺下に在りけるに、遙に眺亘す洲崎の澳の、水軍は自家十二分の大勝利にて、燒盡さるゝ、寄隊千百の戰艦の、燬を免るゝはいと稀にて、猛火と做りて、波上に、爛々たる光景は、寇成る筑石の海なる、不知火にも似たるべく、敵の衆兵身を焦して、烟裏に、叫ぶ聲は、焦熱地獄の罪人の、呵責もかくこそあるべけれ、と思へば毛骨竦然て、人皆駭くそが中に、増松は總角なれども、性として武勇を好めば、自家の士卒の勝に乗る、擗きを羨みて、親と墜八に叫くやう、我門烽火の加役として、この處に侍れども、自家既に戦ひ克

て、敵又寄すべくもあらざれば、烽火を颺て急を報ること、あるべくもあらずかし。いでや船を乗り出して、燒残りたる敵の船を、流さて拿も留むべく、且水に溺れて命を殞し、敵の亡骸を拿揚なば、开が中には、那衆隊なる、大將品もなからずや。然らば仁慈を旨とし給ふ、館へ致す忠信にて、手を空くして這臺下に、在らんには優なるべし。この議を思ひ給はずや。と言老實達て談ずるを、阿彌七急に推禁めて、そは亦要なき擗了也。汝は尙總角なれば、館の隣み思食て、こゝの加役に做されしに、反て御軍令に違ひなば、後の御咎を争何はせん、無用々々。と窘れば、墜八も亦この意を好として、俱に不の字をいへるのみ、從ふべくもあらざれば、増松はいひがひなし、と思ふものから争ひ難て、默然として在りける程に、敵の衆艦は燬盡されて、鬪戰克たる自家の勇士は、敵の殘兵驍助に乗りて、命を漕りに逃去るを、猶脱さじとて快船を、漕走らせて赴る程に、洲崎の澳なる兵燹絶て、敵の乗棄し巨艦の、或は過半焦たるあり、或は舟底のみ残るもありて、波濤の揺動々々漂ふを、増松遙に眺望て、今那艦を拿らずもあらば、孰の時を等んや、と思へば心焦燥て、連りに嘆息しぬる折から、天津九三四郎員明は、戰飯餽の所役果て、聊暇を得たりしかば、この日の水戦を見まく欲さに、伴をも俱さず、劍太刀、身は身甲に釦壓衣して、這頭の浦邊にうち出て、舊家老隸の老僕、詰茂佳橋と相俱に、料ずこゝに來にけるに、増松等三人とは、前日洲崎の陣營にて、義成主に見參の折、送に面を認りてあれば、増松は歡びて、いまだ口誼も果ざるに、件の意衷を恚々と、告て好夕を請問へば、九三四郎駭嘆じて、噫、和郎は、年尙十五に足らぬ、里の總角なりけるに、恚る忠勤を思ひ起せしは、恐らく南彌六の靈憑て、いはするにぞあらんずらん。我も亦、疴弱多病なる、主君の興に、館今番の從軍を許させ給はず。纒に是戰飯司の、蛭兒所行してありけるを、本意なしとのみ思ひしに、今日は偶暇あり、いでや和郎と共に、那海上に燒残りたる、敵の艦を拿集へて、恚亡骸をも曳揚てん。然ども這情願を、先館に請まつりて、御免許を稟るにあらざば、軍令を破るに似たり。といひつゝ後方を見かへりて、や詰茂、和老は昨日堀内叟に從ふて、後陣に

参り在るこそ幸ひなれ。情由は目今听れし如し。いかで増松と相等が與に、堀内主にこの義を告て、館の御免許を請し給ひね。やよいそぎてよ、憑むぞよ。といふに佳橋は異議もなく、それはこゝろ得候也。館御許容なくば、小可走りて又来てん。來ずは障りなし、と思ふて、去向をいそぎ給ひね。と答て急に増松と、阿彌七と墜入等に、押をしつゝ、君が在す、陣所を投て走りけり。爾程に天津九三四郎は、この烽火臺なる。本番の頭人に、増松等が情願と、目今詰茂佳橋をもて、館に請まつらせたる事さへに、簡様々々と告知せて、這臺下に維れたる快船二艘と、帆兒枵索さへ多く求得て、开が一船には、増松と阿彌七をうち乗せつ、又一船には墜入と九三四郎うち乗りつ、俱に鰐を推し舵を操りて漕出すに、皆是上總人なれば、波の上自由にて、暴風激波をもともせず。又只這四個兩船のみならず、烽火臺の頭人は、尙總角なる増松が、忠勤を賞感して、俱に彼等を幫助んとて、別に快船十艘に、雜兵百十數名をうち乗せて、増松九三四郎等に從はせしかば、増松九三四郎等は、この日の拵きに便宜を得て、燒残りたる敵の巨艦の、流るゝを赶留め曳綆して、這方の磯に維く者尠からず。又帆兒をもて、海を撈りて兩敵の、亡骸を索るに、自家の士卒の戦死は稀にて、敵の火に燒れ水に溺れたる、屍骸は數ふるに盡すべくもあらず。有恚し程に、扇谷の先鋒の小頭人、水禽準四郎綠林、錦帆八四九郎近範は、原是海賊の頭領なれば、水戯至妙の本事あり。こゝをもて、敵の艦を燒れし時、俱に水中に火を逸れて、波濤を被げども、敢死なす。既にして、其艦は燒亡て、流るゝ板子を抱き身を浮せて、波濤のまに／＼流れて在り。燒残りたる艦に逢はゞ、うち乗て逃れ去らばや、と思ふものから盲龜の、浮木に似ておふことかたく、海廣く波暴ければ、いまだ便宜を得ざりしに、烽火臺なる加勢の雜兵們は、船より是を見出して、是も亦、敵賊自家の軍兵の、浮屍骸なるべしとて、手に／＼帆兒を拿延て、擡よせて船に載しかば、綠林と近範は、俱にこの便宜を得たれども、猶も死したる面色しつゝ、一霎時氣力を願ふて、共侶に衝と身を起す、其威勢初に似ず、腰に残りし大刀引抜て、船なる敵の雜兵を、研什し研什せば、こはいかに、とばかりに、驚き噪ぐ、餘の雜兵

も、申る者なく散動きて、瘡を負ふ者ぞ多かりける。當下天津九三四郎は、墜入と只二人、別船に乗て在り。今この異變に驚きて、俱に船を漕よせ來つゝ、件の船に移りて、やをれ白徒卒爾なせそ。と喚禁めつゝ、刀を抜き、水禽準四郎綠林と、刃を交へて、一上一下と、聲をかけつゝ殺結ぶ。程しあらず、増松も亦是を見て、吐嗟とばかり、親阿彌七と共侶に、九三四郎を援んとて、船を這方へ漕もて來ぬるを、錦帆八四九郎近範は、はやくも是を見かへりつゝ、増松か童年なるを侮りて、敢又物とも思はず、近づく隨に其船に、懸て閃りと乗移るを、阿彌七は乗せじとて、械もて逆ふを近範は、隻脚を飛ばし蹴付して、又増松を撃んとて、振晃めかす刃の電光、それからあらぬ敷、近範の、目前に燈と立つ陰燐の光りに、近範憶ず眼を射られて、苦と叫びつゝ、兵兵く程に、増松得たり、と刀を抜て、撃つ手鋭く近範が、右の拳を研落せば、近範恚ても猶弱らず、左の手をもて増松に、組んと扱むを遣反して、鎧の透を撲地と研る、手裏牙たる窮所の深痕に、近範竟に堪難て、臂居に控と平張俯て、手脚を悶撞て死でけり。爾程に、又一船なる、天津九三四郎員明は、水禽準四郎綠林と、刃を交へて刀尖より、火出るまでに戦へども、綠林素より猛者にして、武藝剽姚凡庸ならず、員明危ふかりければ、棒村の墜入は、俱に刃を打振々々、援けて連りに挑み戦へども、綠林威力壯にて、右に中り左に柱る、最も劇しき太刀風に、員明も亦墜入も、身に負ふ痛癢に堪難たる、墜入は憶ずも、腕亂れ柱難て、いよ／＼危ふかりける程に、又只磯崎増松は、今剛敵を撃捕りしかど、蹴られて滾びし親阿彌七を、勦り慰るに暇あらず、又員明を援んとて、いそぎて船を漕よするに、既にして員明は、只受太刀に做れるのみ、吐嗟目今、撃果さるべく見えしかば、増松心焦燥て、間はいまだ近からぬ、水を隔て船より船へ、閃りと蕘入る自得の剽姚、綠林是に驚きて、見かへる處を丁と研る、研られて綠林一霎時也得堪ず、刀を棄て仰さまに、控と鞭べば員明は、得たり、と刀を拿直して、登り蒐りて刺んとするを、増松急に推禁めて、やよ、等給へ、天津主、權且這奴を活し置ずば、其姓名を知るよしも、定正主の存亡を、誰にか訊ね、誰にか問ん。憚るけ要なき事ならず

や。といふに員明、有理と悟りて、然らば結紐ん、やよ墜入、索もて俱に手傳ひね、やよとくく。といそがせば、墜入はやうやくに、痛瘻を忍び身を起して、濱網をもて、緑林を、いとも緊しく結紐りける。然ば又阿彌七も、近範に蹴られしのみにて、恙なければ、又纏を推つ、船を寄來て、苦戦に勁敵降伏の歡びを筈などす。這他加役の雜兵們が乗たる船は、間遙に遠かりければ、這鬪戦を知るもあり、知ざりしも稍聞知りて、うち驚きつゝ聚ひ來つ、且増松が擲きの、拔萃なりしを稱贊す。爾るに這増松は、本性武藝を好めども、素是莊客阿彌七が、第二の子にて、且、寒家に生育たれば、擊劍の技けしも、得學ざりけるに、約莫この日の擲きは、筑紫の八郎(爲期)鎌倉の源太(義平)鞍馬の牛孺丸にも、伯仲すべき手段あり。开をいかにぞと原るに、上の出像に見えたる如く、初錦帆八四九郎近範が、這方の船に移り來て、増松危ふかりし時、怪むべし、其義父荒磯南彌六が、在し世の形貌變らず、身には細鐵の衫甲に、重鉄打たる胼甲、十王頭の脛盾して、黒金表装の大刀を跨へ、忽焉として影の如く、立顯れつゝ近範を、遮り禁めて手を動せず、身は一團の陰火と做りて、増松が口中へ、閃めき入るよと見る程に、増松奮勇日屬に似ず、武藝割姚向ふに前なく、矢場に勁敵近範を、研て兩段に做し、つのみならず、又緑林に瘻を負せつゝ、軋く他を生拘りて、且九三四郎と墜入を、拯ひ得たる戰功は、則是南彌六の、靈の致す所也。そを九三四郎墜入は、夢ばかりだも是を知らず、只阿彌七のみ近範に、蹴られて仆れたりし時、この奇異を認めしといふ、其言分明なるのみならず、増松は那時より、眼光さへ聲音さへ、よく南彌六に肖ざることなく、心術猛可に大人備たれば、誰か非とて疑ふべき。員明を首にて、墜入并に加役の雜兵、都てこの奇談を聞知る者、呆るゝまでに感嘆して、那南彌六が義俠なる、死して後も靈亡びず、冥助を其子にあらせしは、伏姫神の亞なるべし。と稱て美談にしたりける。然ば亦幸に、九三四郎も墜入も、其瘻窮所ならねば、疼痛甚しからず、俱に汗衫の袖を裂て、其瘻口に卷などして、却緑林を責て、さの兩個の姓名と、定正の存亡を問けるに、始は左右なくいはざりしかども、深瘻の上なる筈に堪ねば、則其身と近範の姓

名出處、又定正は、憲儀后綱等に援けられて、小舫に乗りて逃れ去りつらんといふ。又只この事のみならず、加役の船に引上たる、敵の屍骸多かる中に、扇谷の先鋒の頭人、大茂林小彦、濱川小渡等、この餘も有名の士多かるを、誰も知るよしなかりしに、こも亦この時緑林に見せて、稍是を知ることを得たり。この時自家の諸軍兵は、瘻を免れし敵を起ざるもなければ、這頭に在るべくもあらず。獨軍師大阪毛野が、一隊の戰艦數十艘のみ、洲崎の澳に船兒を下して、一霎時士卒を憩へて在り。相距ること二十町に過ぎざれば、九三四郎増松は、この義を軍師に告んとて、則生口水禽軍四郎緑林、并に錦帆八四九郎近範、大森林小彦和中、濱川小渡鏡久等の、首級亡骸を船に載て、漕ぎつゝ其里に赴きて、言忌々と委曲を營して、且生口緑林と、近範等が首級を、軍師の實檢に入れしかば、胤智賞感大かたならず、纏は九三四郎増松、阿彌七墜入等に對面して、其戰功を譽て且いふやう、就中聞くが如きは、増松が武勇拔群なる、是併、其養父南彌六の、神靈の致す所歟、義士の依魂、死して亡びず、實に感ずるに餘りあり。我は徑に武藏へ渡して、敵に脚を止させじと欲す。汝等は、蚤く洲崎の御陣へまゐりて、俱に功を奏しまつりね。我も亦勝軍の義を告奉らんとて、隨即兩個の老兵に課せて、注進狀をまゐらするに、増松們が戰功の、美事さへに寫載たり。恁而件の老兵等は、増松等が船に乗て、俱に洲崎の港口なる、望洋臺に赴く程に、生口緑林は、深瘻に堪ずして、船の内にて死にけり。然ば胤智の隊の頭人、小森高宗千代丸豊俊、浦安友勝、木曾季元等はさら也、後に件の奇談を聞く者、義成主を首にて、七犬士四家老諸頭人、雜兵奴隸、士民莊客、婦女衆に至るまで、感嘆せざるはなかりけり。不題、この日の曉天に、犬村大角禮儀は、料らずも新井の澳にて、三浦暴二郎義武に抑留せられて、艦の前後を争ひ已まず、角口に時移りて、天は明なるとしぬる時候、洲崎の澳には兩敵の、鬪戦起りぬとおぼしくて、猛火遙に天に升りて、餘煙這方へ飄舞きけり。以ある哉、初は勁風乾なりしに、其風猛可に吹變りて、既に異に做りたればなり。大角これを瞻仰て、原來鬪戰那圖に當れり。今さら無益の口論に、時を移さば期に後れん。兵無艦を疾遣らす

や。と喚りつ刀を抜て、敵の掛たる舳の、鈎索托地と斫拂へば、堀内雜魚太郎貞任も、勇る聲を震起て、士卒を罵り促しつゝ、敵の掛たる鈎索を、斫拂ひ又斫斷せて、漕もて去らまく欲すれば、義武慙怒に得堪ず、噫、烏濤の白物毎、非如管領家の兵也とも、烏合の野武士に魁せられて、何をもて面目にせん。兵毎先那百中を撃捕て、蚤く水路を開ずや。と喚り哮る聲と共に、競ふ新井の三頭人、水崎蟹人、甲良龜九、小磯眞砂五は舵工に下知して、一雲間に、二十餘艘の戰艦を、獨樂の像くに漕繞させつ、大角が十艘の船を、遺なく捕籠て、撃んと找むを大角は、敢又物ともせず、四下に响く武者聲高く、義武听ね。我烏濤ならんや、若們以て烏濤技すな。我豈赤站百中ならんや、實は里見脇股の臣、是八犬士の隨一人、大村大角禮儀也。我定正を謀り得て、汝が親義同に、艦を借りしは要ある事にて、今朝しも寄敵の背より、火を放さまく欲せしに、こゝにて汝に抑留せられて那期後れし腹鑿に、今先若們を颯にして、新井の城を攻捕てん。みづから其愚を知るならば、兜を脱て降らずや、といはせも果ず義武は、且駭きますます怒りて、原來里見の間諜兒に、欺れしこそ悔しけれ。兵毎先其大角奴を、捉へて蚤く奉もて來よ。と脚踏鳴らして焦燥ども、既に新井の隊の兵們は、思ざりけるこの敵を、里見に名高る犬士の一人、大村大角禮儀也、と名告るを撃て聞しより、勢ひ折けて左右なく找ます。義武いよく焦燥て、みづから鎗をうち振りうち振り、近づく敵を刺せば、水崎蟹人、甲良龜九、小磯眞砂五等、是に氣を得て、漕寄々々、艦を連りに找れば、懦雄の壯俊、本事ある老兵さへ、各先を争ふまでに、或は敵の船に乘移り、或は又乗移られて、連りに挑戰ども、禮儀よく兵を用れば、小勢にして反て撓ず、貞任も亦衆に先だちて、奮戦突戰術を盡せば、義武隊兵三倍して、驍勇向ふに前なきも、勝を取る事易からねば、いまだ雌雄を分ざる折から、洲崎の澳なる兵鬩は、風のまに吹散されて、こゝへも亦飛來ぬるあり。既にして、一團の政火閃きて、新井の船なる柴薪に、燧と降かゝる程しもあらず、其船忽地猛火と做りて、防ぐに術なき士卒等は、吐嗟とばかり驚噪ぎて、煙れて死するも多かるべし。然ば暴成す祝融の、祟は又只是

のみならず、其火四下に飛移りて、義武の隊の船を燐く者、五六艘に及びしかば、甲良龜九郎、小磯眞砂五郎、水崎蟹人、士卒も俱に、辛く他船に乘移りて、遁れ去まく欲せしを、大村大角、堀内貞住、艦を風上より相找めて、士卒を駈て攻戦ふ、大刀風烈しかりければ、敵の頭人龜九郎、蟹人、眞砂五、士卒まで、各痛癩に堪難て、首を並べて俯すもあり、或は海へ飛入りて、死活を知らぬも多かり。當下三浦暴二郎義武は、火にも慌ず、敵にも怯まず、いよいよ士卒を罵獎して、近づく敵を刺せず、鬪戦こゝに劇しくて、其鎗竟に折れしかば、火光に就て大角の、乗たる船を吃と見て、いでや組んと身を跳らせて、蝨の像く飛入るを、大角組せず身を反して、其手を拿て引投に、板子上に投付せば、自家の士卒折累りて、押へて索をかけにけり。義武擲になりしかば、敵の殘兵皆降參して、這里にも鬪戦果にけり。登時大村大角は、堀内貞住等を召集合ていふやう、我憶すも、這鬼禍に拘づらひて、放火の時に後れしに、今さら洲崎の澳に造るとも、六日の菖蒲十日の菊にて、倒に要なかるべし。査するに、大坂が逆謀りし、八百八人の術行れて、自家十二分の、勝軍にぞあらんずらむ。因て又意ふに、義同其子の我爲に、擒になりぬと聞知らば、必怨に堪ずして、時を移さず推蒐來て、拿復まく欲すべし。开を我切所に埋伏して、撃破らん事かたからず。其隊配は箇様々々。と言詳に呬き示せば、貞住并に老兵們も、皆欣然と諾なひて、俱に隊分を定るに、三百個の隊の兵に、降名の敵兵を相加へて、通五百餘名になりぬ。則是を二隊に分ちて、其一隊には、貞住を頭人とす。愆而大角は、生口義武等を猶船に在らせて、士卒五十名をもて守りとす。この他は皆艦を棄て、水際に登り立つ程に、天は明け、烏鳴渡りて、朝霜白く風寒かり。爾程に、新井の城主三浦義同は、其子暴二郎義武が、敢病後を敷ふことなく、今日水戰の先をせんとて、隊の軍兵を將て出てゆきしを、いかに、と思難て、再宿も得せてありける時候、近習等が、慌しく、枕方に來て告るやう、目今澳の方に丁りて、猛火の光り雲に入りて、中天に映する、と告る者の候ひしを、船火事ならんと見る程に、嚮に郎君に従ひまつりて、洲崎の戰場へ赴き候ひし頭人、甲良龜九郎と、其隊

の雜兵兩三名、俱に痛癢を負ながら、城門を敲きつかへり来て、火急の注進候也。と告るを義同聞も果さず、横見反復し岸破と起て、そは安からぬことにこそ。先我听ん、袴をもちね。といそがしく立つ身装して、大刀を佩き手燭を乗する、近習をそが儘從へて、蚤く厩縁に立出て、其頭の雨戸を開すれば、召ぶを遅し、と甲良龜九、從ふ雜兵共侶に、身には刀瘡瀉鎧の、吊腿重げに、庭門より、走り入りつゝ地上に坐すれば、義同蚤く聲を被て、やをれ甲良龜九郎、こゝろ許なき其身の刀瘡、故こそあらめ、いかにぞや。と問へば答て、然候。潮に御艦を貸給ひたる、那赤岳百中は、扇谷の加勢にあらず、實は里見の犬士と聞えし、犬村大角にて候ひき。然ば欺きて借得たる、柴薪をもて寄隊の艦を、燒盡さまく欲せしに、我郎君に抑留せられて、合期せざれば怨に得堪ず、みづから實の姓名を告りて、鬪戦に及しに、洲崎の方なる兵燹の、最も遙に蜚散り来て、我艦多く燒しかば、是より自家利を失ひて、撃る者夥からず。且郎君の御武勇なるも、御病後なれば、甲斐なかりけん、弓折れ勢窮りて、竟に擒になり給ひぬ。この他小磯眞砂五郎、及水崎登人は、戰歿せし歟、生拘られし歟、开は知ず候へども、惜からぬ身の存命て、阿容々々とかへりまゐりしは、いかでこの義を報まつらん、と思ふばかりに候ひき。と勸解つゝ息を啗と吻けば、雜兵も喘を止めて、いふよし上に異ならねば、義同いよ／＼怨に得堪ず、原來赤岳百中は、里見の犬士でありけるよ。鈍くも那奴に謀られて、多く士卒を喪ひしのみならず、我子を擒にせられしは、武門の恥辱の上やある。遠くは去かじ趕蒐て、颯にして怨を雪ん。疾陣徇して、人馬を聚へよ。いそげ／＼。と近習等を、推立遣りつゝ慌しく、其身は奥へ退きて、時を移さず戎衣して、眉尖刀引提て廣縁へ、二たび出て來ぬる程に、素より武備に置しからぬ、家風に從ふ勇士猛卒、皆薙々と撰甲して、蚤く廣庭に聚合ふ者、甲乙百許なるべし。尙聚ぬも多かれども、开を等べきにあらざれば、義同は馬をよせさせて、艦で閃りとうち乗りつ、後れし者は迹よりおこせ。といひ棄て馬に拍れて、開く正城の鉄門より、橋を渡しつ幕直に、馬頭上を投して走らすれば、從ふ兵皆後れじとて、喘喘ぞ續きける。愆而三

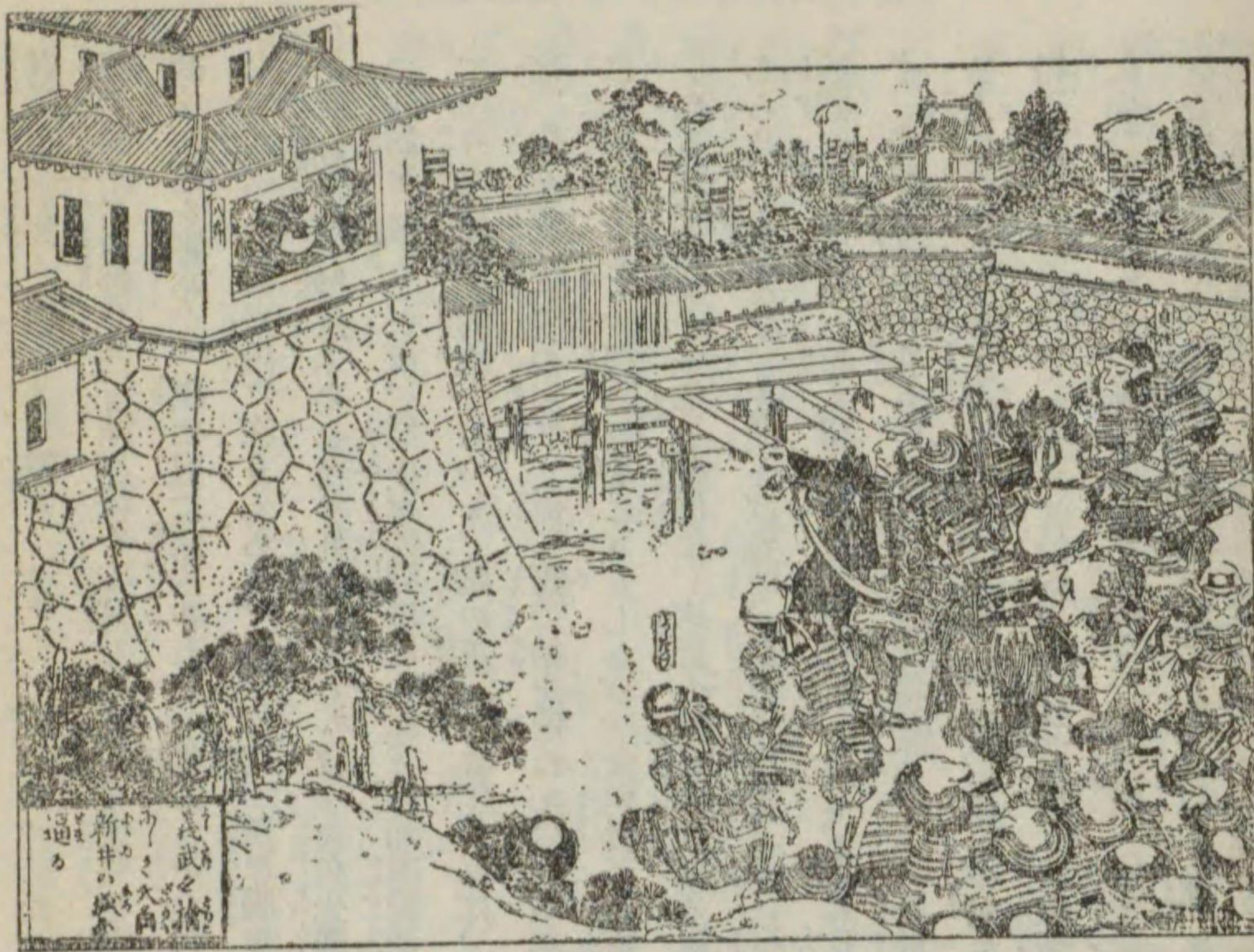
浦義同は、怒に乗せて去向をいそげば、敢前後を見かへらず、馳馬もけふばかり、猶驚かりし心地して、只管に走らす。其路いまだ幾程ならず、左右に深く繁り立たる、冬楓の邊を過る時、思ひがけなき左右の隈より、發出す銃砲の、响きと共に忽焉と、喊聲大きく起りて、なほも間なき銃响箭叫、敵の前後を撃亂して、顯れ出る、兩隊の軍兵、左のかたより犬村大角、右のかたより堀内貞住、士卒を驅て突然と、鋭尖き鎗尖、當るに前なき虎豹の威勢、驚き噪ぐ敵の衆兵を、刺仆し又撃破り、四下に响く聲も劇しく、愚なるかな、三浦義同黏に就く鳥、穿に入る獸に異ならて、尙戰まく欲するや。命惜くば降參せよ。犬村大角こゝに在り、茲にあり。と名告かけて、推捕籠たる八面勁雄聊も透あることなければ、義同は辛くして、稍一方を殺辟きて、馬を蜚して逃走れば、況や士卒は立脚もなく、或は敵に生拘られ、或は命を免れんとて、降參しぬるも尠からず。この故に義同は、一騎辛くして城内へ逃籠りて、猛可に橋を除せ、城門を閉させて、大息吻てぞ居たりける。

第七百七十六回

禍福反覆して三土功を同くす
追兵屢逼りて忠臣主を拯ふ

却説、犬村大角禮儀は、既に十二分に謀り得て、戦ひ勝ずといふことなければ、權且路に士卒を憩へて、腰戰飯を披するに、敵の馬さへ獲たりしかば、秣を索めて餌せなどす。登時大角は、悄悄地に貞住に談ずるやう、我聞く三浦義同親子は、阪東一の勇將也。しかるに敗績二度に及ぶは、其智足らざる所以なれば、この勢ひを脱くべからず。我今義武を率もてゆきて、城に蒞て恁々といはん。義同其子を思ふの故に、城を遞與して他郷に去らば、そは自他の幸ひなり。他義の與に子を棄て、殘兵をもて防ぎ戦はゞ、別に計策をもて城を抜くべし。先義武を牽せ給へ。といふに貞住こゝろ得果て、隨即兩個の雜兵を、舊海邊へ走せて、義武を守護の士卒に、告て那身を召よせけり。この時大角の隊の兵は、二度の降人を相加えて、約七八百名あり。敵の乘棄たる馬さへ得たれば、大角と貞住は、騎馬にて義武を牽

せつ、新井の城へ推寄する、隊伍齊々整々たり。愆而犬村大角は、新井の城の正門に造りて、馬を駐めつ藪を隔て、
 佐と城門を瞻仰れば、其意を得たる、一二の從兵聲高やかに喚るやう、誰かある、當城の人々にもいはん、里見の
 防禦使犬士の一人、犬村大角禮儀來り。當城の主三浦殿に對面して、説試んと思ふよしあり。姑且矢丸を飛すべ
 からず。この義を主へ傳達せよ、いかに。と喚門へば、正門を守る頭人等、うち聞て、先陝廳より透し見て、且
 驚き且慌て、隨即草占八郎、勇無頭九郎と喚做たる、兩個の小頭人をもて、義同に愆と報しかば、義同一霎時沈吟じ
 て、莞爾と笑つゝ額を拊て、兩個の小頭等に叫くやう、并は又幸ある事なりき。我今城樓にうち登りて、大角奴と問
 答せん時、鳥銃を隠し持て、他が由斷を撃ならば、只一丸にて怨を復さん。なれども間近からぬに、撃外しなば後
 悔あらん。若們は新參にて、いまだ軍陣に俱せざれども、いぬる日武藝を試しに、弓箭火銃何れとなく、人に勝
 れし本事あれば、俱に銃砲を携て、我後方に從ひ躲れて、いかで那奴を窺撃わ。よくせよ、愆つべからず。と示し
 合せて準備しつ、いそぎて城樓にうち登れば、草占八郎、勇無頭九郎も、相從ふて後方に在り。當下義同は、城樓の
 窓を開けて、左見右見つゝ喚るやう、やをれ應應兒犬村大角、爾詐詐の計をもて、船を借り我子を擒にして、姦惡
 兇暴に尙飽すや。勢に乗り城に迫りて、又何事をいはまくするや。と聲高やかに罵り問へば、大角馬を驅際に、找
 めて徐に答るやう、奥州(義同をいふ)先よく怒を理めて、我いふよしを听給へ。我禮儀、軍師胤智の相計によりて、
 船を當城に借るといへども、陥るべき爲ならず。但是寄敵の大兵を、火攻して、扇谷定正主を、愆さまく欲せし
 に、仙郎義武主、愆に我を趕蒐來て、意に鬪諍に及びしより、已ことを得ず、虜にして、則こゝに率もて來れ
 り。和殿速に先非を悔て、我を迎へて罪を謝しなば、我も亦和睦して、義武を返すべし。愆ても惑ひ醒すして、拒
 みて防箭を射んとならば、先義武の首を刎て、手に唾して城を屠らん。甚麼ぞや。と問返すを、義同は聞も果さず、
 怒れる苛聲震起て、黙れ應應兒、無禮也。我は是兩管領の親族にて、武勇をもて人に饒されしに、愛に溺れ子に願



(る 遍に 城の 井新角大てしに 擒を 武義)

て、今さら里見に從んや。といひつゝ、傍に引付措たる、
 銃砲を悄と拿揚て、只一發に大角を、窺撃んと欲するに、
 火索失てあらずなりしかば、こはいかに、と心慌て、八
 郎無頭九、疾撃すや。といひつゝ、後方を、見かへる處
 を、勇無頭九郎、草占八郎、乙と嘯きて背より、義同の
 左右の腕を、擡るばかりに無手と拿て、撞と緘伏せ登し
 蒐りて、宛虎を結紐るが像く、緊く索を被しかば、義
 同は吐嗟とばかりに、叫ぶも其甲斐あら索に、かゝる折
 から救ふべき、近習のなきを悔るのみ、呆れて眼を睜り
 て在り、遺恨やる方なかりけり。當下勇無頭九郎、草占
 八郎は、兩聲高く喚るやう、犬村主、諸軍兵、及城内な
 る人々も、耳を傾けて皆よく听ね。當城主三浦義同を
 ば、安房の藩臣、田稅戸賀九郎逸時、苦屋八郎景能が、
 謀りて既に生拘たり。城内なる士卒等、愆に、主を愆ん
 とて手を出さば、先義同を結果けて、且若們を誅戮せ
 ん。我隊の兵們城門を開きて、犬村主を招待せよ。と四
 下に示す聲と共に、義同を率立て、蚤く城樓を下り來
 て、刀を抜つゝ、義同の、頸に楚と推當れば、正門の頭人

其隊の城兵、いよ／＼驚き、ます／＼怯れて、ややや等ね。と叫ぶのみ、敢近づく者はなし。其間に逸時景能の、隊の兵十名有餘、門を開き橋を架渡して、出て大角を迎れば、大角并に貞住等は、訝りながら、事の便宜に毫も猶豫せず、馬を蚤めて、俱に城に入るれば、従ふ兵七八百名、義武を牽立て、咄と嘯きて稠入る勢ひ、崩るゝ丘に異ならねば、この城内に在りとある、士卒等齊一驚き噪きて、但嬉雜を散すが像く、皆後門より逃去りて、跡に残されし婦幼の、號哭ぶのみ多かりと聞えしかば、大角先老兵に吩咐て、舟を一緒に集合せて、且慰め且勸らせて、士卒の亂妨を戒しかば、城中亟に靜になりぬ。愆而田稅逸時、苦屋景能は、生口三浦義同を、自家の士卒に渡し守らせて、且大角等に案内をしつゝ、城の正廳に請すれば、大角則貞住等と俱に、廳で馬より下立て、設の席に就しかば、従ふ老兵武勇の毎、俱に鎧の袖を連ねて、左右二側に羅列れたり。愆而逸時景能は、又改めて大角と、貞住等に對面せんとて、俱に其席に入りしかば、大角はこの兩士の、功を賞て且いふやう、思ひきや、田稅苦屋、和殿等はいぬる比、蚤崎十一郎と共侶に、京師へ御使に立けるに、この城内に在んとは、神ならずして孰か知るべき。故こそあらめ、甚麼ぞや。と問へば逸時、先答て、然也。曩に蚤崎生と共侶に、水路を京師に赴く程に、其船遠江灘を過る時、凶類や憑にけん、行も得やらず波濤に揺られて、既に反覆んと思ふこと、屢なれば誰もかも、更に活たる心地せず、皆死を極めて在りける程に、舵工等相占ひて、蚤崎と我々に告るやう、今この船の凶類は、其生年、壬癸なる人に在り。その本命の人々を、擇除て、蚤崎にうち載て、流し棄給ひなば、自餘の人々は恙もあらで、この船又よく走るべし。いそがせ給へ。と備立れば、大家驚き憂るのみ、黙然たる牙が中に、我々二人進み出て、蚤崎生に向ひていふやう、他人は知ず我々は、壬癸の生年にて、月も亦是に丁れり。この他伴當夫役にも、必なきことを得ざるべし。這船遊山甌水の爲にして、恠る孽あるならば、俱に天命也と觀念して、浮沈を河伯に儘もせん。共に君命を承けて、京師へ赴く海上にて、免れがたき命と知りつゝ、身を犠牲に做すを惜みて、其年ならぬ人を

しも、殺さば不忠の至りこの上やある。疾難筋をうち下して、我々二人を移し載よ。今さら隠すことかは、と必死の覺期に獎されて、遂に其生年の壬癸なるを告る者、伴當に五名あり。舵工に六名あり、我々と俱に十三名、迭に別を惜みあへず、下す難筋にうち乗れば、蚤崎生もせん術なさに、只訣別の涙を沃ぎて、其天命に儘せらる。現船公の口占も、時に稱へば當れる哉。我々第十三名、別れて難筋に乗りしより、凶類立地に解にけん、本船は風のまにまに、西へ走りて見えざるなりぬ。然ばとて亦我々が、乗たる難筋は覆りもせず、回く潮水に揺られ／＼て、或は東に吹續され、或は西へ推流されて、大洋に漂ふこと、一日一夜に候ひき。といへば景能語を續て、愆而其次の日、船は入さへ恙なく、流寓りつゝ三河なる、苛子崎に就しかば、港口人等の幫助に因て、旅宿を求めて那地に在り。漂流の事の顛末、領主鄰尾殿に聞えしかば、隨即別船をもて、安房へ返すべしとありしに、漂流艱苦の傷れにやあらん、逸時并に伴當にも、病煩ふ者多かりければ、又其醫療に日を費して、十二月の初になりし時候、逸時も伴當等も、病著稍瘳りしかば、鄰尾殿に乞稟して、船を借得て還らまく欲する程に、猛可に巷の風聲あり。扇谷山内の兩管領、諸侯を連ねて、水陸より、安房上總へ推密て、里見殿を攻伐まくすといふ、其言孟浪ならざれば、我々心うち驚れて、借たる船に皆うち乗つ、連りに水路をいそがすものから、幸なき上に又幸あらず、相摸灘を過る時、暴風又吹いて、船をやるべくもあらざれば、已ことを得ず帆をうち下して、新井の浦に楸りしかば、當城の番卒等訝りて、船を出し捕籠て、緊しき來歴を鞫問しけり、登時咱等と逸時は、悄地に示し合するやう、この地の城主三浦義同は、兩管領の親族なれば、他も亦我君の怨敵也。然るを今明々地に、里見の家臣也と名告らば、必那手に殺さるべし。箇様々々にいふこそよけれ、と思ふころを伴當等にも、得させて廳で立出て、却番卒にうち向ひて、則頼陳ずるやう、我々は三河なる、鄰尾判官伊近の家臣なる、勇無頭九郎、草占八郎と喚做す者にて、俱したるは伴當也、伊近這度兩管領家の、里見を攻伐給ふよしを傳へ聞て、いかで加勢の軍兵を、まゐらすべう思へども、素より城地編

小にて、士卒多からず候へば、辭し稟せよとある君命により、我門則使に立て、五十子の城に赴く水路にて、暴風に吹勾引れて、この浦に歇り候也、と實しやかに告しかば、番卒等は然もこそとて、馳て城へ將てゆきて、事恚々として、登時三浦義同は、左右に下知して我門兩個を、問注所なる局の内へ、召よせさせつ立出て、みづから其來由を問ふに、いふこと始に殊ならねば、敢又疑はず、脱たる板齒を顯して、呵々と笑ひて却いふやう、鄰尾が忠ある志は、現賞すべき事なれども、若門主僕十餘名、多寡の知れたる人数にて、五十子の城へ參るとも、然せる御用に立べくもあらず、我折をもて傳達せん。今當城に士卒多からねば、權且こゝに留措ん。武藝に本事あるならば、前後の門を守るべし、といはれて我門推辭に由なく、牙は辱く候也。武藝は人並に候へども、何まれ仰付させ給へ、仕り候はん、といふに義同歡びて、次の日又我門兩個を、馬場に召よせて、弓箭銃術何くれとなく、武藝を盡させて試けるに、孰も正鵠を外さねば、則正門の小頭人にして、我兵貌に扱使ひぬ。といふを逸時受續ぎて、爾程に我門は、折を覘ひ脱れ去りて、安房へ還らまく思ふのみ、いまだ便宜を得ざりき。然ば昨夕大村主、和君が赤田百中と、名告て當城に來給ひて、船を昔給ひし時、夜目なりければよくも見ず、姓名も亦異なれば、心もつかてありけるに、當晚又義武が、みづから和君を道止んとて、隊の者多く從へて、出てゆきしをも思ひとせず、猶外事に思ひしに、義武の矯勇なるも、病後とはいひながら、果敢なく和君に生拘られて、今朝しも牽もて此城に、推よせ來給ふ折に及びて、那赤田百中は、即里見の犬士なる、大村某甲にてありけり、と越に聳て聞知りて、其歡びに堪ざれば、先疾城門を推開きて、迎入れまく思ひしかども、我腹心の隊の兵は、十一名に過ぎるに、惴らば愈あるべし、と思難つゝありける程に、義同火急の拙策を、拈り出しつ城樓に登りて、みづから和君と問答して、油斷を覘ひ鉄砲もて、打落さんと計りける、その折の帮助にとて、咱等二人を從へたれば、心よろこびて後方に居り。義同情地に膝下に置きし、準備の銃砲の、火索を夙く拿棄しを、義同は知ずして、發まくするに、火索なければ、うち驚きつゝ度を失ひて、見かへる腕を左右より、扼り推伏せて、結紐りて牽建候ひき。と迭代の長談脩話に、貞住并に諸士老兵、事の便宜は恚までに、幸ありけるよ。と稱えたる、就中大角は、黙と听果て、逸時と景能の、奇功を譽て且いふやう、今窺て聞く和殿等は、先に御使に立ながら、京師へ得ゆかずなりにける、風濤の艱み漂泊の苦み、是を思ひ彼を懷へば、蛭崎は恙なきや、測知るべき事ならねども、今さら女々しく思ふて益なし。和殿等風波の災なく、共に京師へ參上らば、那御使は果すべけれど、今番の大事に遇ざれば、後に悔しかりつらんに、此敵城に抑留せられて、酒家と一功を同くしぬる、禍福は糾ふ纏に似たり。こも伏姫神の冥助なる歟、不測といふも餘りあり。因て思ふに、和殿等がこゝに在りし程、詭詐の姓名も、當意即妙といひつべし。其故甚悪とならば、勇無頭九郎は田力の義也。勇は工に従ひ田に従ひ力に従ふ。頭の工なきときは、田力ならざることを得ず。及草占は苦屋の苦にて、この義は誰も悟り易かり。先義同と義武を、この處へ召よせ給へ。我對面して、いふよしあり、とくく。といそがせば、逸時景能こゝろ得果て、俱に次の間へ退りけり。然ばこの時、三浦義同義武は、里見の士卒にうち守られて、次の間にありしかば、逸時景能の實名實事を、遺もなく洩聞しかば、肇て夢の覺たる如く、いと悔しく思ひけり。恚而逸時景能は、義同義武を牽立來て、則正廳の簷廊へ、程よく楚と推居れば、大角見つゝ身を起して、先義同と義武を、受取りつ、そが儘に、上坐に推登して、被たる索を解んとするを、貞住逸時景能等は、うち驚きつゝ掖止めて、詞齊一諫るやう、虎狼の猛かるも、媚を求る者は、四足を括られたる故也。況や義同義武は、俱に是武勇に富たり、膂力百人を合すべき、勁敵なるに甚悪ぞや、被たる索を饒し給ふは、只是千慮の一失歟。慈悲も作善も敵にこそよらめ、寔に危き所行なるべし、といふを大角聞あへず、否とよ、鼎を揚げ角を劈く、多力兇猛の敵といふとも、仁義によく勝ことなし。然ば我君至仁至義の、軍令に遵由りて、この親子の索を饒すは、敵ながらも城主たる、禮を失はじと思ふのみ。然るを他等不仁にして、暴をもて我を害さば、各手を空くして、他を殺さて、見てのみ已んや。然らば

ひて、見かへる腕を左右より、扼り推伏せて、結紐りて牽建候ひき。と迭代の長談脩話に、貞住并に諸士老兵、事の便宜は恚までに、幸ありけるよ。と稱えたる、就中大角は、黙と听果て、逸時と景能の、奇功を譽て且いふやう、今窺て聞く和殿等は、先に御使に立ながら、京師へ得ゆかずなりにける、風濤の艱み漂泊の苦み、是を思ひ彼を懷へば、蛭崎は恙なきや、測知るべき事ならねども、今さら女々しく思ふて益なし。和殿等風波の災なく、共に京師へ參上らば、那御使は果すべけれど、今番の大事に遇ざれば、後に悔しかりつらんに、此敵城に抑留せられて、酒家と一功を同くしぬる、禍福は糾ふ纏に似たり。こも伏姫神の冥助なる歟、不測といふも餘りあり。因て思ふに、和殿等がこゝに在りし程、詭詐の姓名も、當意即妙といひつべし。其故甚悪とならば、勇無頭九郎は田力の義也。勇は工に従ひ田に従ひ力に従ふ。頭の工なきときは、田力ならざることを得ず。及草占は苦屋の苦にて、この義は誰も悟り易かり。先義同と義武を、この處へ召よせ給へ。我對面して、いふよしあり、とくく。といそがせば、逸時景能こゝろ得果て、俱に次の間へ退りけり。然ばこの時、三浦義同義武は、里見の士卒にうち守られて、次の間にありしかば、逸時景能の實名實事を、遺もなく洩聞しかば、肇て夢の覺たる如く、いと悔しく思ひけり。恚而逸時景能は、義同義武を牽立來て、則正廳の簷廊へ、程よく楚と推居れば、大角見つゝ身を起して、先義同と義武を、受取りつ、そが儘に、上坐に推登して、被たる索を解んとするを、貞住逸時景能等は、うち驚きつゝ掖止めて、詞齊一諫るやう、虎狼の猛かるも、媚を求る者は、四足を括られたる故也。況や義同義武は、俱に是武勇に富たり、膂力百人を合すべき、勁敵なるに甚悪ぞや、被たる索を饒し給ふは、只是千慮の一失歟。慈悲も作善も敵にこそよらめ、寔に危き所行なるべし、といふを大角聞あへず、否とよ、鼎を揚げ角を劈く、多力兇猛の敵といふとも、仁義によく勝ことなし。然ば我君至仁至義の、軍令に遵由りて、この親子の索を饒すは、敵ながらも城主たる、禮を失はじと思ふのみ。然るを他等不仁にして、暴をもて我を害さば、各手を空くして、他を殺さて、見てのみ已んや。然らば

彼等が悪名を、永く世に貽さんのみ、權且酒家に任せ給へ。と諭しつ懸て義同と、義武の索を解棄て、且慰めていふやう、成敗は天也、時運の然らしむる所、誰か和君親子を勇なしとせん。しかれども、今我爲に虜にせられて、馬前の奴に做れる者は、不仁をもて仁を伐つ、兩管領の惡を資けて、暴をなさまく欲せし故也。抑我君里見殿は、行ひ仁義にあらざることなし。こゝをもて我々まで、其仁心を仰ぎ稟て、大阪大山と共侶に、今番水隊の防禦使なれば、只大敵を防ぐのみ、多く敵を殺し、長く駆て、城を攻め地を略して、境を増すことを饒されず。然れども、鬪戦の常情にて、時氣と勢に乗るときは、敵の城地に馬を繋ぎて、我隊の兵の集合るを、懸はせざることを得ず。恁れば其間、和君御父子を水路より、藏藩河村へ送るべし。宅眷達をも船に乗て、共侶にとは思へども、婦幼は故らに、風濤の害恒あらん。この故に、御達は皆當城に留在せて、宜く扶持致すべし。この義は心易かりてん。且里見殿は仁君也、和君御父子那地に造り給はゞ、敢て囚をもて見ることもなく、禮貌必厚かるべし。恁而東西和睦ならば、御父子共に、當城に返されん事、日を俵へて俟つべきのみ、この義も心易かりてん。と詞徐に説諭せば、義武聞つゝ嗟嘆して、黙然として羞る色あり。姑且して義同は、又きたる手を解て、腕を拊つゝ答るやう、いはるゝ趣皆理あり。咱等親子は馬を馳、弓を射刀を舞するを、年頃業としつるのみ、文學智術に淺ければ、心鈍くも謀られて、且盜に糧を齎し、仇に刃を借すまでに、禍竟に、蕭牆の内より起るを悟らず、城陥りて、親子楚囚になりぬ。首を捕れば幸ならんに、豈遙々と安房へいなんや。願しからぬ情にこそ。と辭ふを大角慰めて、又逸時景能に、こゝろ得ざしつ這親子を、別室に移して守せけり。恁而大角は、士卒を水陸へ遣して、洲崎の水戦の勝敗と、山内顯定の、鎌倉なる館の光景を擧らすに、洲崎の鬪戦は、寄隊衆艦を皆火攻せられて、自家十二分の勝軍なりきと云。又鎌倉なる顯定の館には、老黨齋藤左兵衛高實が、水戦の大敗と、新井の城さへ犬村殿に、攻落されしと聞知りて、驚怖ること大かたならず。懸て主君の宅眷に俱して、館を棄蹟を埋めて、往方もしらずなりしかば、況や山内の家臣等は、

誰か一個も留るべき。家火を船に運載て、宅眷を將て、水路より落亡たり、と聞えけり。有恁し程に三浦四十八郷なる、郷士豪民、村長、莊客等は、年來里見の仁政を、慕しく思ひしかば、各々夜衣して、新井の城に詣來つゝ、俱に大角の隊に屬て、當城を守らんと願ふ者、千をもて數ふべし。又只是のみにあらず、嚮に城を棄て逃亡たる、新井の城の士卒們と、甲良龜九郎さへかへり來て、箭を折り誓を做して、降を請ふ者城に充けり。こゝをもて大角は、招ずして得ぬる所、七千あまりの隊の兵あり。然ば鎌倉は、都會の地にて、且阪東の咽喉なり。倘長氏に据られなば、後までの害ならんとて、隨即堀内雜魚太郎貞住に、雄兵三千餘名を授けて、那地へ遣して鎮守とす。貞住則山内の館を陣營にして、民に蒞むに善政をもてせしかば、賊民の亂妨あることなし。こも大角の教によりて也。恁而又大村大角は、苦屋八郎景能に課て、この地の勝軍の顛末と、那身并に逸時の奇功の趣を、洲崎の御陣へ注進して、生口義同義武を、館へまゐらすべしとて、隊の兵三百名を授けて、注進狀一通を遞敷しゝかば、景能則快船十艘に、從兵を分ち乗せて、義同親子を守護しつゝ、洲崎を投て漕せけり。爾程に犬村大角は、坐ながら三浦四十八郷を管領して、善政行はざる所なく、村長耆老に約するに、法度を寛くすれども敢て叛く者なく、稅斂の多かりしを、寡く拿れども調ざる者あらず。こゝをもて倉廩をうち開きて、鰥寡孤獨を賑しければ、民皆其德澤をうち仰ぎて、父母の思ひを做すのみならず、鎌倉及新井の郊外には、近屬豺狼多くありて、夜々人を害ひしに、禮儀が件の城に在りし日は、豺狼皆夜に紛れて、他所へ移らざるはなかりけり。豈只豺狼のみならんや、暴主奸相、佞人賊民の、好みて良善を殘害して、其害を喫む者も、必や憚るべし。實に是孟子の所云、君仁なれば不仁なし、君義なれば不義あらず。里見殿父子、この年來、行ひ給ふ善政の枝舖なれば、然もあらんとて、心あるも心なきも、謳歌俚談にしたりける。話分兩頭。是より先に扇谷定正は、洲崎の澳の鬪戦に、大阪毛野に火攻せられて、命も既に危ふかりしを、箕田源二兵衛后綱、白峰麻生介廣原等に扶掖れて、辛くして免れて、蚤く船艘に乗移りて、武藏を投て漕去る程に、從

ふ兵多からず。この時同船して左右に侍る者は、大石源左衛門憲儀、白峰麻生介廣原、箕田源二兵衛后綱、信成左傳達頼、只是のみ。この餘は士卒三百餘名、初五萬五千なりける、大兵に比れば、什一にだも足らねども、順風よければ漕脱て、約三時許の程に、逃水蚤き武藏なる、河崎の浦に船果しかば、乗棄て陸に登るに、こより五十子の城へは、三四里に過ぎねども、水路を來ぬれば馬はなし。然しも總大將の御歸城に、御歩行にてはいかがあらん、と咄く者ありしに、この日河崎の郷に馬市あり、牛馬經紀們多く集會て、馬幾疋か繋ぎてありしを、憲儀見かへり熟視て、兵每那他を見よ。那馬多く那里に在り、捉て館を乗せまつるべく、我門もうち乗て、五十子へ御伴せん。牽もて來よ。と吩咐れば、士卒們唯々と應も果ず、走りゆきつ、聲苛めしく、やをれ馬主毎、この馬守の御用也、牽もてゆくぞ。と喚りて絆兒を解きつ五六疋、奪拿んとしてければ、牛馬經紀等驚き慌て、こは理不盡に候はずや。縦守の御用とも、こは皆人に賣りたる馬也。开を價だも賜らて、召さるゝことや候。といはせも果ず、又聲劇しく、這奴等大膽不敬也。非如千金の馬にもせよ、館の急に召さるゝに、獻らずば目に物見せん、覺期をせよ。と罵りて、握固めし拳の電光、右よりも左よりも、殴き仆し又踊躍りて、其好馬を五六疋、追立々々牽もて來ぬれば、憲儀は含笑て、兇惡なれども鞍鏡、執も一具あれば、尤好、卒々といひつゝも、先一疋を牽よせさせて、纏て定正にうち乗らせて、却憲儀廣原、達頼后綱もうち乗て、俱して河崎河原に造りて、前岸へ渡さまく欲するに、舩公等は今の強虐を、遙に見つゝ害怕やしけん、船を夙くも漕退けて、前面の水際に維ぎて在り、雖喚々々漕もてよせねば、定正連りに焦燥て、とくく喚べといそがせば、憲儀いよく怒に得堪ず、士卒に下知して、舩公等を、遠箭に被て射て殺しね。と教留暴く罵るを、后綱急に禁めていふやう、我館の御威徳あるも、鬪戰敗れしこの爲體にて、御歸城をいそがせ給へば、田夫野人の侮りて、御下知に従ひまつらぬを、怒らせ給ふは鄙語にいふ、乞兒に棒撃に似たるべし。敵手に足らぬ者と知りつゝ、這里にて時を移し給はゞ、遠く追來ぬる敵もやあらん。然ば這河上なる、矢口まで造らせ給ひて、津を求

め給ふとも、然ばかり路の遠きにあらず。この義を思ひ給はずや。と利害を射て諫めしかば、憲儀は有理とばかり、答ていまだ決め得ず。定正是をうち聞て、后綱の意見、誠に然なり。然ば矢口に造らんとて、そが儘馬を歩すれば、廣原憲儀は左右に従ひ、又達頼は先に立ち、后綱は殿して、従ふ殘兵恍惚なくも、馬を逐ひつゝいそぎけり。爾程に、剛才定正の士卒等に、慘く撃仆されたる、牛馬經紀五六名あり、俱に沙に塗れ頭誓を亂して、身を起しつゝ罵れば、伏家の伯樂里の壯俊、數十名走り集りて情由を聞くあり、生听なるも、俱に遺恨に堪ざれば、慰めはせて向火を、附るのみにて術もなき、开が中に、馬淵場九郎長連と喚做たる老御者あり、牛馬經紀們的乾父にて、毎に氣を使ひ事を好み、俠氣をもて自負む、破落戸なりければ、那理不盡なる扇谷の、士卒を憎むこと大かたならず。先誰か承服せん。是等の暴は今日のみならず、上が上なれば、下までも、買係りに錢を還さず、民を虐げて身を肥したる、報ひは今日の敗軍、僅に二百數三百の、殘兵を従へて、活路索て渡せられしと云、那爲體を見ずや聞ずや、鏢百までの損ならば、厄落しと思ふて已もせめ、圓金の耳を揃ねば、賣買ならぬ活馬を、幾頭か奪略られて、和郎等明日より何をもて、宅眷に糜々を喫するぞ。疾趕蒐て拿復さずや、遲魯きも事によるものを、腰脱毎奴。と罵焚せば、是にぞ勇む牛馬經紀、里の壯俊破落戸、事を好むも、好ぬも、多勢を負む似而非武者汰に、竹槍造作、腰刀、赤檉の棒、猪水竿、或は纏額纏禪、各手ばやく身を固る、場九郎を首にて、拿殘されし馬牽よせて、うち跨る者五六名、大家競ふ开が程に、武勇を好む破落戸、這里那里より走加りて、三百餘名になりしかば、恚ては他と對應すべし。疾趕蒐よ。と脚を亂して、咄と嘯て趕たりける。有恚る折から這津に、又一夥の落人あり、是則別人ならず、曩に妙見島の柵破れて、大田小文吾に擒にせられし、彦別夜又吾數世也。彼は犬田が慈善にて、其隊の兵二百五六十名と共侶に、虚舟に載られて、流し放されたりけるに、其船大洋に流れ漂ふて、或は西、或は東して、兩三日を歴ぬる程に、今日

しも辰巳の追風を得て、この河崎の浦に漂著しけるに、定正の隊の戦艦、洲崎の澳にて、敵に火攻せられし、其一艦
 船頭のみ焦て、乗れる人は一個もあらで、股棄たる甲冑と、器械のみいと多く、燻残りたる水轆さへあるを以る
 に、扇谷家の戦艦なるを知るに足れり。原来今日那澳に鬪戦ありて、館(定正をいふ)は負させ給ひし歟。と思ふ
 に胸の安からねば、先士卒兩三名を陸に登せて、這頭の風聲を撥らするに、姑且して其兵等は、慌しくかへり来て、
 簡様々々と告るを聞くに、定正は、残兵僅に三百餘名を將て、方僅この地へ脱れ來つ、馬市なる馬幾正駄、豪奪させ
 てうち乗て、矢口のかたへ赴きし事、又牛馬經紀們が開を怨て、破落戸を三四百名、聚合て趕てゆきし事、聞知る隨
 に告しかば、數世は驚き且歡びて、隊の兵毎に談ずるやう、我妙見島にては、犬田奴に擒にせられて、大刀戎衣も身
 に添ず、汝達と共に、這船に乗せられて、放流されたりしより、稍この浦に寓けるに、幸にして自家の焦船、同じ
 浦邊に流れ來て、器械あり、戎衣あり、各々と俱に是を穿て、この弓を彎き、この鎗をもて、館に寇し奉る、歹
 人們を追撃て、岨に做すならば、先途の恥を雪るに足るべく、本領安堵疑ひなし。とくくせよ。といそがせば、
 大家俱に威勢馮て、急れ、御伴仕らん。と答て手にく焦艦なる、鎧を奪て投被々々、縮る表帶上挿の、箭を駝ひ
 弓を奪るもあり、或は鎗を挟む、準備はやくも整へば、然らばいそげ。と先に立つ、數世に従ふ其隊の残兵、河原
 傳ひに矢口を投て、飛が似くに消蒐けり。爾程に、扇谷定正は、箕田后綱が意見に因て、憲儀廣原達頼等と、残兵
 三百許を將て、矢口を投ていそぐ程に、忽焉として趕來る敵あり、其兵約莫三四百名、皆戎衣にて、騎馬五六人あ
 り、手々に器械を引提て、馬盜兒を逃すな。と異口同音に喚りて、幕地に近づくを、后綱佐と見かへりて、原来那牛
 馬經紀們が、馬を召れしを怨みまつりて、上を怕れぬ無法の狼藉、天罰思ひ知せんず。と罵ながら乗たる馬の、鏢
 づらを旋らして、來ぬるを遅し、と俟つ程もなく、現戰世の習俗にて、市人も皆武を好めば、場九郎們は物ともせ
 ず、蒐れく。と器械を振閃めかして攻戦ふ。この時后綱に従ふて、敵を柱る士卒一百餘名、尙寡きにあらねども、

潮に水戦に火攻せられて、幸く命を免れしより、纏戰飯だもあることなければ、饑て鬪戰如意ならず。恚る烏合の小
 敵に殺類されて立脚もなく、后綱危く見えしかば、定正も亦已ことを得ず、憲儀廣原達頼等と、從ふ残兵二百を找め
 て、后綱を援んとて馬を返してうち向ふ。沿處に一隊の軍兵敵の背に出来るあり、其勢僅に百五六十名皆歩行立な
 るそが中に、隊の頭人とおぼしき猛者、鎗挟みて聲高やかに、やをれ懸危兒毎無禮なせそ。管領家の四家老第一、
 大石石見守憲重の隊長に、然る兵ありと知られたる、下總妙見島の柵の頭人なりける、彦別夜又吾數世こゝに在り、
 頭を並べて刃を受よ。と名告喚り、威勢猛く、隊兵を蒐て攻破れば、箕田后綱この隊の兵も、思ひがけなき援兵に、
 誰か歡び勇ざらん。水母の骨にあふ心地して、怯む逆徒を前後より、息をも養ず攻しかば、馬淵の徒前後の敵に中り
 かねて、多く撃る、開が中に、頭領馬淵場九郎は、箕田后綱と鎗を交へて一上一下と挑戦ふ、修煉拙きにあらねど
 も、其器械竹槍なれば竟に尖頭を打折られて、怯むを后綱と聲かけて、胸前馬鬃と刺し、かば、得堪ず地上に墮と
 墜ち、馬は離れて横路のかたへ、走れば人も逃迷ひて、撃る、者ぞ多かりける。然ば數世が援によりて、然しも剛か
 る多勢の逆徒は、或は撃れ或は又往方は知す逃亡て、路の障導の開けしかば、大家歡ぶそが中に、定正は今料らずも
 彦別夜又吾が忠戰を、いと訝しく思ひしかば、則大石憲儀をもて、騎馬の邊に召よせて、みづから來意を聞まくす
 るに、彦別數世はおそるく憲儀に向ひて稟すやう、臣等はいぬる夜里見の防禦使、犬田小文吾悌順に、妙見島の柵
 を攻破られて、憶ず敗軍に及びしかば、只得殘兵百五六十名を從へて、船に乗りつゝ、虎口を脱れて、再戦せまく思ふ
 に似ず、其船海へ推流されて、一日二日と漂ひつゝ、今日しも河崎の浦に船の寄りし時、那地の逆徒多く聚合て、館
 を追蒐まつらんとて、既に打出にきといふ、風聲はやく聞えしかば、うち驚きつゝ、御迹を、慕ふてこゝに來にける
 に、果して中途に御難義あり、因て一臂の力を勤せて、御伴の衆と共に、賊徒を夷け候ひき。と實事虚談うちませ
 て、今この僥幸の功を負みて説誇る、詞もいまだ果ざる折から、又この河原の横路より、趕蒐來ぬる勁敵あり、是

則別人ならず、犬山道節忠與也。剛才この地の圍戰に、主を喪ひて走り來ぬる、馬を捕駐てうち乗る者甲乙俱に三騎なる、左に荒川太郎一郎清英あり、右に印東小六明相あり。隊の兵一千五六百名一隊に做して前後を亂さず、魚鱗鶴翼に相備て、群たる虎の谷を下りて、羊を逐へる威勢振然、四下に响く武者聲矢銳く、蓬し定正、背な見せそ。往る正月高嶽にて、備が頭甲を射て落して、舊君の讐を復すものから、いまだ首級を捕ずして、盡すに足らねば飽りとせざりし、煉馬の舊臣武藏の豪傑、今は里見の防禦使なる、犬山道節金碗忠與なるぞ。忘れせし返せしと喚れば、驚き怖るゝ定正はさら也、憲儀廣原達頼后綱、數世と俱に吐嗟とばかり、胸を潰せる再度の勁敵、免るべくもあらざれば、殘兵四百五六十名を、找めて路を斷塞ぎて、敵を河原へ出さじとて、一霎時は防ぎ戦へども、印東明相荒川清英眞先に馬を馳入れて、鎗もて敵を刺す、武勇に傲ふ其隊の雄兵、咄と嘯て三七二十一に、駈取り又擊亂せば、然らでも饑たる士卒們は、この勁敵に殺顔されて、或は瘡を負ひ命を殞し、殘るは夙く逃亡て、隊班になりしかば、數世は印東小六に撃れ、又白峯廣原と信城達頼は道節清英に撃れけり。开が中に獨箕田后綱は數箇所の痛瘡を負ながら、只定正を一步も、遠く落さんと思ひしかば、近習の壯佼兩三人と、俱に踏止り血戦して、竟に一騎も免るゝ者なく、亂軍の中に皆戰死して、人に臣たる義を失はず、敵ながらもこの人ありとて、道節は是を譽にけり。然ばとて定正を、漏すべきにあらざれば、暮初る路の向きを教ずして、明相清英と俱に、馬を馳へもあへず、鞭を鳴らし隊兵を驅て、那里までもと赶ふたりける。爾程に扇谷定正は、大石憲儀と俱に主従二騎、僅に従ふ近習三名を、左右に立せつ、津を索ねて手束弓、矢口を投てゆく程に、赶蒐來ぬる荒川清英、印東明相二騎の頭人、隊兵を找めて寔馬と、人馬の脚响近づきて、免るべくもあらざれば、定正に相従ふ、三個の近習等已ことを得ず、引返し相逆へて、防ぎ戦ふ歟と見る程に、怯れたりけん、然はあらで、這頭に限ある竹藪に、潛り入つゝ逃亡けり。明相清英是を見て、定正今は没脚蟹也。手捕にせん、と馬を並べて、連に競ふ那時遅し、這時速し、那聚竹の藪屏を、内より托地と推倒して、

顯れ出る、援助の隊長、後より續く雄兵四五百、蚤く隊を建固めて、銃砲隙なく發出す、銃响烈しかりければ、明相清英士卒を制めて、敢 叨に戦はず。當下件の隊長は、今竹藪に逃入し、定正の近習三名を、逃しも遣らず撃捕りけん、鎗の尖頭に串きし、其首級を振棄て、敵に向ひて喚るやう、追隊の壯佼等憐りなせそ。我は父道灌の密意に因て、隊の兵を將て這地方に、來つゝ我君を俟得たる、巨田新六郎助友也。と名告も果ぬその折に、道節馬を走らせ來つ、原來助友ごさんなれ。那奴は荒芽山の宿怨あり。先那奴より撃捕ずば、竟に定正を漏しやせん。印東荒川、躊躇ふことかは、兵每蒐れ、と焦燥ば、明相清英血氣の衆兵、承りぬ。と應も果す、入亂れてぞ戦ひける。正に是老龍虎魁、雌雄を争ふ、豈凡庸の圍戰ならんや、一場の大殺思ふべし。然ば足曳の山も、是が爲に鳴動して、群獸走り、勇魚取る海も、是が爲に風噪きて、鮮介も洗みやせん。この段け尙長やかにて、五卷にしていまだ足らず、腹稿あまりあるをもて、又三卷を増て局を結ばん。江湖上の諸看官、這兩雄の勝負を知らく欲くば、又卷を更めて、且下の回に、解分るを聴ねかし。

昭和五年八月二十六日印
 昭和五年八月二十五日發
 二十九

特製
 第二十七回配本
 追加募集
 第二十三回配本

【非賣品】

帝國文庫
 (第二十八篇)
 南總里見八犬傳
 (三)

編輯兼
 發行所

右代表者
 取締役社長

株式會社
 博文館

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

印刷者

大橋進一
 君島潔

東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所
 株式會社
 博文館

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

振替口座東京二四〇番

製版所 共同印刷株式會社
 印刷所 共同印刷株式會社
 製紙所 共同印刷株式會社
 製本所 共同印刷株式會社
 函所 共同印刷株式會社
 製函所 共同印刷株式會社
 中條製本所
 香取製函所

Small decorative label on the left edge of the left page.

卷四十八
(四十八卷)
附錄是及八夫計
(50)

Vertical text on the left side of the right page, possibly a page number or reference.

Vertical text on the left side of the right page, possibly a page number or reference.

大
一

Vertical text on the right side of the right page, possibly a page number or reference.

583
15

